Ⅲ．調査研究

伊勢湾周辺地域の磨製石包丁、若しくはその象徴性

加藤安信

Ⅰ．はじめに

稲作農耕において、米の収穫作業は一連の生産活動と作業工程の最後の段階にやってくる。このため、収穫作業には生産者の労苦や喜び、感謝などの様々な想いが凝縮されており、収穫期は農耕民の一年の生活において最もリズムが高揚し、緊張感が高まっていく時期であるということができる。たとえば、1993年に日本の東北地方を中心にして発生した冷害時に現れた諸現象を例にとってみても分かるように、極端な不作は米作り最後の収穫段階で生産者に対して大きな失望と落胆とを与え、そのことが原因となって社会生活の他の分野へも様々な影響をもたらしていく。豊作は生産者に喜びを、そしていっぽう不作は深い悲しみを与えるのである。このことは極めて単純なことであって、時代を遡れば上るほど収穫時における生産者の気持ちはより素直にかつ素朴な形態で表現されていたであろうと考える。

弥生時代の石包丁は、収穫用穂摘具として大陸系磨製石器の一群に含まれてわが国にやってきた農具の一つである。石包丁については、古く1930年代の森本六爾（1934）や小林行雄（1937）による研究が始まって以降、東アジアの中での日本稲作の系譜を捉える資料として扱った石毛直道(1968Ａ・Ｂ)、同じく中国・朝鮮・日本の資料の形態分類によって稲作起源の問題を追求した下條信行(1980)、他の石器をも含めた組成から地域・集団の生業形態や社会構造を問題にした酒井龍一（1974、1986、1989)、使用痕分析に基づいた石包丁の使用法の解明を進めた御堂島正（1989Ａ・Ｂ・Ｃ、1990、1991、1993）らによる業績が積み重ねられてきた。またこの他に、野本孝明（1989）や斎野裕彦（1993）らによる東日本地域を対象とした地域的研究や、埋蔵文化財研究会（1992）による全国的な大陸系磨製石器の集成と分析があり、いずれも石包丁についての基礎的理解を進める上で意味を持っている。

しかし、それにしても磨製石包丁は謎めいた石器の一つである。分布の偏りと地域的希薄性、石材選択の共通性などの古くて新しい問題が未だに残されている。本稿では、上記の諸業績に依拠しつつ、これまで資料提示不足の感が否めなかった伊勢湾周辺地域における磨製石包丁の出土状況を再整理すると共に、不定形刃器あるいは横刃形石器と呼ばれる石器との関わりや分布の希薄性の〈意味〉、その象徴性について考えるものである。

Ⅱ．伊勢湾周辺地域の磨製石包丁と打製刃器

Ⅱ－１．磨製石包丁の分布と量

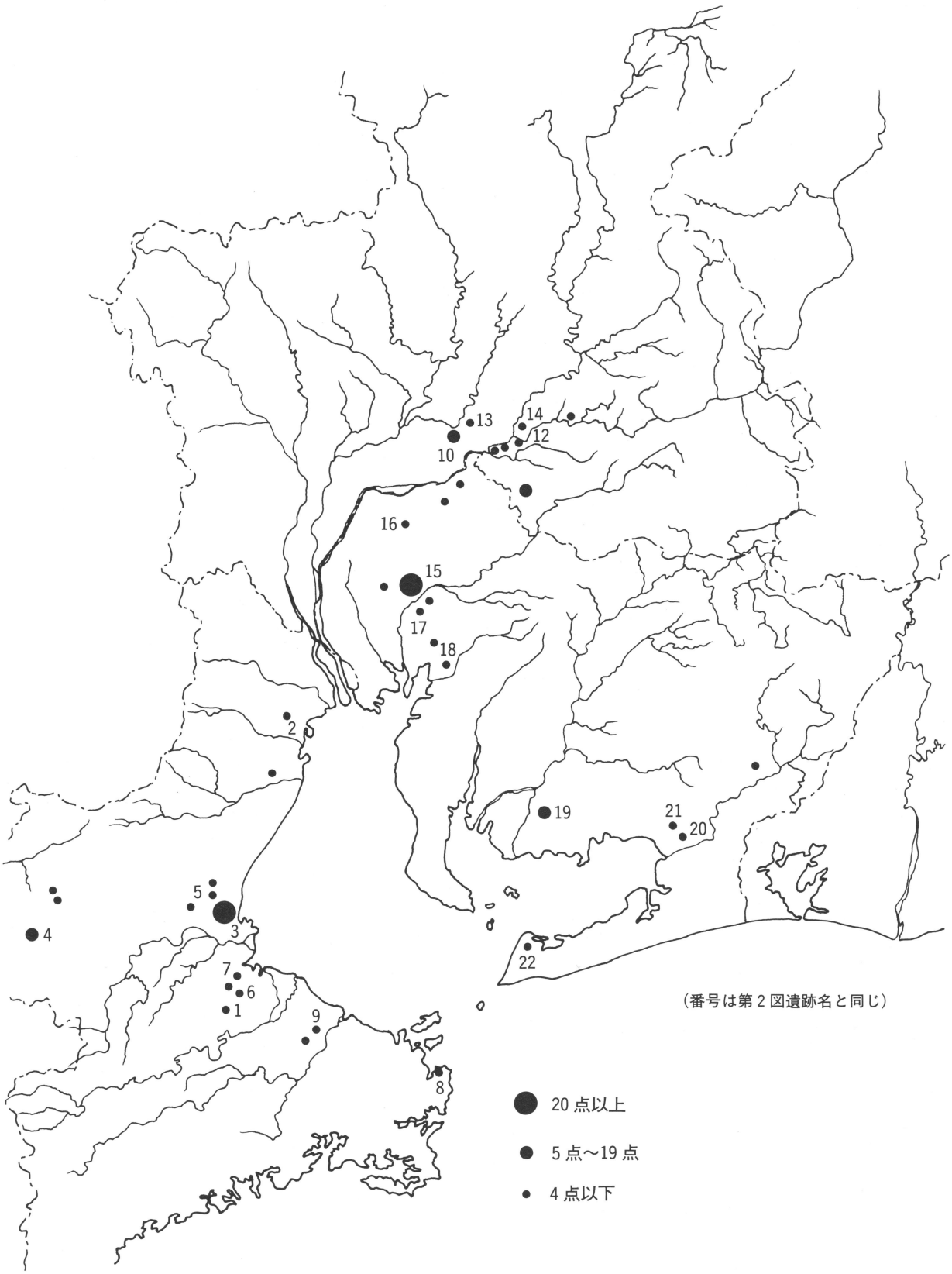
まずはじめに、これまでに伊勢湾周辺地域に属する三重、岐阜、愛知の３県内から出土または採集された資料を一覧してみる（表１、第１図)。不明確な部分もあるが、合計で207点ほどが知られている。

三重県では、伊勢平野最古の弥生集落の一つである納所遺跡から図示した７点を含め45点が出土しているのを始めとして、16遺跡から72点ほどが発見されている。その多くが、津市、松阪市、鳥羽市などの伊勢平野に立地する遺跡に限られている点に分布上の特色がある。このうち杉垣内遺跡と山籠遺跡から出土した各１点と納所遺跡の２点の計４点は大形の磨製石包丁である。

表Ⅰ．伊勢湾周辺地域の石包丁類一覧表

出土地	遺跡名	点数	磨製	打製	石材	時期	備考
三重・四日市市	永井	2		2	黒色頁岩	前・中	市教委1973
三重・伊勢市	中楽山	1	1		緑色片岩	後	県教委1973
三重・津市	納所	7	7		—	前・中	破片も含め45点
		(うち2点は大形)					県教委1980
三重・津市	山籠	1	1(大形)		結晶片岩	Ⅳ	県教委・センター1990
三重・津市	長	1	1		—	Ⅳ	市教委1989
三重・松坂市	杉垣内	1	1(大杉)		緑泥片岩	Ⅳ	
		(他に不定形刃器あり)					
三重・松坂市	堂ノ後	3	3		緑色片岩	Ⅳ・Ⅴ	〃
三重・松坂市	浦早崎	4	4		粘板岩	—	市教委1992
三重・松坂市	久保南組	1	1		—	前	東海の先史1981
三重・鳥羽市	白浜	1	1		塩基性結晶片岩	後	調査委員会1990
三重・鈴鹿市	中尾山	1か			—	中	県センター年報1990
三重・上野市	澤田	1	1		粘板岩	後	県教委・センター1991
三重・上野市	森脇	1か			—	中・後	県センター年報
三重・名張市	下川原	8	8		—	Ⅳ	市調査会1986・90
三重・安濃町	平田古墳下	1	1		結晶片岩	Ⅱ	町調査会1987
三重・一志町	馬ノ瀬	2	2		緑泥片岩	Ⅳ	調査会1991
三重・玉城町	赤垣内	2	2		—	後か	県教委1979
岐阜・美濃加茂市	尾崎	1	1		粘板岩	後	きずな6号
岐阜・美濃加茂市	今	1	1		凝灰質砂岩	後	県・市教委1979
岐阜・美濃加茂市	信友	1	1		—	—	東海の先史・総括
岐阜・美濃加茂市	欠ノ上	1か	1か		—	後	きずな6号
岐阜・美濃加茂市	牧野小山	2		2	—	Ⅲ	県・市教委1973
岐阜・各務原市	炉畑	1か		1か	安山岩	樫王	市教委1973
岐阜・可児市	北裏	1	1		—	Ⅲ・Ⅳ	調査団1973
岐阜・可児市	宮之脇	3	2	1か	粘板岩2、？1	Ⅳ主	県・市教委1976
岐阜・可児市	藤之井北	2	2		—	—	東海の先史・総括
岐阜・多治見市	根本	5	4	1	粘板岩	Ⅲ	県・市教委1991
岐阜・関市	大杉	6	6か		—	Ⅲ	東海の先史・総括
岐阜・富加町	半布里	3	2	1	—	Ⅳ	県教委1981
岐阜・上村	辻見堂	1(不定形刃器か)			—	後	東海の先史・総括
岐阜・御嵩町	比衣	1	1		—	—	国学院大紀要5
岐阜・八百津町	六ノ坪	1カ	(手鎌)		—	Ⅲ	東海の先史・総括
岐阜・青墓村	牧野	1カ			—	後	〃
愛知・名古屋市	名古屋城三の丸	1	1		頁岩	中	センター1990
愛知・名古屋市	西志賀	1	1(石鎌)		—	前	東海の先史・総括
愛知・名古屋市	富士見町	1	1		—	—	川合剛氏教示
愛知・名古屋市	見晴台	1	1		緑色頁岩	後	市教委1978
愛知・犬山市	上野	1	1		—	中	石黒立人氏教示
愛知・一宮市	元屋敷	8(横刃形石器)			—	Ⅰ	市史資料編1967
愛知・一宮市	山中	1	1		頁岩	前か	センター1992
		(他に不定形刃器4点)					
愛知・一宮市	町屋	1	1(手鎌)		—	中・後	東海の先史・総括
愛知・清洲町	朝日貝殻山	1	1		—	前	県教委1972
愛知・清洲町	朝日	1	1		緑色千枚岩	中・後	県教委1975
愛知・清洲町	朝日	25	25		緑色千枚岩9、凝灰質頁岩源千枚岩6、凝灰質砂岩4、頁岩3、珪質頁岩3	中・後	県教委1982
		(他に不定形刃器38点)					
愛知・清洲町	朝日	58	58		—	中・後	センター1993
		(他に光沢を持つ粗製剝片石器27点)					
愛知・清洲町	二反地	1	1		—	—	
愛知・春日町	朝日	1	1		—	—	村教委1974
愛知・甚目寺町	阿弥陀寺	不定形刃器67				中	センター1990
愛知・甚目寺町	森南	1	1		緑色片岩	中・後	町教委1990
愛知・大口町	向江	1	1		粘板岩	後	町教委1980
愛知・西尾市	岡島	11	11		塩基性凝灰岩10、緑色片岩	中・後	センター1990
愛知・西尾市	岡島	2	2		緑色片岩、紅レン石片岩1	中・後	センター1993
愛知・豊橋市	瓜郷	2	2		緑泥片岩	中	市教委1963
愛知・豊川市	麻生田大橋	3(横刃形石器)			—	縄晩か	市教委1985
愛知・新城市	南貝津	2	1	1か	結晶片岩、緑色片岩	後	市教委1989
愛知・小坂井町	平井稲荷山	1(横刃形石器)			緑色片岩	前か	町教委1992
愛知・小坂井町	篠束	2	2		緑色片岩	中・後	町教委1960・61
愛知・田原町	山崎	1(横刃形石器)			硬砂岩	後	町教委1993
愛知・渥美町	小森	1	1		—	—	

（注）この表は主として調査報告書に基づき作成した。



第１図　伊勢湾周辺地域における磨製石包丁等出土遺跡分布図

岐阜県では、根本遺跡や宮之脇遺跡、藤之井北遺跡などで複数出土が認められる他は、殆ど単数出土に留まっている。管見に及んだ範囲では12遺跡21点ほどとなっていて、野本（1989）が述べるような東海３県のうちで最も多い状況を示しているわけではない。むしろ、その逆となっている。分布の中心が可児市や多治見市、美濃加茂市などの木曽川中流域にある点に特徴があり、濃尾平野の低湿地に立地する遺跡からは殆ど認められてはいない。

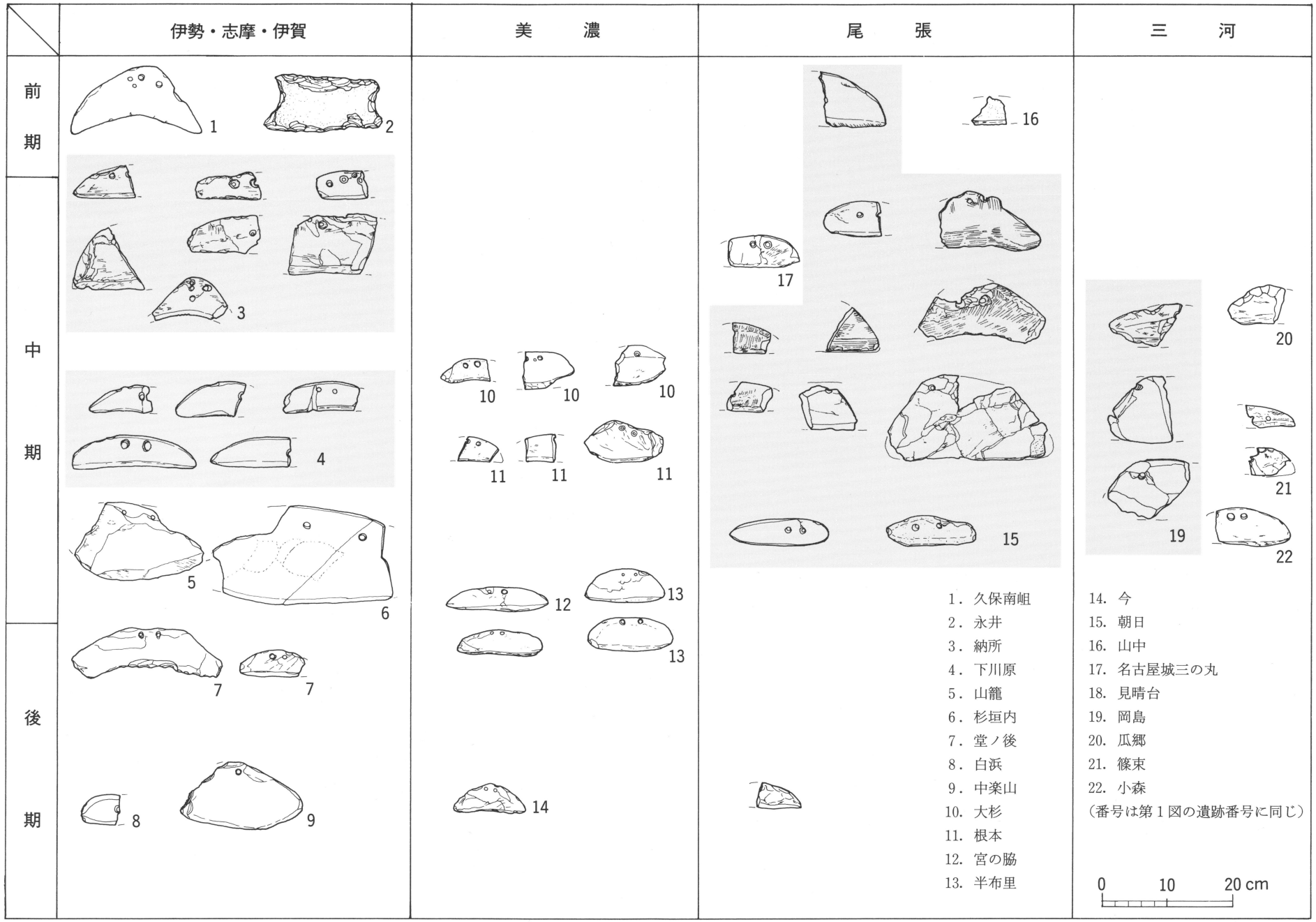
愛知県内では14遺跡から114点ほどが確認されているが、なかでも朝日遺跡からの出土量が群を抜いている。朝日遺跡では、これまでに破片・未製品を含めて87点の出土がみられ、県内出土のおよそ75％を占めるに至っている。90,000㎡に近い広い面積が調査されたという点に留意を払うのはもちろんのこととしても、このような多数の磨製石包丁を出土すること自体が、伊勢湾周辺地域における朝日遺跡の位置を極めて特異なものにしているのである。尾張地域では、これを除くと、濃尾平野沖積地、名古屋台地上立地とを問わず、単数出土しかみられない遺跡が殆んどとなっている。

いっぽう、三河地域では、矢作川下流域の環濠集落遺跡である岡島遺跡から13点が発見されてはいるものの、出土遺跡は瓜郷遺跡や篠束遺跡、小森遺跡など極めて少数に限られている。集落の中心部分の調査ではなかったにもかかわらず岡島遺跡からの出土点数が多くなっているのは、朝日遺跡の場合と同様に、26,000㎡にちかい広い面積の調査が行われたことに因るところが大きいとみられる。尾張地域に比べて、三河地域でその分布が希薄になっている現象は、磨製石包丁の広がりが静岡県内を始めとする東海東部地域から関東地方にかけて殆ど見られなくなっていく状況に通じていくものである。

Ⅱ－２．形態と時期

単純で明快な森下英治（1992）の分類（基本的には石毛、下條の分類と同一）に従って、破片状態のために形態分類が殆んど不可能な資料を除いて、第２図に示した51点のみに限って分類してみると、外湾刃直背形態（Ａ形態）０点、外湾刃丸背形態（Ｂ形態、杏仁形はここに含める）１点、直刃丸背形態（Ｃ形態）47点、直刃直背形態（Ｄ形態）３点に区別される。ここでは、刃部がやや内湾している三重県久保南岨遺跡や納所遺跡、堂ノ後遺跡、愛知県朝日遺跡の計５点の資料については、刃部研ぎ直しによる結果と考えて直刃丸背形態に含めた。全体的な傾向として、圧倒的に直刃丸背形態の多いことが窺い知れる。外湾刃丸背形態は朝日遺跡、岐阜県尾崎遺跡から各１点出土しているのみであり、また、おおよその全形を窺いうる直刃直背形態も納所遺跡で数例が認められているにすぎない。朝日遺跡から得られた破片資料の２、３点もあるいは同類に含めてよいかも知れない。さらに、朝日遺跡からは直背を呈した資料が１点出土しているが、欠損部分が多いため、これを外湾刃直背形態と認定することはややためらわれる。したがって、外湾刃直背形態の確実な出土例は、現状による限り伊勢湾周辺地域では認められてはいないと考えた方がよい。他に、丸背部分の中央が盛り上がり三角形に近い状態を呈している大形品が、三重県山篭遺跡（１点）、三重県杉垣内遺跡（１点）、朝日遺跡（３点）から出土している。

石包丁の所属時期の問題については、明瞭な共伴土器がみられなかったり、あるいは包含層中からの出土例が多くあったりして、その特定を困難にしている。確実な前期の資料としては、朝日遺跡貝殻山貝塚地点、久保南岨遺跡、納所遺跡出土の３資料をあげることができる。あるいは愛知県山中遺跡から出土した刃部に鋸歯状の刻みを持つものも、出土状況からみてこれに加えてよいかも



第2図　伊勢湾周辺地域における磨製石包丁の時期別分布図
（各調査報告書の実測図から作成。時期については中心時期の位置に配置してあり、実際には幅がある）

知れない。ただし、納所遺跡では中期までのものを含み、また最多量の出土をみた朝日遺跡の資料の大半は中・後期に属していて、厳密な時期細分は難しいようである。総体的にⅢ・Ⅳ期の資料が最も多く、後期では山中式期まで用いられたと考えることができる。

以上をまとめて、地域別に配列したのが第2図である。ここから、前期から後期までの分布がみられるのは伊勢と尾張の2地域のみであり、美濃地域と三河地域ではⅢ期、すなわち中期中ごろ以降になって初めて出現していることが読み取れる。現状では美濃の平地部での解明が進んではいないために、早急な結論を下すべきではないとも考えるが、大陸系磨製石器を伴った水田稲作農耕集団と技術は、伊勢の海を主たる交通路として当地域へとやってきて、まず伊勢・尾張地域に定着したとみることができる。そして、形態的には最も古い段階からみられる直刃丸背形態の磨製石包丁が一貫して当地域の石包丁の主流をなし、納所遺跡などにみられるような直刃直背形態や少例の外湾刃丸背形態の磨製石包丁が中、後期の段階でこれに加わっていく展開を示したといえる。そして遅くともⅤ期前半には消失していき、鉄製農具へと転換していったようである。

Ⅱ－3．石材の選択性

磨製石包丁の素材として、軟らかくて片理性を持ち加工が比較的容易な粘板岩や片岩系の岩石が用いられている点は、全国的に共通している。伊勢湾周辺地域で磨製石包丁の素材とされた岩石としては、粘板岩、緑色片岩、緑泥片岩、結晶片岩、緑色千枚岩、珪質頁岩、頁岩、凝灰岩などがあり、中でも粘板岩と緑色片岩の使用される頻度数が最も高い。石材の分類名については、肉眼観察を行った分析者によって若干異なる場合がみられるが、緑色片岩、緑泥片岩、緑色千枚岩は同類と見なすことが可能である。たとえば具体例として1982年に示された朝日遺跡の25点を例にとってみると、緑色千枚岩9点、凝灰質頁岩源千枚岩6点、凝灰質砂岩3点、頁岩3点、珪質頁岩3点に分類されていて（加藤・諏訪、1982）、片岩や頁岩系統の岩石が主体をなしている。磨製石包丁の製作が、素材に関するきわめて強い選択性を示し、共通性を生み出している点は、これまで以上に強調されてもよい。

緑色片岩の産出地は、伊勢湾周辺地域では豊川以南の外帯に位置している。今までのところ、遺跡から出土した石包丁の原材が、具体的にどの地点で得られたのかは明らかとなっていない。仮に当地域の外帯の緑色片岩を素材にしているのであるならば、磨製石包丁の分布希薄な地域から入手していることになるから、入手をめぐる新たな問題を考えなければならないことになる。しかも、福岡県立岩遺跡や大阪府池上遺跡、奈良県唐古遺跡のような製作跡を示す遺構、あるいは剥片類の濃密な分布に表された製作に関わる状況証拠などは、納所遺跡においても、朝日遺跡においても検出されてはいない。しかし、製作工程の仕上げ段階、つまり「研磨」工程のみを示しているのかも知れず、さらに、未製品の出土は遺跡現地においてなんらかの製作・加工が行われていたことを示唆している。

Ⅱ－4．打製石包丁と横刃形石器の問題

定型化した打製石包丁の出土が少例である点は、二、三の例外的地域を含んでいる西日本地域とも共通しており、必ずしも伊勢湾周辺地域を特徴づける要素になっているとはいえない。調査報告書等で打製と記されていたり、あるいは一見して打製と見受けられる資料の中でも打製石包丁には該当しない例が含まれているので、その出土事例は報告書記載例よりもさらに少なくなると考えられる。たとえば岐阜県半布里遺跡の第4図9の資料（岐阜県教委、1981）は外湾刃丸背形態の未製品

とも横刃形石器とも見受けられるものであるが、紐用の穿孔も両端のえぐりも見られないことからすれば、打製石包丁に含められうるものではない。また、岐阜県根本遺跡の図15－41の資料（岐阜県教委・多治見市教委、1991）や岐阜県牧野小山遺跡出土の２点(岐阜県教委・美濃加茂市教委、1973)も紐用の穿孔またはえぐりが認められず定型を保持してはいないので、刃器の部類に加えた方がよいと考えられる。

こうしてみると、現在までに当地域で確認されている打製石包丁は、三重県永井遺跡の資料のみとなる。ここでは２点の打製石包丁が前期の溝から相当量の遠賀川式の壺・甕類と少量の大洞A′式系の鉢・条痕紋の甕とに混じって出土している。いずれも頁岩製で、左右両端に紐かけ用のえぐりがみられる。２点とも石毛分類のA形態に分類され、周縁に小剝離による調整痕を持っていて、２点の内の１点は明瞭な片刃に仕上げられている。

えぐり入り打製石包丁は、西日本では宮崎県や岡山県南部、香川県、愛媛県、徳島県などにみられ、また東日本では長野県伊那谷地域を中心に弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて盛行したものであるが、少なくとも当地域では空間的な広がりを持たず、しかも時間的にもその後の展開を見せずに単発的に終ってしまったようである。永井遺跡では磨製石包丁が１点もみられず、また典型的な大陸系磨製石器類についても、扁平片刃石斧・柱状片刃石斧が中期の方形周溝墓などから少量出土しているにすぎないため、打製石包丁の系譜は、あるいは条痕紋土器や大洞系土器の方に求められるべきかもしれない。資料増加を待って検討されるべき事項である。

いっぽう、定型化されていない刃器もいくつかの遺跡から発見されている。それらは不定形刃器、横刃形石器として分類されることが多く、スクレーパーとして一括されている場合もある。ところで、鋭利な刃部を持つそれら（ここでは細かい形態分類には拘泥せずに、不定形刃器、横刃形石器、スクレーパー、刃器と呼ばれている一群を横刃形石器として扱っておく）の使用法については様々な論議がある。『朝日遺跡Ⅳ』（1993）の中で、同遺跡から出土した刃部に光沢痕の認められる29点の資料（ここでは「粗製剝片石器」としている）について顕微鏡観察を行った町田勝則（1993）によれば、調整加工された横刃形ｂ類とえぐり入形ｃ類（有肩扇状形石器）にはイネ科植物を切る作業に用いられた痕跡が認められるとされ、これによりそれらは農業関連の道具であったと捉えられている。また、このような刃器の中には、他に叩いたり、しごいたりする作業に使用されたものや、作業対象物が植物のみに限定されるものではなく、木・骨・石であった可能性があることも指摘されている。これはある意味で、横刃形石器にはいくつかの機能的要素が形態としては未分化のままの状態で含まれていることを表している。換言すれば、それらは製作が簡単であるが故に、多機能がまだ形態として細分・特殊化してはいない段階にある道具であるということができる。朝日遺跡においては、1982年に刊行された報告書の中で提示されている38点の横刃形石器のうちにも、刃部に光沢痕が認められるものがいくつかあると報告されている。このような刃部に確認される使用痕については、磨製・打製石包丁を含めた長野県恒川遺跡群の資料を取り扱った御堂島正の一連の分析研究があり、その中で、磨製石包丁、「扶入打製石包丁」、「横刃型石包丁」ともに、イネ科草本を穂から刈り取る作業に用いられたものであることを明らかにしている。これに対し、山田しょう(1987)や斎野（1993）は、宮城県富沢遺跡の資料などから、「大型直縁刃石器」と呼ぶ刃器はイネ科植物などの根刈りも含めた切断に機能したとの指摘を行っている。

そうしてみると、全ての資料に対して分析検討が加えられている現状であるとは言えないものの、朝日遺跡出土例にみられるように、伊勢湾周辺地域から発見された弥生時代の横刃形石器の相当部分が、農耕作業における収穫具として使用されていた可能性は高いと見ることができる。このような観点に立って改めて当地域における横刃形石器の出土状況をながめてみると、先の永井遺跡では11点、三重県杉垣内遺跡では数点、愛知県元屋敷遺跡では８点、山中遺跡でも４点の横刃形石器の出土が認められる。既述のように、朝日遺跡では1982年刊の報告書段階で38点、1993年刊の報告書に示された粗製剥片石器のうちで刃部に光沢を持つもののみに限ってみても27点の出土がある。さらに同遺跡に程近い愛知県阿弥陀寺遺跡でも７点ほどが確認されている。この他に、調査時点で残念ながら意識に上らずに記録化されなかった剥片類も幾つかあるだろう。したがって、稲の収穫作業の中でこれらの刃器類が磨製石包丁の僅少さを補う従属的かつ補完的な道具として使用されていたのではなく、むしろ主要道具のひとつとしての役割を担っていたであろうことは充分に想定されるわけである。

Ⅲ．磨製石包丁の象徴性

このような地域的状況を踏まえて、次に磨製石包丁に関する一、二の問題点について論じてみたいと考える。論点は、主として数量の僅少さに内在する日常的取り扱いの問題、及び社会の中での所有をめぐる集団相互間の位置づけの問題についての２点である。

Ⅲ－１．儀礼と実用、聖と俗

伊勢湾周辺地域の弥生時代集落から発見される磨製石包丁の量が極めて少ないことは、以上に明らかにした通りで、ほとんどが１、２点の出土に限られている。むしろ出土しない弥生時代集落の方が多いような状況ですらある。最多量の出土をみた朝日遺跡においても、出土総点数を調査面積で徐すれば100㎡当たり0.096点、また確認されている竪穴建物棟数で除しても１棟当たり0.19点となって、決して高い数値を示しているわけではない。まして、13点の出土をみている岡島遺跡においては100㎡当たり0.05点となって、さらに低い値を示すことになる。

このような量的な僅少性という問題については、多数の弥生時代遺跡から磨製石包丁が検出されている西日本地域においても同様の傾向として窺われていて、大阪府亀井遺跡や池上曽根遺跡、高宮八丁遺跡、香川県鴨部河田遺跡のように数百点に上る出土のみられる方がむしろ例外的事例であるといわなければならない。

すると、このような現象を理解するためには、磨製石包丁についての新たな解釈が求められることになる。私は、かかる僅少さの理由は磨製石包丁の収穫段階での使用形態そのものに関連していると考える。すなわち、磨製の石包丁は収穫時において儀礼的に用いられたのみであり、実用的・日常的な収穫具としてはいわゆる横刃形石器の類の刃器が使用されていたと解釈するものである。つまり、磨製石包丁は、稲作農民にとって最も緊張感が高まっていく稲作農耕最後の工程であるところの収穫場面において象徴儀礼用に限定して用いられたと考えられるのであり、おそらくそれは神への感謝の意味を込めた所作として執り行われたものであろう。あるいは、初穂を祀る穀霊祭祀に係るものであったかも知れない（春成、1982）。

この象徴性の究極に大形の磨製石包丁がある。たとえば、朝日遺跡から発見された１点を例にとってみよう。これは幅13cm×長さ25cmの大形品であり、いわばバカ包丁とでも命名したいような製品である。したがって、平均的な大きさの石包丁と同じような形態で掌中に収めて使用されたとは

とうてい考えられないものである。だがしかし、紐用の穿孔は約束事として確実に行われている。紐用穿孔が施されているのは、納所遺跡、杉垣内遺跡、山篭遺跡あるいは福井県吉河遺跡出土の大形磨製石包丁の場合でも同じである。このような大形品は明らかに非実用品と考えられ、儀礼的な場合にのみ使用されたであろうことを最もよく示している。

石包丁にみられる象徴性に関しては、すでに早い段階に石毛が東南アジアの島々の地域の民俗事例として、「儀礼的な収穫にさいしては、鎌は使用せず、穂摘具で穂の直下よりの収穫を行なったり、初穂を供物として使用するときには、かならず穂を単位として供える」(石毛、1968A) 例を紹介しているし、また佐川正敏・青山和夫も中国雲南省怒江地区独龍族の民俗事例として陳振中の見解を引きながら、「鉄鋌を実用しながら石包丁を穀物倉の中にしまい（石包丁や石斧には福が宿り、それが穀物に影響して食に不自由しないとされる）伝世していることから、古期にもそうしたことがあったのではないかと推定している」(佐川・青山、1986)。前者は儀礼に際しての穂摘具の使用法を示し、いっぽう後者は石包丁の象徴性を示している。

東アジアの民俗事例が直接的にわが国の弥生時代にも当てはまるというわけではないが、磨製石包丁の使用法と儀礼は大陸系磨製石器の一群に含まれる形で、最古の稲作農耕の段階からわが国に到来してきており、基本的には遠賀川式土器とセットになって東日本地域にまで広がっていったと考えるわけである。

したがって、以上から、磨製石包丁は聖的・非日常的なものを、いっぽう、打製の横刃形石器は俗的・日常的なものを象徴し、弥生時代人の精神構造の一端が現れていると考える。そこで仮に、磨製石包丁を稲の実際的な収穫行為の中における〈周縁〉、いっぽう刃器類を〈中心〉として位置づけるならば、池上嘉彦の次のような考え方はある程度参考になる。すなわち、

「〈中心〉が秩序化が完全で安定しているのに対して、〈周縁〉は秩序化が不完全で不安定である。〈中心〉がその〈日常性〉の故に〈優位〉に立ち、〈無徴〉であるのに対し、〈周縁〉はその〈非日常性〉の故に〈劣性〉で、〈有徴〉である。(略)〈中心〉は何かが起こっていて実は「新しい」ことは何も起こっていない場であり、沈滞へ傾く。一方、〈周縁〉は真の意味で「新しいこと」の起こる場であり、活況を呈する。」(池上、1984)

磨製石包丁は穂摘み作業を象徴する道具でありながら、実行為においてはそれを用いた作業は周縁的であり、それが故に集落・集団の中に活況と緊張感とをもたらした当のものだったのである。以上をまとめてみると、次のようになる。

磨製石包丁＝〈摘む〉
聖的・非日常的・儀礼的
機能的〈周縁〉

横刃形刃器＝〈切る（刈る）〉
俗的・日常的・実務的
機能的〈中心〉

人間の意識活動にからめていえば、前者は〈神話的世界〉を生み、いっぽう後者は〈現実的世界〉である。

このようにみてくると、関東を中心とする東日本地域において殆どその出土がみられないことの理由について、弥生中期中ごろ以降に木製穂摘具が普及していたのではないかと想定する野本(1989)の考え方や、長野県恒川遺跡群の資料を基にして弥生後期後半を境に有孔磨製石包丁からえぐり入り打製石包丁へと置き代わっていったのではないかとする御堂島（1991）の見解には、にわかに賛

同しがたいものがある。遠賀川式土器を主体とする集団の進出がみられなかったが故に、磨製石包丁の普及もまた一般的となり得ず、使用痕研究から明らかにされたように、中期以降に、実務的には刃器類が収穫具としての役割を果たしていたと考えた方がより合理的であろう。

Ⅲ－２．機能の変換、形態の転換

磨製石包丁を儀礼的、象徴性の強い道具として捉えた場合、打製製品の位置づけはどのように理解されるべきか、この点についても若干の解体を行ってみる。

機能変換として捉えられるべき資料に穂摘具としての打製刃器類がある。本来的には打製のスクレーパーとしていくつかの機能が内在し、それが穂摘具のみの機能へと変換・特殊化していったのではないかと考えてきたのであるが、この点に関してはなお検討すべき諸点が残されている。たとえば、永井遺跡から出土した前期の両端えぐり入り打製石包丁を取り上げてみる。これは、形態的には長野県伊那谷を中心として弥生中期以降に多数製作された打製石包丁と同類であることを示している。２点のみの出土で、共伴した土器が遠賀川式土器の系統ではなく縄文系土器であったのではないかということは先に暗示的に述べた通りであるが、そうであるとすると、水田稲作農耕集団と接触しそこに取り込まれることによって、縄文期から存続してきた刃器の類が穂刈り具へと機能変換していった結果を表しているかも知れないわけである。もちろんこれに対して、西日本地域から稲作と共にもたらされたことも十分に想定されよう。今のところ実証的証明はつけられていない。

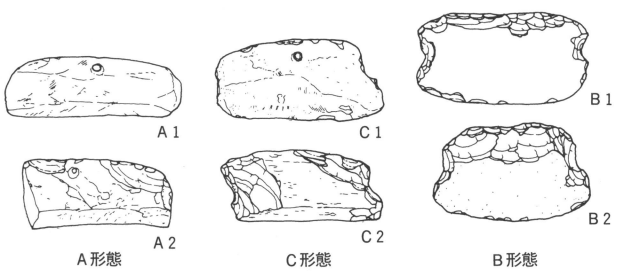
しかもこの問題は、さらに飛躍して時期を遡り、地域的にも広がりを持っていく可能性を示している。当地域からすこぶる離れている地域の資料ではあるが、高木正文（1980）は九州地方の縄文後・晩期の遺跡から得られた収穫石器としての打製石包丁と打製石鎌を集成し、それらはすでに縄文後期後半から中九州において畑作農耕が開始されていたことを示し、水稲栽培開始以後も中九州山岳地帯では両端抉入りの石包丁が畑作用道具として使用されていたであろうと論じている。藤尾慎一郎（1993）もこの考え方に基づきながら、該期における朝鮮畑作文化の情報伝播を想定する。ここからは、弥生期において磨製石包丁と両端抉入り石包丁とが、それぞれ水稲栽培と畑作という相異なった使用形態で展開していたことが類型的に導き出される。いっぽう、間壁忠彦（1985）は、瀬戸内沿岸地域に出現する打製石包丁の時期は弥生中期であり、前期から見られた磨製石包丁にとって代っていったと述べている。

だが、紐かけの概念と方法からみても、両端に抉を持つ形態は磨製の有孔形態とは全く異なっている。したがって、石毛分類のＡ形態がすでに縄文後期ごろには大陸から九州地域にやってきていて（石毛によれば、石包丁は元来中国大陸では粟の穂摘具として出現していた）、続いてもたらされた大陸系磨製石器の一群に乗じて瀬戸内や伊那谷などの一部の地域へと伝わっていったという想定が成り立つかも知れない。そしてこうした地域では、高木の考えとは異なった、稲の穂摘具へと機能展開していく抉入り打製石包丁の別類型が考えられるのかも知れない。しかしながら、この推論は資料不足も手伝ってやや実証性に欠ける。本稿ではこのことを論証していく力量を持ち合わせてはいないので、ここでは石器の機能転換を考える場合の一素材の提示としてとどめておきたい。

これに対して、形態転換を示す最もよい例は、抉入り磨製石包丁の出現に表れている。伊勢湾周辺地域からは１例も発見されてはいないが、長野県内では先に示した恒川遺跡群や倉平遺跡からの出土が知られる。それらは、森本の形態分類を使用すれば長方形の平面形を呈した直刃直背形態に

分類されるものばかりである。稀に中央上位に単孔が穿たれている例が認められるが、ほとんどが無孔である。両端から抉が刻み込まれ、両面に研磨が施されている。上端周縁が剝離調整のままで、研磨が及んではいない資料も多い。

ここで、磨製石包丁をA形態（磨製直刃直背形態石包丁）、抉入り打製刃器をB形態（御堂島



第3図　石包丁と刃器の形態転換（長野県恒川遺跡群の資料より作成）

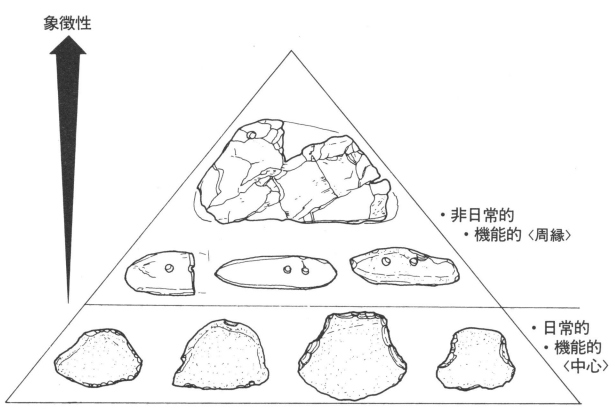
のいう抉入り打製石包丁）、抉入り磨製石包丁をC形態として、これら一群の資料の出自を考えてみると、C形態はB形態の磨製化、あるいはA形態の抉入り化として捉えることができる。すなわち「研磨」と「穿孔」の要素はA形態の磨製石包丁から、いっぽう「抉」の要素はB形態から由来しているということができる。たとえば、C1では有孔をA1から、また両端の抉をB1から受けており、C2では刃部研磨をA2から、そして両端の抉をB1、B2から受けている。このため、「紐かけ」という属性からみると、C1では有孔と抉が同時に施されることになって、同一機能が重なった重複形態となってしまっている。これらは形態の相互転換の1例ともみられようが、無孔製品が圧倒的に多い状況から考えると、相互と言うよりもむしろ抉入りの打製刃器が、伝播して来た磨製石包丁から「研磨」の要素を吸収して形態転換した結果であるとみた方がよい。だが、恒川遺跡群の場合は石材が有孔磨製石包丁と共通する例も多いとされているので、ことはそれほど単純ではないようである。どちらの事例においてもアカルチュレーションの物質的一断面をあらわしているといえる。

Ⅲ－3．地域社会の中の磨製石包丁

石包丁を「属人器」として捉える考え方がある。これは、使用痕の分布状況から個人の占有性の高さが窺われるとする松山聡（1992）の指摘であるが、磨製石包丁の出土数が極めて少ない伊勢湾周辺地域の弥生時代集落にあっては、この「属人器」の概念は先に述べた儀礼的用いられ方とも絡めて、いっそう特殊化して捉えた方がいいようである。

ここで、ひとつの集落の中での磨製石包丁、横刃形石器を含めた穂摘具の位置づけをモデル化してみると、第4図のようになる。

これは、象徴性が最も高いとみられる大形磨製石包丁を頂点とし、実用的な横刃形石器を底辺とした一種の重層構造である。ここでは、稲の穂を摘むという行為は記号として解釈され、また、〈日常性〉と〈非日常性〉の2項は対立ではなく、層として位置づけられる。象徴を中核に置いてこの三角形をみると、池上の考え方を引いた先の〈中心〉と〈周縁〉の関係は逆立ちしていることになるが、打製刃器類の使用こそが〈日常性〉であるわけだから、逆立ち現象はまさに〈非日常性〉をあらわしている。



第4図　愛知県朝日遺跡における穂摘・穂刈り具の位置関係モデル図

さらにこの三角形を1集落から地域社会にまで拡大してみよう。すると、おもに弥生中期を中心

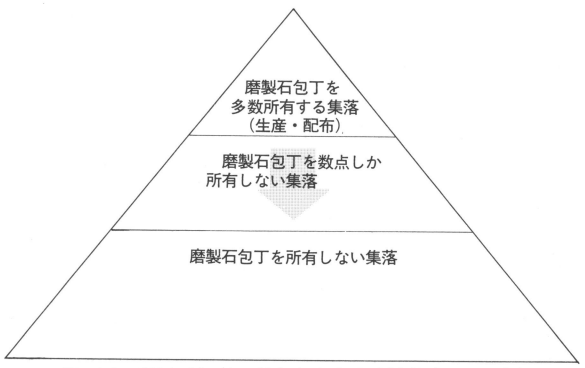
とする時期の集落は次の3種類に区分される。

1．磨製石包丁を大量に出土する集落、

2．1、2点しか出土しない集落、

3．全く出土しない集落

そしてそれらを第4図の三角形モデルと同じように、重層化した構造として捉えることも可能になる（第5図）。この区分は、集落の規模・存続期



第5図　磨製石包丁の所有をめぐる地域社会モデル図

間の長短による類別とも概ね一致している。そしてさらに、石材の共通性の問題を加えて考えてみると、磨製石包丁が上位の集落において製作され、そこから配布・分配された可能性が強くなる。たとえば、名古屋城三の丸遺跡や森南遺跡などは広い意味で朝日遺跡からの分村であり、磨製石包丁もそこから配布されたのではないかと考えられるわけである。大阪府亀井遺跡や池上曽根遺跡、高宮八丁遺跡、香川県鴨部河田遺跡のように大量の磨製石包丁を出土する遺跡は、この三角形の最上位に位置づけれるものである。

磨製石包丁の製作・供給関係については、すでに斎野（1991）が東北地方に分布する磨製石包丁を取り上げて、それらは製作地の一つである福島県天神沢遺跡から供給されたのではないかとし、地域間の交易関係として捉えるべき必要性を提起している。ここでさらに、出土（所有）と非出土（非所有）の現象を地域集団の重層性あるいは母村と分村を表す関係としてみていくならば、地域における集落間構造がより明瞭になってくるといえるだろう。

さらにこの問題について、石器組成に基づき弥生時代の生業パターンの地域的類型を提唱している酒井龍一（1986、1989）の見解と絡めて考えてみる。酒井によれば、磨製石包丁の出土量が少なく伐採用石斧の比率が高い伊勢湾周辺地域では、樹木伐採活動が主体であったと考えられている。これに対して、比較的磨製石包丁の出土が多い畿内地域の弥生時代集落は、穂摘み活動主体型として捉えられている。だが、この類型区分は余りにも合理的すぎるように思われる。Ⅲ－1で述べたように、横刃形石器類が穂刈り具としての役割を果たしていたと考えるならば、磨製石包丁の多寡は必ずしも生業パターンの違いを反映しているものではなく、ひとつの集団・地域の中での同一機能に基づいた石器形態の相違を表しているにすぎないと理解されるのである。

Ⅳ．おわりに

これまでに述べてきたことがらをまとめると、以下のようになる。

(1)　伊勢湾周辺地域の穂刈り具のうち磨製石包丁は、前期から後期前半まで使用されているが、中期に用いられたものが最も多い。

(2)　朝日遺跡の横刃形石器に認められた使用痕から、それらも穂刈り具として用いられた可能性の高いことが判明したが、このことは東日本地域の弥生時代集落で発見される打製刃器類全体にまで拡大して考えることができる。

(3)　磨製石包丁は稲作農耕社会の人々の精神活動を象徴する道具の一つとして理解することができる。このため、その出土点数の僅少性からして、磨製石包丁はひとつの集落の中での収穫儀礼的な場面で用いられ、いっぽうの刃器類は実際的・機能的な道具として使用されていたとみられる。

(4)　伊勢湾周辺地域で認められる磨製石包丁出土の有無・多寡の状況は、地域集団（集落）の間の

社会的重層関係を反映している。

以上、伊勢湾周辺地域の磨製石包丁の出土状況に基準をすえて、そこから派生する社会的な構造と物質文化の中に対象化された象徴性や人間精神の問題にまで触れてきた。資料解析・論理展開ともに不十分な面が多々あるが、課題としておきたい。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

本稿を草するに当り、名古屋市見晴台考古資料館川合剛、岐阜県教育委員会大熊厚志、愛知県埋蔵文化財センター石黒立人の各氏から有益な御教示を得た。記して謝辞とする。

引用文献

池上嘉彦　1984　『記号論への招待』　岩波書店

石毛直道　1968Ａ　「日本稲作の系譜（上)」『史林』51－5　130～150頁

〃　1968Ｂ　「日本稲作の系譜（下)」『史林』51－6　96～17頁

加藤安信・諏訪兼位　1982　「朝日遺跡出土石製品の岩質と特色」『朝日遺跡Ⅰ』　愛知県教育委員会　276～281頁

紅村　弘　1984　『東海の先史遺跡　総括編復刻版』

小林行雄　1937　「石包丁」『考古学』8－7　299～311頁

斎野裕彦　1991　「東日本への稲作伝播を考える」『考古学ジャーナル』337　19～24頁

〃　1993　「弥生時代の大型直縁刃石器(上)」『大阪府弥生文化博物館研究報告』2　85～109頁

酒井龍一　1974　「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』21－2

〃　1986　「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財學報』四　19～37頁

〃　1989　「初期農耕開拓活動の諸形態」『文化財學報』七　1～15頁

佐川正敏・青山和夫　1986　「中国の石包丁」『考古学ジャーナル』260　6～10頁

下條信行　1980　「東アジアにおける外湾刃石包丁の展開」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攻』193～213頁

高木正文　1980　「九州縄文時代の収穫用石器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攻』　69～108頁

野本孝明　1989　「東日本の磨製石包丁」『國學院大学考古学資料館紀要』5　41～54頁

春成秀爾　1982　「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集　1～48頁

藤尾慎一郎　1993　「主業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集　1～64頁

間壁忠彦　1985　「7．打製石包丁」『弥生文化の研究5』108～111頁

松山　聡　1992　「石包丁の使用痕」『弥生時代の

石器』第６分冊　第31回埋蔵文化財研究集会発表要旨　14～19頁
御堂島正　1989Ａ　「有肩扇状石器の使用痕分析」『古代文化』41－３　30～43頁
〃　1989Ｂ　「『抉入打製石包丁』の使用痕分析」『古代文化』41－６　19～27頁
〃　1989Ｃ　「『抉入打製石包丁』の使用法」『古代文化』41－８　１～15頁
〃　1990　「『横刃型石包丁』の使用痕分析」『古代文化』42－１　10～20頁
〃　1991　「磨製石包丁の使用痕分析」『古代文化』43－11　26～35頁
〃　1993　「日本における使用痕研究の展開」『神奈川県の考古学の問題点とその展望』神奈川県立埋蔵文化財センター　28～37頁
町田勝則　1993　「３．粗製剥片石器の使用痕について」『朝日遺跡Ⅳ』　愛知県埋蔵文化財センター
森下英治　1992　「中四国における弥生石器のおわり」『弥生時代の石器』第６分冊　第31回埋蔵文化財研究集会発表要旨　58～64頁
森本六爾　1934　「石包丁の諸形態と分布」『日本原始農業新論』
山田しょう　1987　「弥生時代の石器の使用痕分析」『富沢』　仙台市教育委員会　461～468頁

参考文献

『永井遺跡発掘調査報告』　1973　四日市市教育委員会
『納所遺跡』　1980　三重県教育委員会
『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告Ⅰ』　1989　三重県教育委員会
『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ』　1990　三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター
『半布里遺跡調査概報(1)』　1981　岐阜県教育委員会
『根本遺跡』　1991　岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会
『牧野小山遺跡』　1973　岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会
『名古屋城三の丸遺跡(1)』　1990　愛知県埋蔵文化財センター
『山中遺跡』　1992　愛知県埋蔵文化財センター
『貝殻山貝塚調査報告』　1972　愛知県教育委員会
『朝日遺跡Ⅰ・Ⅱ』　1982　愛知県教育委員会
『朝日遺跡Ⅳ』　1993　愛知県埋蔵文化財センター
『阿弥陀寺遺跡』　1990　愛知県埋蔵文化財センター
『森南遺跡』　1990　愛知県甚目寺町教育委員会
『岡島遺跡』　1990　愛知県埋蔵文化財センター
『岡島遺跡・不馬入遺跡』　1993　愛知県埋蔵文化財センター
『瓜郷遺跡』　1963　豊橋市教育委員会
『篠束遺跡調査報告書』　1960・61　小坂井町教育委員会
『弥生時代の石器』第１～６分冊　1992　埋蔵文化財研究会関西世話人会

愛知県の弥生時代石器をめぐる基礎的研究

永井宏幸・原田　幹・石黒立人

1．はじめに

弥生時代の石器研究は、これまで大陸系磨製石器を中心に行われてきたと言っても過言ではない。弥生文化の研究が北部九州や近畿地方を中心に進められてきたことがその大きな要因として挙げることができる。

つまり、弥生文化の主要要素は大陸系にあるとして、それが縄文時代と弥生時代を区分する主要な指標になり得たからであった。

このような傾向のなかで、近畿地方以東の地域では大陸系磨製石器が基本的に少ないこともあって、弥生時代における石器研究の比重はそれほどでもなかった。そのなかで、隣接する長野県では神村透氏が伊那谷の打製石器の研究を精力的に進め、一歩も二歩もリードしていた。

ところで神村氏の研究方向は、藤森栄一氏の縄文農耕論としての石器研究とある意味で平行的であったと言えるのではないだろうか。弥生文化としての石器、すなわち農耕具としての石器という観点からの研究として、そこには、弥生時代と縄文時代の類似性の強調（共通性の認定）が大きなモチーフとしてあったと言えるのではないか。いかに時代によって区分されているものであっても、それを超えてつながりがあるという、そういった側面に評価を与えることが目的であったように、私には思える。

弥生時代の石器は、縄文時代の石器体系から鉄器を中心とした金属期の体系への移行期に相当するものである、というのがおそらくこれまでの考え方であろう。だが、果してそのような中間的な位置づけでよいのだろうか。

そもそも弥生文化といい、弥生時代といい、そのような一般的様相が、資料的な実態として存在するのであろうか。私にはそうは思われない。資料的な実態とは意外なほどずれている部分もあるのではないだろうか。このことは、石器研究の先行地域である北部九州や近畿地方でも同様なのではあるまいか。

弥生時代の石器という、そのレベルでの一般性が果して資料的実態として保証されていると言えるのであろうか、このように考えたとき、わが愛知県も例外ではない。検討のための土俵作りがなんと不十分なことか。そうした思いが今回の報告の背景にあった。

今回の報告は表題に関わる一連の作業の序に相当するものである。すなわち、われわれはこれまで愛知県で報告された資料の集成をまず第１の目標とし、そのための予備的な作業として永井・原田の両名が尾張・三河を分担しての文献整理・文献探索を行い、以下に述べているように研究史というかたちでまとめた。これを序として以後の作業の流れを示せば次のようになる。

①石器の所在を確認するとともに、できるかぎり再実測を行い、また写真撮影などの資料化を進めること。

②尾張地方の石器集成を基礎に周辺地域との比較を行い、視点の次元を〈伊勢湾地方〉へ移行させる。

③伊勢湾地方を基礎に他地方との比較検討を進める……など。　（石黒立人）

2．調査研究抄史

【1950年以前】

尾　張

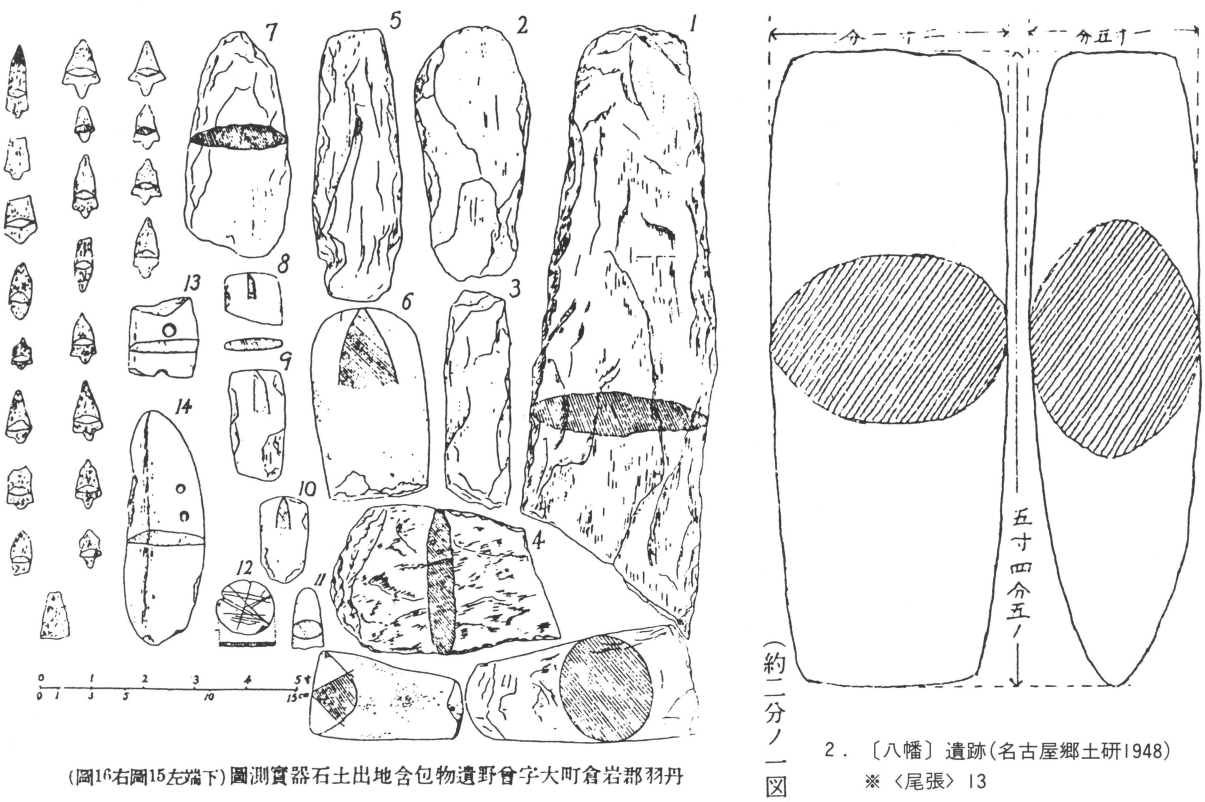
1950年以前については、報告が10本に満たない。ただ、1950年以降の調査報告につながる遺跡の報告が多い。例えば、1908年の鍵谷徳三郎が報告した高蔵（貝塚）遺跡は、まさに愛知県における近代考古学の原点と言えるし、吉田富夫の報告した西志賀貝塚（遺跡）の2遺跡は愛知県の弥生時代を代表する遺跡となる。石器に関しては、写真を掲載計測値や種類の紹介が多い。ただ、小栗鐵次郎が調査報告を担当した『愛知県史跡名勝天然記念物』は半世紀以上の時を感じさせない。土器の実測図はもちろん、石器の実測図や石材の鑑定、遺跡の保存にいたる、まさに現在の調査報告書に引けを取らない報告である。（小栗　1931など）

三　河

1923年に発表された『渥美郡史』のなかに、縄文時代の石器とともに掲載されたものが初見である。掲載内容は、写真とわずかな記述に留まる。昭和に入り豊川流域を中心に瓜郷遺跡など重要な遺跡の発見が相次いだが、ほとんど報告されることはなかった。このようななかで1941年に発表された丸塚遺跡の報告は、県内では初の弥生時代の発掘調査として特筆すべきであろう。（吉田ほか　1941）また、森本六爾によって報告された高師原遺跡出土の石剣は、当時の石剣分布範囲の東端を示す資料として評価された。（森本　1933）

以上のように、調査事例が少ないわりに石器の記載頻度が高い理由に、石器を自然石と区別がしやすい、すなわち遺物としての認識が比較的容易であったからであろう。

また小栗の報告は当時としてはレベルの高いものであり、他県における同様の報告と比べても、引けをとらないものであろう。



（図16右図15左端下）圖測實器石土出地含包物遺野曾字大町倉岩郡羽丹

1．曽野遺跡（愛知県　1940より）※尾張11

2．〔八幡〕遺跡（名古屋郷土研1948）
※〈尾張〉13

図1　1950年以前の実測図サンプル

【1970年代まで】

尾　張

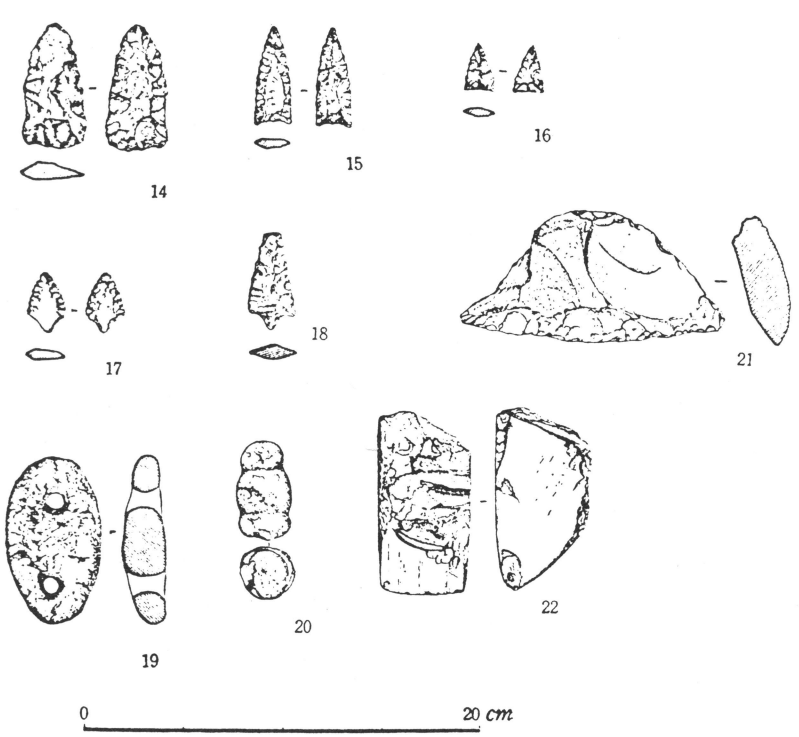
1945年から1970年代については、先に記したように、西志賀遺跡・高蔵遺跡の調査報告、『一宮市史』の一連の調査報告などが注目される。

西志賀遺跡については、地元の研究者である吉田富夫・紅村弘らと東京考古学会の小林行雄・杉原荘介らにより、弥生文化黎明期の解明を中心に調査研究が進められた。(吉田　1961ほか) 石器に関しては、弥生文化のメルクマールである大陸系磨製石斧など紹介に留まり、専ら遠賀川系土器の東漸に注目した報告であった。『一宮市史』の責任編集を担当した澄田正一は、石材の流通や機能について、一連の研究を発表した。(澄田　1955など) また、『一宮市史』に代表されるように市町村史が続々と刊行され、各々表採遺物を含めて県内の遺跡・遺物が集成された。しかし、石器に関する掲載内容は、写真が主なもので、記載も概説的なものが多く、研究の進展はなかった。

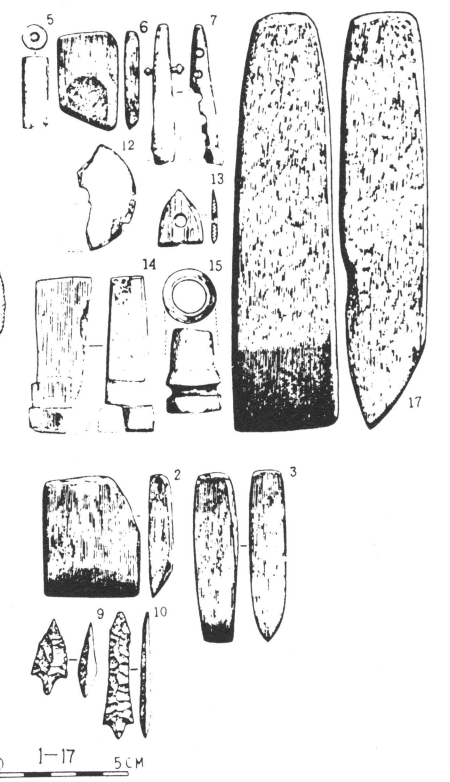
三　河

戦後まもなく久永春男の『三河の貝塚』が刊行され、戦前までに発見されたいくつかの弥生遺跡が紹介された。これに引き続き久永は中村文哉らと1940年代後半から1960年代前半にかけて、豊川流域に焦点を当て、瓜郷・篠塚・樫王などの遺跡を調査報告した。石器に関しての記載は、実測図・写真・計測値・石材など、ほぼ現在の調査報告と同様の掲載内容に落ちついてきた。また、大陸系磨製石斧の出土頻度が西日本に比べて少ないこと、石器の機能と石材との関連、石材の入手をめぐる問題も注意が払われている。

しかしながら、1960年代後半から1970年代にかけて刊行された市町村史は戦後までの資料を網羅的に掲載しているものの、採集遺物が多くを占めるのも手伝って、記載内容に不備な点が多く、資料の実態が不明確なものが多い。



1．西志賀遺跡（日本考古学協会　1961より）※尾張16



2．瓜郷遺跡　※三河10
（紅村1974より）

図2　1970年代までの実測図サンプル

【1980年代以降】

尾　張

1980年代については、石器の組成・製作技法・使用痕分析など、ほぼ現在全国的に行われている諸研究が出揃った。

野澤則幸や石川日出志の研究は、縄文時代から弥生時代への変遷を石組組成から迫った。特に石川は、弥生時代中期に縄文的石器組成（台地型）・大陸系石器組成（平野型）の二者を想定し、立地を含めたモデル化を図った。

石器の製作技術については、山中遺跡の報告で赤塚次郎が剥片石器を丹念に接合し、製作過程を復元している。(一宮市教委　1982)

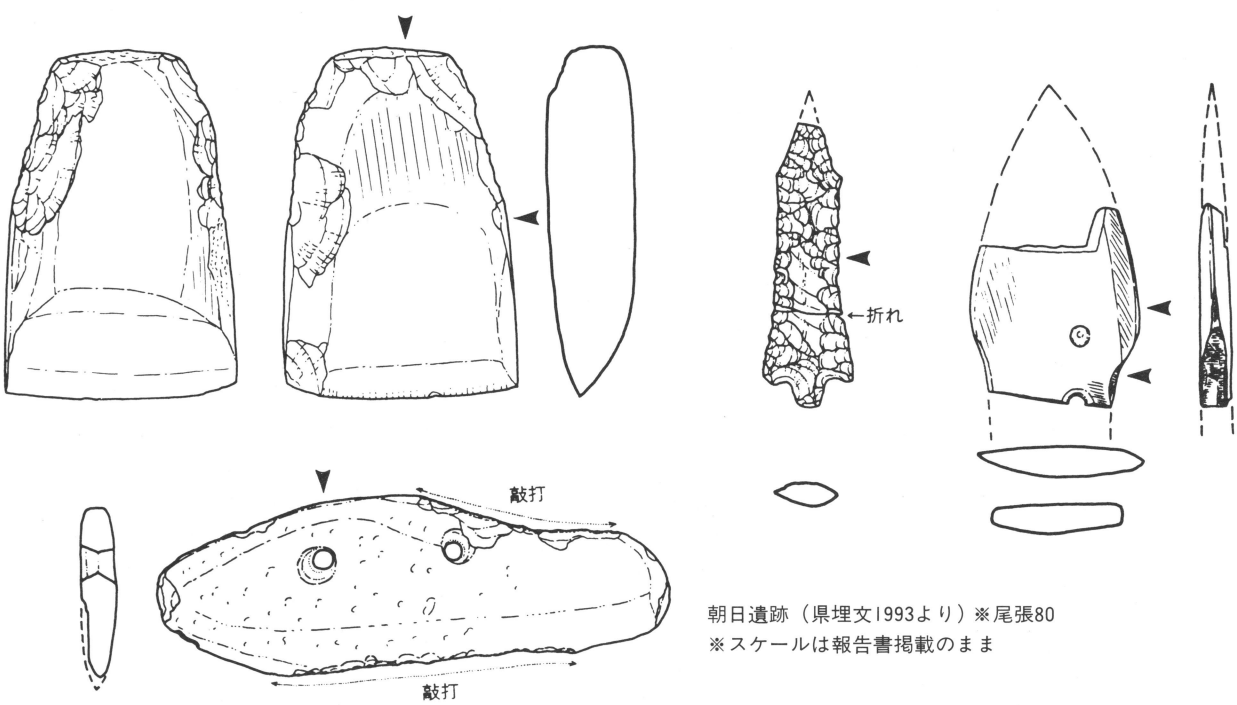
石材の流通および石材の選択などの研究は、「下呂石」を題材に飴谷　一が考古学的な視点から行っている。

石器の使用痕については、全国的にみてもまだ途に着いたばかりである。旧石器時代を中心に行なわれてきた使用痕分析を応用した研究や、石庖丁を中心にイネ科の植物によって残る光沢痕の観察などがある。朝日遺跡の報告で、石黒立人は石器観察結果を顕微鏡写真などで紹介している。(石黒　1993)

三　河

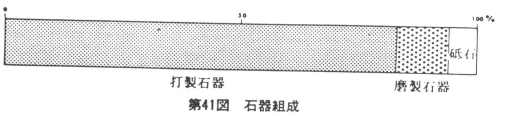
1980年代に入ると、開発に伴う発掘調査が増え、調査対象面積も増加したことから、石器の報告例もこれに伴って急増した。おもな調査としては、前期の環濠集落とされている白石遺跡、大陸系磨製石斧が多く出土した岡島遺跡、磨製石斧の未製品をはじめ大量の石器を出土した麻生田大橋遺跡などがある。

また、これらの調査に関連して近年特に注目されているのは、石器の石材とその流通である。麻生田大橋遺跡を例に2本の研究を挙げると、森勇一による磨製石斧の石材分析（県埋文　1991）や小嶋隆による石鏃の石材とその流通問題がある。また、石材の同定も従来の肉眼観察による分析だけでなく、偏光顕微鏡による観察、質量と体積の測定値よりえられる比重分析など、遺物をより客観的かつ科学的な方法も採用されるとともに、岩石学など関連する自然科学の分野との連携も必要になってきている。

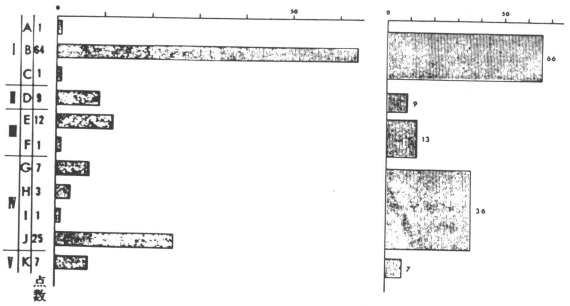


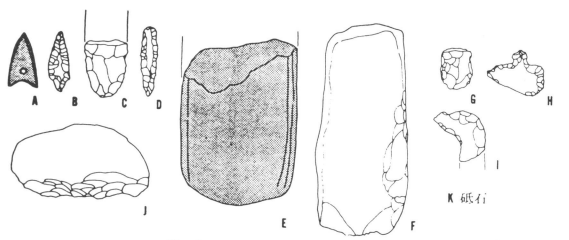
朝日遺跡（県埋文1993より）※尾張80
※スケールは報告書掲載のまま

図3　1980年代以降の実測図サンプル



第41図　石器組成





第42図　石器の分類（網点は磨製品）　①

表18　片刃石斧のタテ・ヨコ長の相関と分類（柱状片刃Ⅰ類を除く）

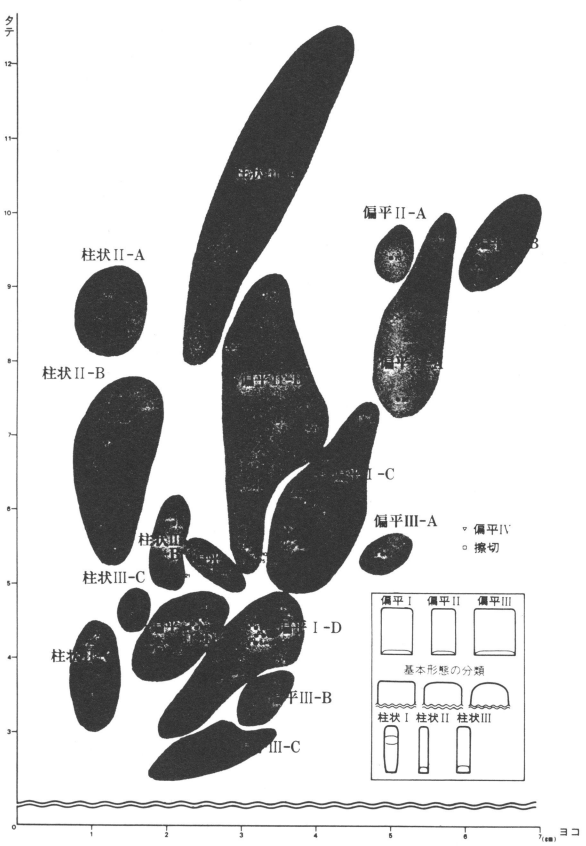
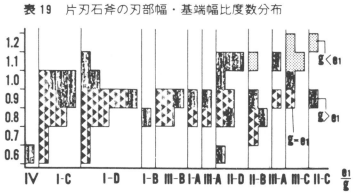
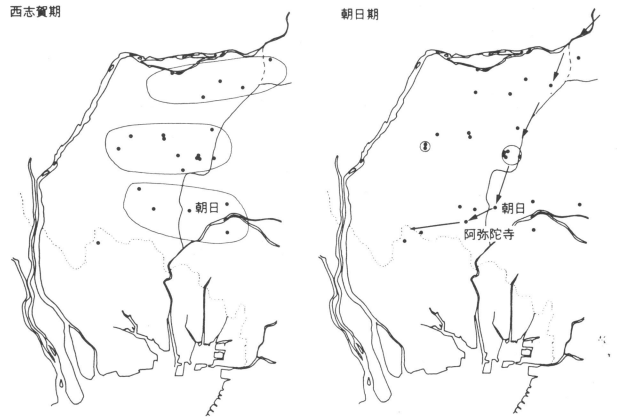
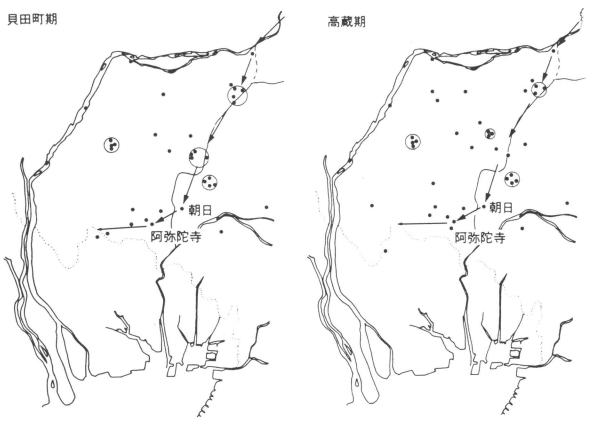


表19　片刃石斧の刃部幅・基端幅比度数分布



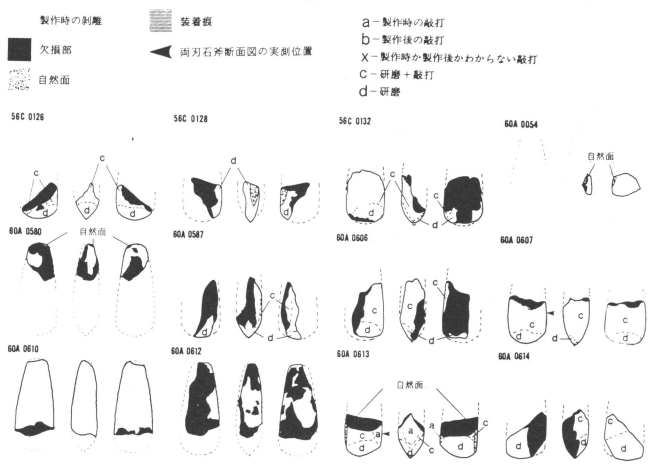
③





第２図　尾張平野弥生時代遺跡の時期別分布図（北村和宏の図に加筆）
〈矢印は「下呂石」の推定移動ルート〉　②

両刃石斧特徴模式図（一部）　その１



④

① 勝川遺跡（県サービスセンター1984 より）
② 下呂石の分布図（飴谷 1989 より）
③ 朝日遺跡（県埋文 1993 より）
④ 朝日遺跡（県埋文 1993 より）

3．愛知県石器研究解題

素描については、「調査研究抄史」で紹介しているので、ここでは代表的な論文をインデックス式化で紹介する。

1955　澄田正一
「日本原始農業の問題」
－美濃・尾張の先史考古学的研究－
『名古屋大学文学部研究論集』ＸＩ
名古屋大学

1981　小嶋隆
「石鏃に使われた石材“黒雲母石英安山岩”」
『石巻文化財』6
豊橋市石巻地区文化財保存会

1986　小嶋隆
「石鏃に使われた奥三河の石材“流紋岩・松脂岩・安山岩”」
『石巻文化財』7
豊橋市石巻地区文化財保存会

1988　石川日出志
「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」
『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』研究編
愛知考古学談話会

1989　飴谷　一
「五条川流域における「下呂石」の分布について」
『年　報』昭和63年度
㈶愛知県埋蔵文化財センター

1992　小嶋隆
「石鏃に使われた石材“サヌカイト”」
『石巻文化財』8
豊橋市石巻地区文化財保存会

1992　山本直人
「縄文時代の下呂石の交易」
『名古屋大学文学部研究論集』113（史学38）
名古屋大学

愛知県内弥生石器関係文献目録

【凡例】

1．文献の記載順序は発行年順とした。
2．遺跡の名称は報告時のまま記載した。
3．報告者名は基本的に石器部分の記載者とした。
4．時期は、Ⅰ期（前期）・Ⅱ～Ⅳ期（中期）・Ⅴ～Ⅵ期（後期）で前後の時代は縄文時代晩期後半などと表記した。
5．石器の種類は概ね網羅したが、種類が多い遺跡に関しては、大陸系磨製石器や特殊な石器を優先して掲載した。

〈尾張〉

No.	遺跡名	所在地	報告書名、論文名	発行年	報告者名	時期	出土石器の種類
1	高蔵貝塚	名古屋市熱田区高蔵町	「尾張熱田高蔵貝塚調査」『東京人類学雑誌』266号	1908	鍵谷徳三郎	Ⅲ～Ⅳ期	磨製石斧、石盤、石槌？、凹石ほか
2	二夕子遺跡	一宮市萩原町萩原字三味南	東京考古学会「尾張二夕子及浅野弥生式遺跡」『考古学』第１巻第５・６号	1930	森　徳一郎	Ⅲ～Ⅳ期	磨製石斧・扁平片刃・叩石・打製石斧・砥石
3	西志賀遺跡	名古屋市西区西志賀町	「銅鎌を出した名古屋市西志賀貝塚」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第九（史跡其七）	1931	小栗鉄次郎	Ⅲ期が中心	打製石鏃
4	瑞穂遺跡	名古屋市瑞穂区牧町	「銅鎌鉄鎌を共存した名古屋市瑞穂町東牧の弥生式遺跡」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第十	1932	小栗鉄次郎	Ⅲ～Ⅴ期	打製石鏃・扁平片刃石斧・石錐・敲石
5	西志賀貝塚	名古屋市西区西志賀町字貝塚、宇船入作	『考古学雑誌』第23巻第６号	1933	吉田富夫	Ⅰ～Ⅴ期	石鏃、石環、敲石、砥石
6	瑞穂遺跡	名古屋市瑞穂区牧町	名古屋郷土研究会「瑞穂付近に於ける出土器に就て」『尾張の遺跡と遺物』上巻	1935	北村武夫	Ⅳ～Ⅴ期	打製石鏃・磨製石鏃・磨製石斧・凹石ほか
7	西志賀貝塚	名古屋市西区西志賀町	「名古屋市西志賀貝塚（其二）」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第十二（史跡其十）	1936	小栗鉄次郎	Ⅰ・Ⅱ期	独鈷石・太型蛤刃石斧・環状石斧・石棒
8	阿弥陀寺遺跡	海部郡甚目寺町字阿弥陀寺	「尾張国海部郡甚目寺町の弥生式遺跡」東京考古学会『考古学』第９巻第１号	1938	吉田富夫	Ⅲ～Ⅳ期	太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧
9	阿弥陀寺遺跡	海部郡甚目寺町字阿弥陀寺	「尾張国海部郡甚目寺町阿弥陀寺発見の弥生式石器」東京考古学会『考古学』第9巻第9号	1938	吉田富夫	Ⅲ～Ⅳ期	太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・打製石鏃・石錐
10	阿弥陀寺遺跡	海部郡甚目寺町字阿弥陀寺	「甚目寺町福田川沿岸の石器時代遺物包含地」『愛知県史跡名勝天然記念物調査報告』第十七	1939	小栗鉄次郎	Ⅲ期	打製石鏃・磨製石斧・扁平片刃・石錐・石剣
11	曽野遺跡	岩倉市曽野	「丹羽郡岩倉町大字曽野遺物包含地」『愛知県史跡名勝天然記念物』第十八	1940	小栗鉄次郎	Ⅲ～Ⅴ期	石庖丁・太型蛤刃・扁平片刃・打製石鏃ほか
12	〔町屋〕遺跡	一宮市千秋町	名古屋郷土研究会「丹羽郡千秋村大字町屋出土の石製品と石器に就いて」『尾張の遺跡と遺物』第29号	1941	坂　重吉	不明	打製石斧
13	〔八幡〕遺跡	知多郡八幡町字廻間地里脇78	名古屋郷土研究会「八幡、横須賀両町に遺存する先史・原始時代の石器及土器見取図」『尾張の遺跡と遺物』第33号	1948	坂　重吉	不明	石斧（太型蛤刃石斧？）石臼（石皿？）
14	大地遺跡	岩倉市大地町ほか	古代学研究会「愛知県大地遺跡　尾張における初期弥生式文化の－様相」『古代学研究』11	1955	大参義一	Ⅱ～Ⅲ期	石鏃・打製石斧
15	二夕子遺跡	一宮市萩原町萩原字三味南	愛知県教育委員会『愛知県一宮市萩原町の弥生文化遺跡』	1955	吉田章一郎	Ⅱ～Ⅳ期	磨製石斧・大型蛤刃石斧
16	西志賀貝塚	名古屋市西区西志賀町	「愛知県西志賀遺跡」『日本農耕文化の生成』	1961	杉原荘介（吉田富夫）	Ⅰ期	大型蛤刃、抉入片刃、打製石鏃ほか
17	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴台	名古屋市教育委員会『見晴台遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次発掘調査概報』	1966	紅村弘ほか	Ⅳ～Ⅴ期	打製石鏃、石斧、砥石
18	西志賀貝塚	名古屋市西区西志賀町	名古屋市文化財調査保存委員会「名古屋市西志賀貝塚」『文化財叢書』第19号	1968		Ⅰ～Ⅴ期	大型蛤刃、多頭石斧、環状石斧ほか
19	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴台	名古屋市教育委員会『見晴台遺跡第Ⅳ・Ⅴ次発掘調査概報』	1968	紅村弘	Ⅳ～Ⅴ期	石鏃、凹石、叩石
20	山中遺跡	一宮市萩原町山中	一宮市史編纂委員会『新編一宮市史』資料編２	1968	大参義一	Ⅰ～Ⅱ期	打製石鏃
21	埋田遺跡	津島市埋田町	津島市教育委員会『津島市埋田遺跡調査報告』	1968	吉田富夫	不明	砥石
22	寺野遺跡	津島市寺野町	津島市教育委員会『津島市史』資料編（一）	1970	吉田富夫	不明	砥石
23	名和八幡社貝塚	東海市（上野町）名和	東海市『東海市史』資料編第一巻「名和八幡社貝塚」	1971	石野　武（吉田富夫）	Ⅲ・Ⅳ期	打製石鏃
24	岩滑遺跡	半田市岩滑	半田市「岩滑遺跡」『半田市誌』資料編１	1971	立松　宏	Ⅱ期	打製石鏃・石錐
25	柳が坪遺跡	東海市高横須賀町柳が坪	東海市教育委員会『柳が坪遺跡』	1971	杉崎　章	Ⅲ期	石斧・石錐・凹石
26	貝殻山貝塚	西春日井郡清洲町	愛知県教育委員会『貝殻山貝塚調査報告』	1972	井上吉貞	Ⅰ～Ⅱが中心	太型蛤刃、小型偏平片刃、磨製石鏃ほか
27	カブト山遺跡	東海市名和町	東海市教育委員会『カブト山遺跡第１次調査報告』	1973	池田睦介	Ⅴ期	凹石・叩石・砥石
28	〔青山〕遺跡	西春日井郡豊山町大字青山	豊山町史編纂委員会『豊山町史』	1973		不明	磨製石斧・打製石鏃
29	古沢町遺跡	名古屋市中区古沢町	名古屋市教育委員会『古沢町遺跡発掘調査報告書－弥生時代編－』	1974	和田英雄	Ⅲ～Ⅴ期	石斧、石錐、敲石
30	〔小木〕遺跡	小牧市小木	小牧市史編纂委員会『小牧市史』資料編１	1975	立松　宏	不明	打製石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨製石庖丁
31	曽野遺跡	岩倉市曽野町	『先人文化』	1977	浅野平雄	不明	大型蛤刃石斧・磨製石庖丁・扁平片刃石斧
32	町畑遺跡	岩倉市大地町	『先人文化』	1977	浅野平雄	不明	打製石鏃・打製石斧
33	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴町	名古屋市見晴台考古資料館『見晴台遺跡第12・13次発掘調査の記録』	1978	岡本俊郎	Ⅳ～Ⅴ期	石鏃、フレイク、石匙
34	瑞穂遺跡	名古屋市瑞穂区牧町	名古屋市教育委員会『瑞穂遺跡・桜台高校遺跡発掘調査概要報告書』	1979		Ⅳ～Ⅴ期	石斧、砥石、石鏃、磨製石剣
35	万場垣内遺跡	東加茂郡旭町牛地	旭町誌編集研究会『旭町誌』	1981	大参義一	不明	打製石鏃・有孔磨製石鏃
36	高蔵遺跡	名古屋市熱田区高蔵町	名古屋市教育委員会『熱田区高蔵町　高蔵遺跡発掘調査概要報告書』	1982		Ⅰ～Ⅵ期	打製石鏃、磨製石斧
37	高蔵貝塚	名古屋市熱田区高蔵町	南山大学人類学博物館編集『高蔵貝塚－春日荘跡地区　発掘調査報告書』	1982	宮腰健司	Ⅳ～Ⅵ期	石鏃（未製品）
38	中ノ池遺跡群Ｂ地	東海市高横須賀町藤塚	東海市教育委員会『中ノ池遺跡群発掘調査報告』	1982	立松　彰	Ⅴ以降	敲石・磨石・砥石
39	中五反田遺跡	丹羽郡大口町大字小口字中五反田	大口町誌編纂委員会『大口町誌』	1982	宮川芳照	Ⅲ～Ⅴ期	磨製石庖丁・扁平片刃・磨製石鏃ほか
40	東樋田遺跡	丹羽郡大口町大字小口字東樋田	大口町誌編纂委員会『大口町誌』	1982	宮川芳照	Ⅲ～Ⅴ期	打製石斧・磨製石鏃・打製石鏃・石ノミほか
41	仁所野遺跡	丹羽郡大口町大字小口字仁所野	大口町誌編纂委員会『大口町誌』	1982	宮川芳照	不明	柱状片刃石斧
42	山中遺跡	一宮市萩原町山中	一宮市教育委員会『尾張病院山中遺跡』	1982	赤塚次郎	Ⅰ期	打製石鏃

No.	遺跡名	所在地	報告書名、論文名	発行年	報告者名	時期	出土石器の種類
43	朝日遺跡	西春日井郡清洲町ほか	愛知県教育委員会『朝日遺跡』第２分冊	1982	加藤安信ほか	Ⅰ～Ⅵ期	各種石器有り
44	高蔵遺跡	名古屋市熱田区高蔵町	名古屋市教育委員会『昭和57年度　埋蔵文化財発掘調査概要報告書』	1983		不明	打製石鏃
45	野崎遺跡	知多市寺本	知多市誌編纂委員会『知多市誌』資料編二	1983	磯部幸男	Ⅱ～Ⅲ期	石鏃・小型蛤刃石斧
46	獅子懸遺跡	知多市南獅子懸	知多市誌編纂委員会『知多市誌』資料編二	1983	磯部幸男	Ⅱ～Ⅳ期	石匙・打製石鏃
47	細見遺跡	知多市八幡字細見43	知多市教育委員会『知多市文化財報告第20集　細見遺跡（第２次発掘調査）』	1984	中野晴久ほか	Ⅲ期	盤状石皿・打製石鏃・扁平片刃石斧・凹石
48	大塚遺跡	稲沢市大塚町	新修稲沢市史編纂会事務局『新修稲沢市史』資料編六	1984		Ⅰ期が中心	打製石鏃・磨製石斧・刃器
49	勝川遺跡	春日井市勝川町	財愛知県教育サービスセンター『勝川』	1984	赤塚次郎	Ⅲ・Ⅳ期	磨製石鏃・磨製石斧・石槍・剝片石器ほか
50	下高田遺跡	美浜町野間谷	美浜町編纂委員会『美浜町誌』資料編二	1985	奥川弘成	Ⅰ～Ⅴ期	石鏃・磨製石斧・石庖丁・サヌカイト剝片
51	下高田遺跡丸山地	知多郡美浜町大字野間字丸山泊	美浜町誌編纂委員会『美浜町誌』資料編二・美浜町教育委員会『下高田遺跡』	1985	奥川弘成・杉崎　彰	Ⅱ～Ⅳ期	石鏃・石錐・有効円板
52	細見遺跡	知多市八幡細見43-1	知多市教育委員会『細見遺跡（第３次発掘調査）』	1986	坂野俊哉	Ⅰ～Ⅴ期	磨製石鏃・打製石鏃・磨石・叩石ほか
53	高蔵遺跡	名古屋市夜寒町	名古屋市教育委員会『熱田区夜寒町　高蔵遺跡発掘調査報告書』	1987	鯉江昭三	Ⅳ～Ⅴ期	石鏃、石斧、尖頭器、石剣ほか
54	瑞穂遺跡	名古屋市瑞穂区牧町	名古屋市教育委員会『瑞穂遺跡－第４次調査の概要』	1987		Ⅳ～Ⅴ期	磨製石斧、砥石
55	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴町	名古屋市見晴台考古資料館『見晴台遺跡第25次発掘調査の記録』	1989	野口泰子、水野裕之	Ⅳ～Ⅴ期	石鏃、軽石、凹石
56	トゝメキ遺跡	東海市名和町トゝメキ・八幡前	東海市教育委員会『トゝメキ遺跡』	1988	立松　彰	Ⅲ期	太型蛤刃石斧・砥石・打製石鏃・剝片石器
57	大喜遺跡	名古屋市瑞穂区大喜新町	名古屋市教育委員会『瑞穂区大喜新町大喜遺跡－発掘調査の概要－』	1989	野澤則幸	不明	磨石、石皿
58	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴町	名古屋市見晴台考古資料館『南区見晴町見晴台遺跡　第29次発掘調査報告書』	1990	伊藤厚史	Ⅳ～Ⅴ期	スクレイパー、剝片
59	貴生町遺跡	名古屋市西区貴生町	名古屋市教育委員会『貴生町遺跡　第３～５次調査の概要』	1990		不明	石鏃
60	阿弥陀寺遺跡	海部郡甚目寺町大字石作・新居屋	財愛知県埋蔵文化財センター『阿弥陀寺遺跡』	1990	石黒立人	Ⅲ～Ⅳ期	各種石器有り
61	森南遺跡	海部郡甚目寺町大字森	甚目寺町教育委員会『森南遺跡』甚目寺町文化財調査報告Ⅱ	1990	長島広ほか	Ⅲ～Ⅴ期	磨製石斧・扁平片刃・石庖丁・打製石鏃ほか
62	名古屋城三の丸遺跡	名古屋市中区三の丸	財愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡（１）』	1990	松田　訓	Ⅲ期	石庖丁
63	月縄手遺跡	名古屋市西区比良	財愛知県埋蔵文化財センター『月縄手遺跡・貴生町遺跡』	1990	松田　訓	Ⅰ期	打製石鏃
64	貴生町遺跡	名古屋市西区比良	財愛知県埋蔵文化財センター『月縄手遺跡・貴生町遺跡』	1990	宮腰健司	Ⅰ期	打製石鏃、磨製石斧
65	大渕遺跡	海部郡甚目寺町大字甚目寺大渕	財愛知県埋蔵文化財センター『大渕遺跡』	1991	宮腰健司	Ⅳ期	打製石鏃・磨製石鏃・太型蛤刃・偏平片刃ほか
66	長谷遺跡	南知多町片名	南知多町誌編纂委員会『南知多町誌』本文編	1991	中野晴久	不明	太型蛤刃石斧
67	潮干天神遺跡	南知多町内海	南知多町誌編纂委員会『南知多町誌』本文編	1991	中野晴久	不明	扁平片刃石斧
68	山田遺跡	南知多町大井	南知多町誌編纂委員会『南知多町誌』本文編	1991	中野晴久	不明	石錐
69	鯨浜遺跡	南知多町篠島	南知多町誌編纂委員会『南知多町誌』本文編	1991	中野晴久	不明	石錐
70	挟間遺跡	南知多町師崎町	南知多町誌編纂委員会『南知多町誌』本文編	1991	中野晴久	不明	石錐
71	板取遺跡	南知多町師崎町	南知多町誌編纂委員会『南知多町誌』本文編	1991	中野晴久	不明	石錐
72	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴町	名古屋市見晴台考古資料館『見晴台遺跡　第30次発掘調査の記録』	1992	川合剛	Ⅳ～Ⅴ期	石鏃、石核、磨石
73	見晴台遺跡	名古屋市南区見晴町	財団法人荒木集成館『見晴台遺跡第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ次発掘調査概報』	1992	吉田富夫	Ⅳ～Ⅴ期	磨製石斧、石匙よう刃器、磨石、砥石
74	瑞穂遺跡	名古屋市瑞穂区牧町	名古屋市教育委員会『瑞穂区牧町　瑞穂遺跡発掘調査概要報告書』	1992		Ⅳ～Ⅴ期	石鏃、くぼみ石
75	富士見町遺跡	名古屋市中区上前津	名古屋市教育委員会『富士見町遺跡第４次発掘調査の概要』	1992	伊藤正人	不明	石鏃
76	山中遺跡	一宮市萩原町山中	財愛知県埋蔵文化財センター『山中遺跡』	1992	石黒立人	Ⅰ期	各種石器有り
77	岩倉城遺跡	岩倉市下本町・大市場町	財愛知県埋蔵文化財センター『岩倉城遺跡』	1992	服部信博	Ⅲ期	磨製石斧・剝片石器
78	勝川遺跡	春日井市勝川町	財愛知県埋蔵文化財センター『勝川遺跡Ⅲ』	1992	岡本直久	Ⅳ期	打製石鏃・砥石
79	勝川遺跡	春日井市勝川町	財愛知県埋蔵文化財センター『勝川遺跡Ⅳ』	1992	石黒立人・五藤そのみ	Ⅳ期が中心	各種石器有り
80	朝日遺跡	西春日井郡清洲町ほか	財愛知県埋蔵文化財センター『朝日遺跡Ⅳ』	1993	石黒立人ほか	中期Ⅱ以前～Ⅳ期？	各種石器有り
81	法海寺遺跡	知多市八幡字平井19	知多市教育委員会『法海寺Ⅱ』	1993	渡辺　誠	不明	打製石鏃・磨製石斧・スクレイパーほか

〈三河〉

No.	遺跡名	所在地	報告書名、論文名	発行年	報告者名	時期	出土石器の種類
1	石神貝塚	渥美郡渥美町	『渥美郡史』	1923		不明	石剣
2	牟呂貝塚	豊橋市	『渥美郡史』	1923		不明	磨製石斧
3	高師原A地点遺跡	豊橋市高師原	「愛知県下発見の有柄石剣」『考古学』第4巻第7号	1933	森本六爾	不明	石剣
4	丸塚包含地	宝飯郡一宮村江島字丸塚	「三河宝飯郡丸塚遺跡概報」『古代文化』第12巻17号	1941	吉田富夫・伊藤晃	Ⅲ期	打製石鏃、打製石斧、蛤刃石斧、敲石ほか
5	橋良貝塚	豊橋市橋良町	『三河の貝塚』	1949	久永春男	Ⅳ期	打製石鏃
6	欠山・五社稲荷	宝飯郡小坂井町欠山	『三河の貝塚』	1949	久永春男	Ⅳ～Ⅵ期	磨製石斧、打製石鏃、磨製石鏃
7	篠束遺跡	宝飯郡小坂井町篠束	小坂井町教育委員会『篠束遺跡調査報告書』	1961	伊藤秋男	Ⅱ～Ⅲ期	打製石斧、太型蛤刃、小型扁平片刃ほか
8	篠束遺跡	宝飯郡小坂井町篠束	小坂井町教育委員会『篠束遺跡調査報告書第2次』	1961	紅村弘	Ⅱ～Ⅲ期	打製石鏃、打製石匙、軽石
9	樫王遺跡	宝飯郡小坂井町欠山	小坂井町教育委員会『篠束遺跡調査報告書第2次』	1961	紅村弘	Ⅰ～Ⅱ期	打製石鏃、打製石斧、敲製石斧、石刀ほか
10	瓜郷遺跡	豊橋市瓜郷町	豊橋市教育委員会『瓜郷』	1963	久永春男	Ⅲ～Ⅵ期	太型蛤刃、乳棒状石斧、抉入片刃、石庖丁ほか
11	欠山遺跡	宝飯郡小坂井町	豊橋市教育委員会『瓜郷』	1953	久永春男・芳賀陽	Ⅴ～Ⅵ期	凹石、砥石
12	八剣遺跡	新城市大宮字下馬場	愛知県教育委員会『豊川用水路関係遺跡調査報告』	1965	岩野見司ほか	Ⅱ期	打製石鏃、打製石斧、磨製石斧ほか
13	欠山第3貝塚	宝飯郡小坂井町篠束字欠山	愛知県教育委員会『豊川用水路関係遺跡調査報告』	1965	紅村弘ほか	Ⅳ～Ⅵ期	打製石鏃、(有孔)磨製石鏃、磨製石器(石斧)
14	大根平遺跡	津具村字中口	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅱ～Ⅳ期？	石製紡錘車
15	上ノ平遺跡	北設楽郡東栄町大字中設楽字上ノ平	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅴ～Ⅵ期？	カンナ形石斧(扁平片刃石斧)
16	中貝津遺跡	北設楽郡東栄町大字中設楽字中貝津	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	不明	磨製石鏃
17	寺南遺跡	北設楽郡東栄町大字通称坂南	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	不明	磨製石鏃(有孔)
18	桜平遺跡	北設楽郡東栄町大字本郷字桜平	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅰ期？	磨製石鏃
19	寄近遺跡	北設楽郡東栄町大字本郷字寄近	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅱ期～Ⅵ期？	磨製石鏃
20	箱平遺跡	北設楽郡東栄町大字下田字箱平	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅱ期～Ⅳ期？	磨製石庖丁・磨製石鏃
21	面目路遺跡	北設楽郡東栄町大字下田字面目路	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	不明	磨製石鏃
22	笹平遺跡	北設楽郡設楽町大字小松字笹平	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅱ～Ⅳ期？	石槌
23	三軒屋遺跡	北設楽郡設楽町大字川向通称三軒屋	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	不明	大型石錘
24	桜ノ木遺跡	北設楽郡稲武町大字中東サ桜ノ木	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	不明	打製石鏃
25	シッタキ遺跡	北設楽郡稲武町大字小田木字シッタキ	『北設楽郡史　原始～中世』	1968	夏目一平	Ⅴ～Ⅵ期？	扁平片刃石斧、抉入石斧
26	高橋遺跡	豊田市高橋町	豊田市教育委員会『高橋遺跡発掘調査報告書』	1968	久永春男	不明	砥石・石鏃
27	高橋遺跡	豊田市高橋町	豊田市教育委員会『高橋遺跡発掘調査報告書』	1971	不明	Ⅴ～Ⅵ期	凹石・石皿・石鏃・磨製石斧・石刀
28	加治遺跡	渥美郡田原町大字加治字取手	『田原町史』上巻	1971		不明	磨製石斧
29	宮西遺跡	渥美郡田原町	『田原町史』上巻	1971		不明	磨製石斧、石庖丁、石鏃、敲石ほか
30	於御所遺跡	岡崎市岩津町	岡崎市教育委員会『岡崎市岩津町於御所遺跡』	1972	(斉藤嘉彦)	Ⅴ～Ⅵ期？	太型蛤刃形石斧、砥石、凹石ほか
31	松崎八反田遺跡	西尾市八ッ面町八反田	『西尾市史　自然環境・原始古代』－	1973	牧富也ほか	Ⅱ～Ⅵ期？	太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石錘
32	岡島遺跡	西尾市岡島町	『西尾市史　自然環境・原始古代』－	1973	牧富也ほか	Ⅱ～Ⅳ期？	太型蛤刃石斧
33	住崎遺跡	西尾市住崎町	『西尾市史　自然環境・原始古代』－	1973	牧富也ほか	Ⅱ～Ⅵ期？	太型蛤刃石斧
34	久府久神社遺跡	西尾市熊味町山畔	『西尾市史　自然環境・原始古代』－	1973	牧富也ほか	Ⅱ～Ⅵ期？	石錘
35	熊子山遺跡	西尾市八ッ面町熊子山	『西尾市史　自然環境・原始古代』－	1973	牧富也ほか	Ⅱ～Ⅵ期？	打製石鏃
36	清水包含地	西尾市平坂町中畑字清水34	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	縄文晩期初頭・Ⅰ～Ⅱ	打製石鏃、横型石小刀、石錐
37	岡島包含地	西尾市岡島町西	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅲ～Ⅳ期？	太型蛤刃石斧、抉入石斧、打製石鏃
38	五本松包含地	岡崎市美合町五木松	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅱ期	石錐(縄文も含む)
39	味噌柏岩包含地	岡崎市井口町味噌柏岩	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅰ～Ⅳ期	石小刀
40	上条包含地	安城市上条字根崎	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅱ～Ⅵ期？	太型蛤刃石斧等
41	坂戸包含地	岡崎市板戸	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅱ～Ⅵ期？	太型蛤刃石斧、小型扁平石斧
42	高師原散布地	豊橋市高師原	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	不明	石剣

No.	遺跡名	所在地	報告書名、論文名	発行年	報告者名	時期	出土石器の種類
43	河原田遺跡	宝飯郡御津町上佐脇河原田	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅲ～Ⅳ期	太型蛤刃石斧、打製石鏃
44	麻生田包含地	豊川市麻生田字当貝津	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	不明	太型蛤刃石斧
45	水神平遺跡	宝飯郡一宮町上長山字西水神平～東水神平	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅰ～Ⅱ期	磨製石斧、乳棒状鏃製石斧、環状石斧ほか
46	小森遺跡	渥美郡渥美町大字中山字小森	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅲ期	（磨製）石庖丁
47	中山貝塚	渥美郡渥美町中山字天白	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅴ～Ⅵ期？	打製石鏃、磨製石斧
48	石神貝塚	渥美郡渥美町大字石神字中平野	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅳ～Ⅵ期？	石剣
49	宮西遺跡	渥美郡田原町大字大久保	『東海の先史遺跡』	1974	紅村弘	Ⅴ～Ⅵ期？	打製石鏃、石庖丁？、砥石、鏃石等
50	赤日子遺跡	蒲郡市神ノ郷町	『蒲郡市誌』	1974		Ⅴ～Ⅵ期	磨製石斧等
51	小針遺跡	知立市上重原町小針	知立市教育委員会『小針遺跡発掘調査報告』	1976	清水正明	Ⅲ期	（打製）石鏃
52	天神遺跡	知立市西中町天神～永崎	『知立市史』上巻	1976		Ⅳ期	太型蛤刃石斧
53	丸塚遺跡	宝飯郡一宮町大字東上字丸塚	『一宮町誌』本文編	1976	牧野彦一ほか	Ⅲ期	打製石鏃、磨製石斧、打製石斧
54	新道遺跡	宝飯郡一宮町大字大木字新道	『一宮町誌』本文編	1976	牧野彦一ほか	Ⅵ期	磨製石鏃（有孔）、磨製石斧、打製石鏃ほか
55	上平井タイカ遺跡	新城市上平井字タイカ	新城市教育委員会『新城市上平井タイカ・豊栄真向遺跡』	1979	天野陽保	Ⅰ～Ⅵ期？	石鏃、打製石斧、（磨製）石庖丁、蛤刃石斧ほか
56	真向遺跡	新城市豊栄字真向	新城市教育委員会『新城市上平井タイカ・豊栄真向遺跡』	1979	織田勇司、中島義二	突帯紋Ⅰ～Ⅰ期	打製石庖丁
57	門前遺跡	蒲郡市清田町門前	蒲郡市教育委員会『門前遺跡』	1980	小畑頼孝、森田勝三	Ⅴ～古墳前期	石鏃、剝片
58	浪ノ上遺跡	豊橋市牛川町浪ノ上地内	豊橋市教育委員会『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書』第３集	1982	森田勝三	Ⅰ～Ⅱ期	石刃
59	永崎遺跡（含西中）	知立市西中町	知立市教育委員会『知立市考古資料集成』	1983	清水正明	Ⅰ～Ⅵ期？	太型蛤刃石斧、柱状両刃石斧、石槌
60	西中遺跡	知立市西中町	知立市教育委員会『西中遺跡１』	1985	清水正明	不明	石鏃、磨石
61	御薗遺跡	宝飯郡一宮町大字金沢	一宮町教育委員会『御薗遺跡発掘調査報告書』	1988	須川勝以	Ⅵ～古墳時代前期	磨製石斧
62	天神遺跡Ａ・Ｂ	知立市西中町天神	知立市教育委員会『知立市西中遺跡群発掘調査報告書』	1988	岡林茂史ほか	Ⅲ～Ⅳ期	打製石鏃、磨製石鏃、扁平片刃、磨製石斧ほか
63	瓦場遺跡群－大草	渥美郡渥美町大字伊良湖字大草	愛知県教育委員会『渥美半島埋蔵文化財調査報告』	1987	加藤岩蔵ほか	Ⅵ～古墳前期	石錘、石斧
64	為当条里遺跡	豊川市為当町	豊川市教育委員会『為当条里遺跡発掘調査報告書』	1997	前田清彦	Ⅴ～Ⅵ期	凹石
65	天神遺跡　Ｂ地区	知立市西中町天神	知立市教育委員会『知立市西中遺跡群発掘調査報告書』Ⅱ	1987	岡本茂史・鶴田真佐子	不明	扁平片刃石斧、打製石鏃、磨石、石皿ほか
66	中長遺跡	知立市西中町中長84番地１	知立市教育委員会『知立市西中遺跡群発掘調査報告書』Ⅱ	1987	岡本茂史・鶴田真佐子	Ⅰ期	打製石鏃、磨石
67	東光寺遺跡	額田郡幸田町深溝地内	幸田町教育委員会『愛知県額田郡幸田町東光寺遺跡発掘調査概要報告書－１・２・３次調査』	1987	小笠原久和	不明	磨製石斧
68	味噌柏岩遺跡	岡崎市井口町字深田３番地	『新編岡崎市史　史料』考古上	1997		Ⅱ期	打製石庖丁、磨製石庖丁、太型蛤刃石斧、砥石
69	荒新切遺跡	知立市西中町字荒新切	知立市教育委員会『西中遺跡群発掘調査報告書』Ⅲ	1989	伊吹香（岡本茂史）	Ⅰ～Ⅳ期	打製石鏃、局部磨製石斧、砥石、剝片
70	東光寺遺跡	額田郡幸田町深溝地内	幸田町教育委員会『愛知県額田郡幸田町東光寺遺跡発掘調査概要報告書－４・５・６次調査』	1988	小笠原久和、栗田真澄	不明	打製石鏃、磨製有孔石鏃、磨製片刃石斧ほか
71	荒新切遺跡	知立市西中町字荒新切	知立市教育委員会『西中遺跡群』Ⅳ	1989	岡本茂史	不明	打製石鏃
72	中根山遺跡	幡豆郡吉良町大字岡山字中根山	吉良町教育委員会『愛知県幡豆郡吉良町中根山遺跡発掘調査報告書』	1989	（加藤安信）	Ⅳ～古墳前期	鏃石、剝片、石鏃、磨石
73	南貝津遺跡	新城市大宮字南貝津	新城市教育委員会『南貝津遺跡』	1989	鈴木隆司	Ⅲ～Ⅵ期	紡錘車、石鏃（有孔磨製）、打製石庖丁、砥石
74	郷中遺跡	豊川市三谷原町	豊川市教育委員会『郷中・雨谷遺跡』	1989	小島隆、前田清彦	Ⅱ～Ⅵ期	太型蛤刃、抉入柱状片刃、扁平片刃ほか
75	岡島遺跡	西尾市岡島町	財愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡』	1990	野口哲也（池本正明）	Ⅲ～Ⅳ期	太型蛤刃、柱状片刃、偏平片刃、石庖丁ほか
76	荒新切遺跡	知立市西中町字荒新切	知立市教育委員会『西中遺跡群』Ⅳ	1990	岡本茂史	不明	打製石鏃、扁平片刃石斧、磨製鏃形石製品
77	河原田Ａ地点遺跡	宝飯郡御津町	『御津町史』本文編	1990	小笠原久和ほか	Ⅱ～Ⅳ期	石鏃、石槌、石小刀、石庖丁
78	平野遺跡	渥美郡渥美町大字石神字中平野	『渥美町史　考古・民俗編』	1991	小野田勝一	Ⅵ期？	敲石、凹石、石斧、石錘
79	麻生田大橋遺跡	豊川市麻生田町大橋	財愛知県埋蔵文化財センター『麻生田大橋遺跡』	1991	石黒立人	突帯紋Ⅰ～Ⅲ期	磨製石斧、剝片石器、石棒、石剣ほか
80	欠山遺跡	宝飯郡小坂井町大字小坂井欠山	小坂井町教育委員会『愛知県宝飯郡小坂井町欠山遺跡』	1991	須河勝以	Ⅲ～古墳前期	太型蛤刃、偏平片刃、乳棒状石斧ほか
81	西中神明社南遺跡	知立市西中町跡落・西街道	知立市教育委員会『愛知県知立市西中神明社南遺跡発掘調査報告書』	1992	岡本茂史	Ⅰ～Ⅲ期	短冊型打製石斧、磨製石斧、剝片、砥石
82	岡島遺跡	西尾市岡島町・江原町	財愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』	1993	松田訓（池本正明）	Ⅲ～Ⅳ期	太型蛤刃・柱状片刃・扁平片刃・磨製石庖丁ほか
83	麻生田大橋遺跡	豊川市麻生田町大橋	豊川市教育委員会『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』	1993	小島隆	突帯紋Ⅰ～Ⅲ期	石鏃、磨製石斧、横刃形石器ほか
84	岡島遺跡	西尾市岡島町・江原町	財愛知県埋蔵文化財センター『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』	1993	松田訓（池本正明）	弥生中期前～後葉	磨製石庖丁・太型蛤刃・柱状片刃・石剣ほか
85	白石遺跡	豊橋市巻木町石巻本町字櫃割39	豊橋市教育委員会『白石遺跡』	1993.3	贄元洋	突帯紋Ⅰ～Ⅲ期	磨製石斧、打製石斧、打製石鏃、石錐ほか

大毛池田遺跡93Ｂ区ＳＸ10、ＮＲ02出土の遺物について

北條真木

はじめに

大毛池田遺跡は、愛知県一宮市北西部に位置し、現況では標高10m前後の木曽川の自然堤防上に広がる。東海北陸自動車道建設に伴う事前調査として、平成４年４月から調査を開始し、本年度の調査では、古墳時代前期から中世に至る遺構・遺物が確認された。なかでも奈良～平安時代に属する資料では、竪穴住居で構成される居住域が検出されたほか、遺跡周辺の性格を決定づけると思われる重要な発見があった。

まず出土遺物では、小片とはいえ銅製の椀蓋片が見つかっている。これは発掘調査による古墳以外の出土としては、東海地方でも初めての事例である。この銅椀出土地点周辺の溝から特徴のある須恵器が多数出土し、調査が進むにつれてその性格の判断は慎重にならざるを得なくなってきた。

当該地域はこれまで古代史を検証する資料を欠いてきたこともあり、以上の成果をふまえた今後の発掘調査への期待は大いに高まっている。そこで、多くは未だ憶測の域をでないものの、これまでの調査成果を提示しながら、若干の考察を述べてみたいと思う。

調査の概要

Ｂ区基本層序は、第１層；耕作土、第２層；暗褐色シルト、第３層；灰黄色シルト、第４層；灰褐色粘土、第５層；暗紫褐色粘土（古墳時代前期水田)、第６層；灰オリーブ粘土、第７層；灰褐色中粒砂の順の堆積を確認し、奈良から平安時代に属する遺構面は、主に第３層上位で検出した。

ただし、第３層上位では部分的に厚さ25cm程度の褐色シルト層の広がりがみられ、特に明確な遺構は確認できなかったものの、多数のピット、遺物を確認した。この層からはＫ－14号窯式期からＫ－90号窯式期に併行する灰釉陶器椀、皿、耳皿などのほか、銅椀蓋片が出土し、問題となるＳＸ10はこの付近の褐色シルト層を掘り下げる段階で、また須恵器を多く出土したＮＲ02は、ＳＸ10直下で検出された。

以下、このＮＲ02とＳＤ10について詳述する。



第１図　調査区位置図（１：5000）

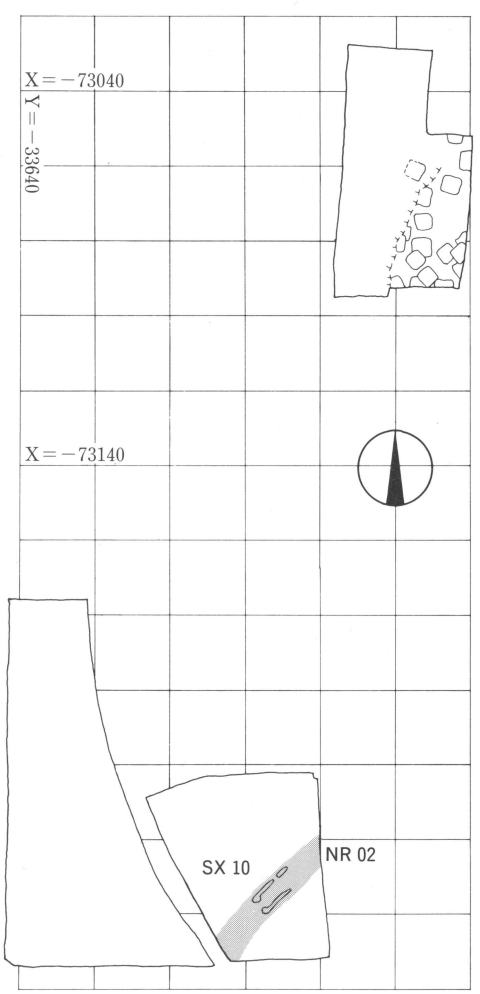
ＮＲ02（第３図）

ＮＲ02は、幅約６ｍ、深さ1.3mの自然流路状の溝であり、第３層中位から掘りこまれ、最深部は第７層ベースの砂層に達していた。溝は調査区西端でやや幅広となりまた浅くなってゆき、南へ屈曲する可能性も考えられる。この溝の埋土は

大半がレキ混じりの砂層で、この底部に近い位置から須恵器杯、椀、蓋、甕、高杯片、土師器など多数が出土した。

1．杯

無台と有台の2種があり、まず無台のものでは、2は口径11.9cm、高さ3.7cm、淡い青灰色を呈し、内外ともにナデ調整、底部は渦巻状にヘラ切りの痕跡がみられる。9は口径12.4cm、高さ3.6cm、暗灰色を呈し、丸みをもった底部からやや内彎して口縁に至る。底部は回転糸切りである。10は口径12.8cm、高さ3.8cm、平底の底部から斜め上方に直線状にのびて細くおわる。底部は中央にかけて厚みを増し、外面に「十」と読める墨書を有する。側面は暗灰色、底部のみ灰褐色を呈す。



第2図　主要遺構配置図（1：2000）

有台の杯では、底部から体部に移行するあたりにやや膨らみをもち、高台が外に張り出すものが目につく。(4、7、12) 12は口径13.4cm、高さ3.5cm、外面は灰色を呈す。4は口径15.0cm、高さ5.0cm、内外面ともに特に白い色調が目を引く。1は口径17.1cm、高さ5.0cm、灰白色を呈す。底部は回転方向のケズリで、他の杯に比べて高台がやや細く長い。7は口径19.0cm、高さ4.4cm、胎土は緻密で全体が灰色を呈する。

2．椀

5は佐波理椀を模した椀である。(1)口径18.6cm、高さ6.2cm、体部下方は丸みをもち、内彎気味に立ち上がって体部に至り、口縁部は外反して端部が丸くおさまる。中位やや下に明瞭な沈線をめぐらす。

3．蓋

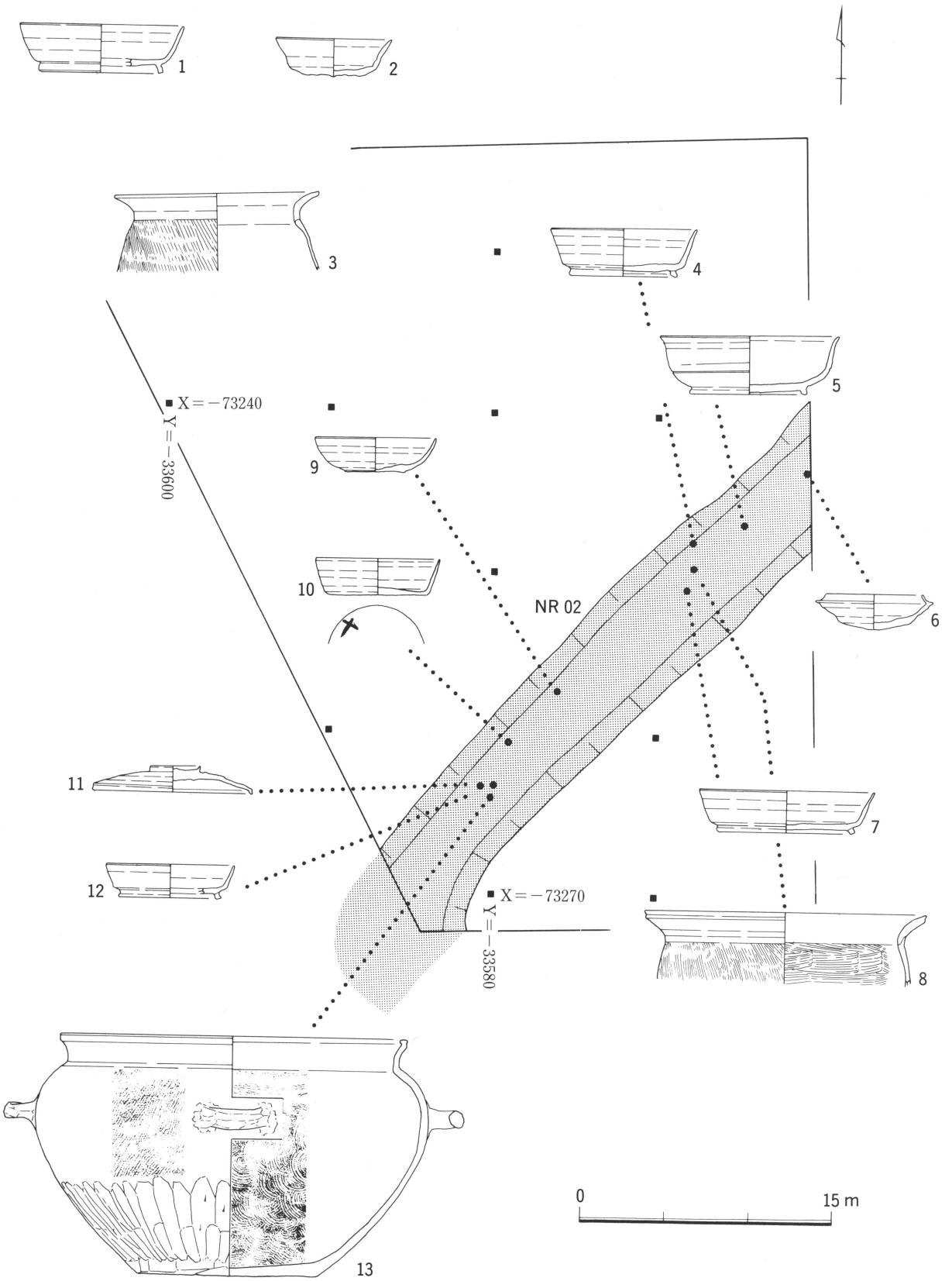
11も5と同様、金属器を模した蓋と思われる。(2)口径16.5cm、高さ2.7cm、紐は環状で端部が特に細く鋭く、肩には微かな稜をもつ。

4．甕

13は口径35.6cm、高さ24.5cmであり、内外とも白色に近い灰色を呈する。平らな底部から内彎気味にのびて胴部をなし、強く内側へ曲がって肩部を形成する。口頸部は内側がやや肥大する。肩部2箇所に半環状の取っ手をもち、外面下半部はタテ方向の削り、肩部側面は工具によるタタキ、内面にも当て具の痕跡を明瞭に残す。

土師器甕では、3は口径20.2cm、内面に僅かにススの付着がみられる。8は口径29.2cmで外面には細かいハケメが明瞭である。胎土は緻密であり、焼成も良好で明褐色を呈する。

これらの遺物の年代観は概ね、ＮＮ－32号窯式期に併行する資料を中心とした7世紀半ばから8世紀初めにあたる時期が考えられる。(3)時期差はそれほどみられない。遺物は完形品の割合が多く、



第３図　ＮＲ02遺物出土地点（遺物縮尺Ｉ：６）

砂層で検出されたにも拘らず、殆ど摩滅していない良好な状態であった。したがって溝が遺物と共に一挙に埋没した状況が窺われる。

ＮＲ02の出土遺物全般に共通する印象として、特に胎土が精良で調整に全く粗雑感のないことがあげられる。一般に金属器を直接模倣した器形には特に丁寧な調整が施されていることが多く、ここでも実際に出土遺物中の椀、蓋などは原形となる金属器が推定できるタイプであった。

ＳＸ10（第４図）

ＳＸ10は平均して幅80cm、深さ20cm程度の浅い溝ＳＤ15、16、17とこれらに区画された長方形プランで構成される。これは、先述したＮＲ02が完全に埋まった面の上で検出された。長辺の方向はほぼＮＲ02に一致し、幅もＮＲ02の幅に丁度収まる。溝で区画された内部には、12×４ｍ厚さ18cmのやや粘質の黄褐色シルトがあり、基壇状に人為的に充塡されたようにも見受けられた。

遺物では後述する銅椀蓋片がＳＤ16付近から、須恵器の小形壺２個体と長頸瓶の頸部１点、灰釉椀の小片などが区画内部から出土した。

これらの須恵器は、ＮＲ02出土遺物より若干新しい様相をみせ、いずれもほぼＯ－10号窯式期に併行する資料と考えられる。小形壺は頸部を欠いており、とりわけ２の欠損部周辺には人為的なものか区別できないが、打ち欠いたような剝離の痕跡がみられた。

なお、ＳＸ10の周囲ではこの時期に相当するその他の遺構・遺物は希薄であった。

ところで、これらの須恵器の供給地の一つとして考えられる尾北窯は、その特徴として強いていうならば猿投窯と比較して宗教的色彩の強い特殊な器物生産の比重がやや高いことが指摘されている。(4)出土須恵器でみられた傾向が生産地の特性あるいは遺跡の性格をどのように反映したものであるのか、今後の検討課題として興味深い。

考察

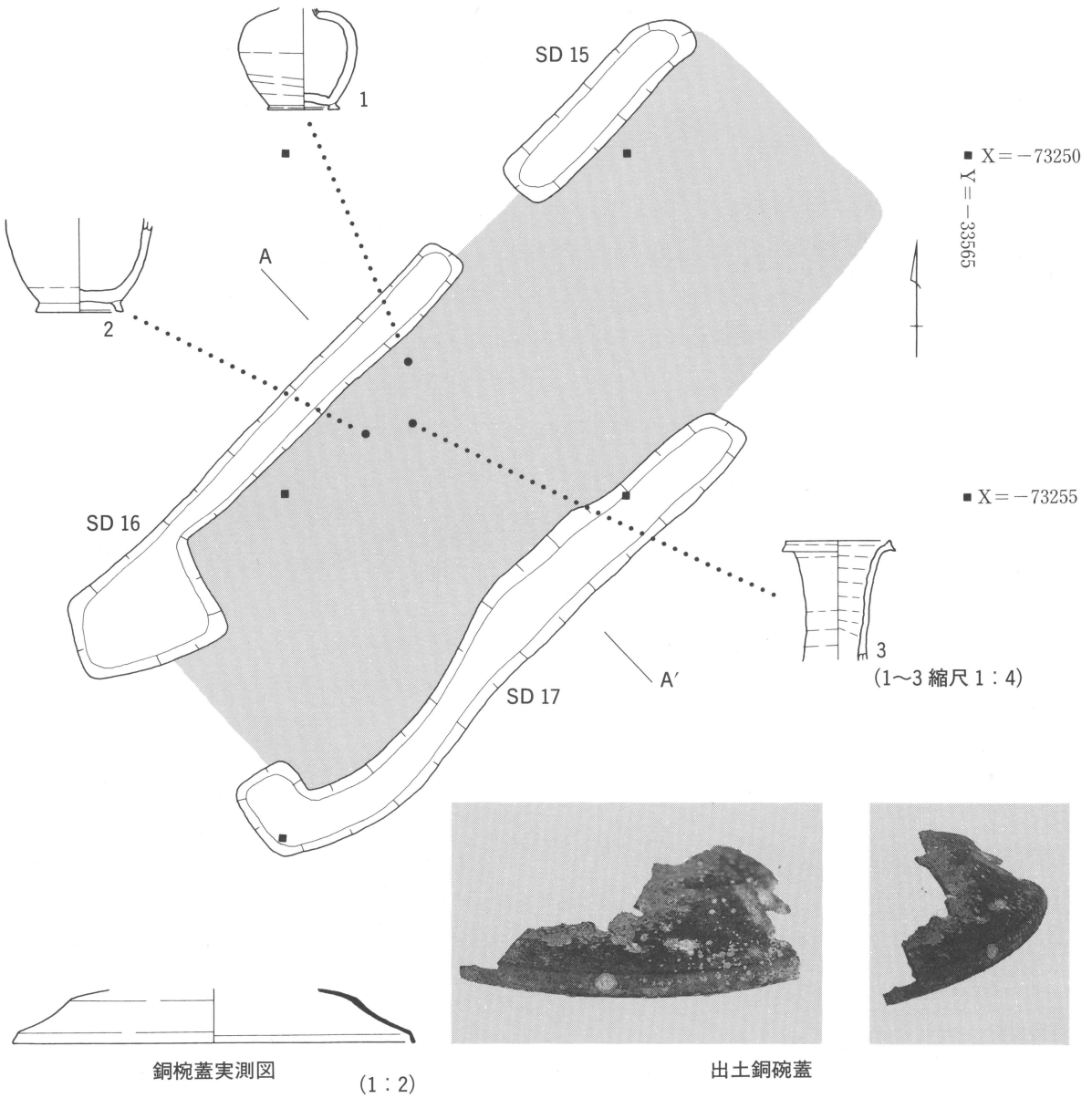
ここでは、出土銅椀の解説を加え、以上の成果とあわせて遺跡の全体像について考えてみたい。

Ⅰ．出土の銅椀蓋片について

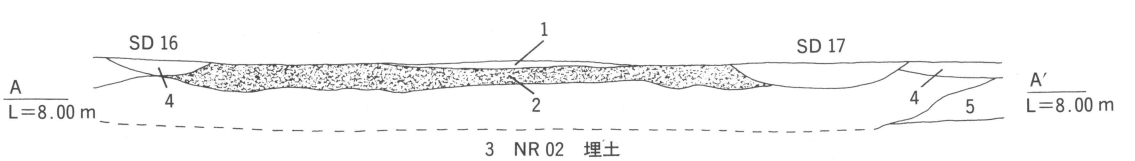
包含層から出土した銅製の蓋は、鋳造製で表面はロクロ仕上げにより平滑である。口径11.5cm、残存高1.6cm、外面中位に稜をもち、天井部は失われているが、おそらく環状の紐をもつタイプであったと思われる。この銅蓋とセットとなる椀身もやはり稜をもつタイプ、すなわち緑釉稜椀の形態に類するものを想像したが、(5)稜をもつ銅蓋では法隆寺献納宝物の響銅製蓋椀の優品が知られている。(6)これとセットになる椀身は腰部が稜をもって張り、そこから口縁部にむかって外へ開く。このような椀身の類例には、他に日光男体山出土例、(7)興福寺金堂鎮壇具、(8)長崎県矢立山古墳出土例(9)などがあるが、いずれも蓋の残存例がないため判断材料に乏しい。毛利光氏の銅椀の分類・編年によると、このような稜をもつ椀身は後出のタイプで、７世紀末から８世紀前半の時期が想定されている。(10)

このような金属器は、後期古墳の副葬品のほか、８世紀以降奈良時代から、寺院の金堂、塔などの建物の基壇から出土した事例が多く知られている。これは、地鎮・鎮壇の儀式に於いて、建物築成途中の基壇や塔心礎に埋納される舎利や貴金属などの供養物の容器として用いられるもので、法隆寺、太田廃寺（大阪府茨木市）などが銅椀安置法の明かな具体的資料である。(11)東海地方では、７世紀後半代に建立されたといわれる山田寺（岐阜県各務原市）の例があり、ここでは塔心礎中央に穿たれた舎利孔から銅製有蓋椀が発見されている。(12)

大毛池田遺跡では明確な建物跡は検出されなか



第 4 図　ＳＸ10遺物出土状況（１：100）



1　黄灰褐色シルト
2　黄褐色シルト（やや粘質）
3　黄褐色中粒砂
4　灰オリーブシルト
5　オリーブ黄色シルト

第 5 図　ＳＸ10断面セクション（１：50）

ったが、一片とはいえ銅椀のような特殊な遺物が検出されたことは注目に値する。また須恵器全般にみられた特性、金属器模倣の器形を含むことなど遺跡周辺の特殊性を特に際立たせる材料といえよう。

Ⅱ．ＮＲ02・ＳＸ10の性格について

ＮＲ02出土の遺物は、すべてが溝の底で検出され、全くローリングを受けていない良好な状態であった。出土状況からするとこの溝では激しい水流があったとは考え難く、また遺物は人為的に投棄された可能性も大いに考えられる。

ＮＲ02とＳＸ10出土遺物の時期差は、編年では半世紀程の幅に収まり非常に近接することから、前者が遺物を含んで廃絶した時期はかなり短期間に限定することができる。さらに、ＳＸ10がＮＲ02の方向をほぼ踏襲していることもこの状況を補強する。

検出された遺構は後世の洪水によって大幅に削平されており、ＳＸ10では建物跡の痕跡を判断することはできなかった。しかし、出土した遺物は宗教的色彩の濃い銅椀蓋片やミニチュア壺であり、これらを伴う何らかの特殊な建物、施設が周辺に存在した可能性がまず考えられよう。ＮＲ02も検出状況、遺物の検証からＳＸ10と関連するものであった可能性は高く、付近に存在が推定される特異な空間を区画する溝、すなわち寺院や官衙などの施設に付随するものではなかっただろうか。

まとめにかえて

今回の調査では、直接に遺跡の性格を決定づけるに充分な根拠は得られていない。ただ、以上の成果から類推するに、近辺には一般の集落とは異なる特異な空間が展開する可能性を考えられよう。

近辺では、継続して調査が予定されていることもあり、想定される特殊な空間を構成する具体的な施設、これを所有する集落の確認は、今後の課題として特に注目してゆきたい。

本稿を草するにあたり、赤塚次郎氏、尾野善裕氏、城ヶ谷和広氏、服部信博氏には多くの御教示・助言を頂きました。感謝の意を表します。

註

(1) 老洞古窯群第１号窯出土の椀Ｂ類に類似する。岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981／稲田山北第12～19号窯出土椀にも腰部に１条の沈線をめぐらす同様の椀がみられる。『各務原市史』

(2) 註(1)椀Ｂ類に対応する。岐阜市教育委員会『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981

(3) 楢崎彰一『猿投山西南麓古窯址群』 愛知県教育委員会1958

(4) 城ヶ谷和広「尾張猿投窯と尾北窯～飛鳥時代に見られる須恵器生産の様相～」『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』1993

(5) やや時期を下る緑釉稜椀は底部から斜め上方に直線状に立ち上がり、腰部で鋭い稜を形づくる。名古屋市考古学会 増子康真編『名古屋市熊ノ前古窯址群』1984

(6) 阪田宗彦「法隆寺の佐波理遺品」MUSEUM 280 1974／中野政樹「法隆寺献納宝物響銅加盤」MUSEUM 114

(7) 日光二荒山神社編『日光男体山－山頂遺跡発掘調査報告書－』 1963

(8) 文化財保護委員会『国宝図録』第７集 1961

(9) 毛利光俊彦「古墳出土銅椀の系譜」 考古学雑誌 64-1 1978

(10) ９の編年による。その後『古墳時代の研究』(雄山閣1991) に稿を改めたものがある。

(11) 上原真人「縄生廃寺出土舎利容器に関する若干の考察」『縄生廃寺発掘調査報告』朝日町教育委員会 1988 ／姜友邦「韓国古代の舎利供養具・鎮壇具」仏教芸術 200 1992

(12) 高台付きの有蓋椀。口径10.3cm、全高13.4cm、椀身、蓋ともに半球状で、蓋には宝珠形つまみをもつ。国指定重要文化財。『岐阜県史』通史編 原始

濃尾平野における歴史時代の地震痕—その２—

服部俊之

１．はじめに

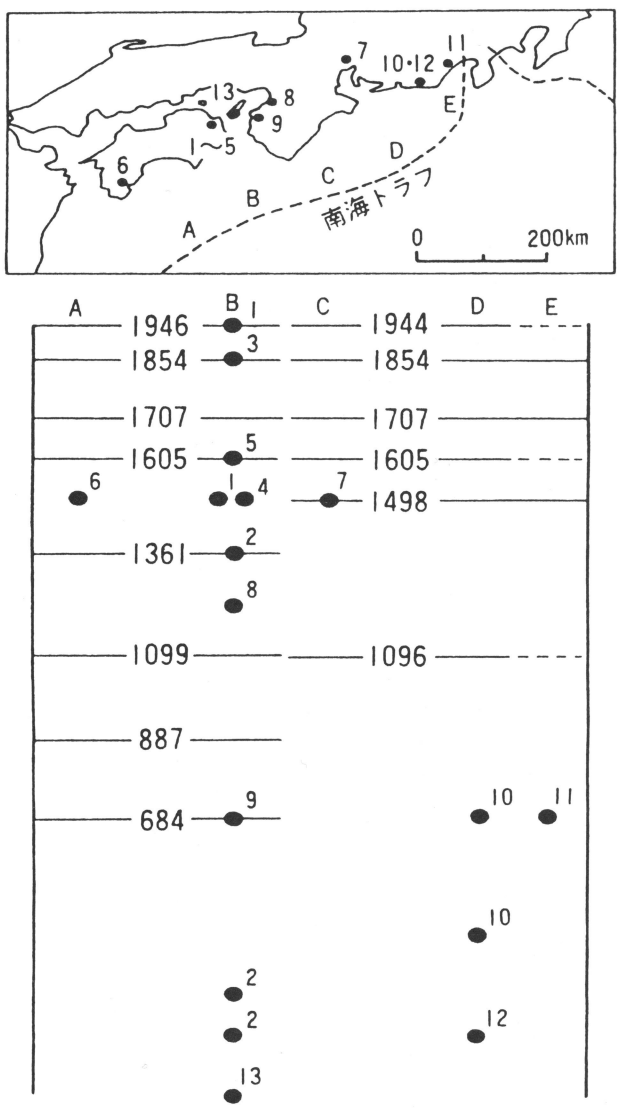
濃尾平野における歴史時代の地震の痕跡についてはすでに森ほか（1990，1991）、伊藤（1991）などで報告されている。ここで報告されている地震痕はおもに、1586年に発生した「天正地震」、1891年に発生した「濃尾地震」によるものである。この２つの地震は宇佐美（1987）をはじめとする地震史料研究で明らかにされてきた歴史地震と対応している。

しかし近年、寒川（1988）をはじめとする全国的な地震痕の研究によって、地震史料研究では発見されていない歴史地震の存在も明らかにされつつある。

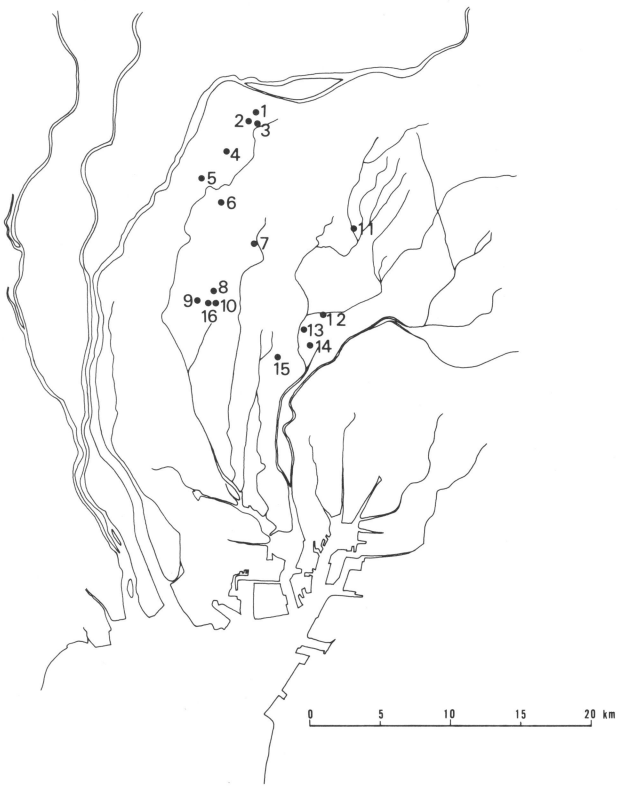
本論では、平成５年度に本センターが発掘調査を行った濃尾平野地域の遺跡で新たに発見された地震痕の中から、特に地震史料には記載されていない歴史地震による地震痕について報告する。

２．地震史料記録に登場しない地震の研究史

寒川（1988）をはじめとする地震痕の研究は、地震史料には記載されていない歴史地震の存在を明らかにしてきたが、そのよい例が南海トラフ上に震源をもつ、東海地震・南海地震型の巨大地震である。第１図に示すように、東海から四国にかけての太平洋地域では、この400年間ほどの間には100～150年周期で巨大地震が発生している。それ以前の巨大地震については、地震史料に残されている記録に欠落が多く、周期的な地震発生については不明とされていたが、地震痕研究により巨大地震の周期性は縄文時代頃まで遡らせるものとなった。



第１図　南海地震と東海地震の発生時期（宇津、1977の図に遺跡で見出された地震跡〈黒丸印〉を加えたもの）
1　宮ノ前遺跡　2　黒谷川宮ノ前遺跡　3　神宅遺跡　4　古城遺跡　5　黒谷川古城遺跡　6　アゾノ遺跡　7　尾張国府跡　8　石津太神社遺跡　9　川辺遺跡　10　坂尻遺跡　11　川合遺跡　12　鶴松遺跡　13　下内膳遺跡（寒川、1992）



第２図　地震痕が検出された遺跡位置図

	遺跡名	所在地	地震痕の形態
1	田所遺跡	一宮市田所	液状化層・断層・ 砂脈（TYPE Ⅰa，Ⅱa，Ⅱb）
2	大毛池田遺跡	一宮市大毛	砂脈（TYPE Ⅱa）
3	大毛沖遺跡	一宮市大毛	砂脈（TYPE Ⅰa，Ⅱa，Ⅱb）
4	西上免遺跡	一宮市今伊勢町	砂脈（TYPE Ⅱa）
5	大平遺跡	尾西市三条	砂脈（TYPE Ⅱa）
6	山中遺跡	一宮市萩原・大和町	砂脈（TYPE Ⅱa）
7	東畑廃寺跡	稲沢市稲島町	砂脈（TYPE Ⅱa，Ⅱb）
8	尾張国分寺跡	稲沢市国府宮	砂脈（TYPE Ⅱa）
9	一色青海遺跡	中島郡平和町	砂脈（TYPE Ⅰa，Ⅱa）
10	堀之内花ノ木遺跡	稲沢市堀之内町	砂脈（TYPE Ⅱa）
11	岩倉城遺跡	岩倉市大市場町	液状化層・断層
12	朝日遺跡	西春日井郡清洲町ほか	液状化層
13	清洲城下町遺跡	西春日井郡清洲町	液状化層・ 砂脈（TYPE Ⅰa，Ⅰb，Ⅱa）
14	外町遺跡	西春日井郡新川町	液状化層・ 砂脈（TYPE Ⅰb，Ⅱa）
15	甚目寺観音境内	海部郡甚目寺町	液状化層・ 砂脈（TYPE Ⅱa）
16	正楽寺儀長城遺跡	稲沢市儀長町	砂脈（TYPE Ⅱa）

砂脈のTYPEは、服部（1994）による。

第Ⅰ表　地震痕の検出された遺跡とそのタイプ

愛知県においても、服部（1993）が一宮市田所遺跡の古墳時代後期の水田跡を突き破り、その噴出面が奈良・平安時代の遺構に掘り込まれている噴砂（砂脈）を確認した。その遺構との新旧関係から、これを７世紀後半の地震活動による地震痕であると推定した。さらに愛知県同様、東海地震の被害発生地域である静岡県袋井市の坂尻遺跡、静岡市の川合遺跡でもほぼ同時代のものと推定される地震痕が見つかっている（寒川、1992）ことから、この地震は広域に被害を及ぼした巨大地震である可能性があげられる。東海地方でこの時期に発生した地震の記録はないが、このころ四国地方などで南海地震（684年の白鳳南海地震）が発生したことが日本書紀に記録されている。前述した巨大地震発生の規則性から考えると、田所遺跡の地震痕は白鳳南海地震に対応する東海地震型の巨大地震である可能性が強い。

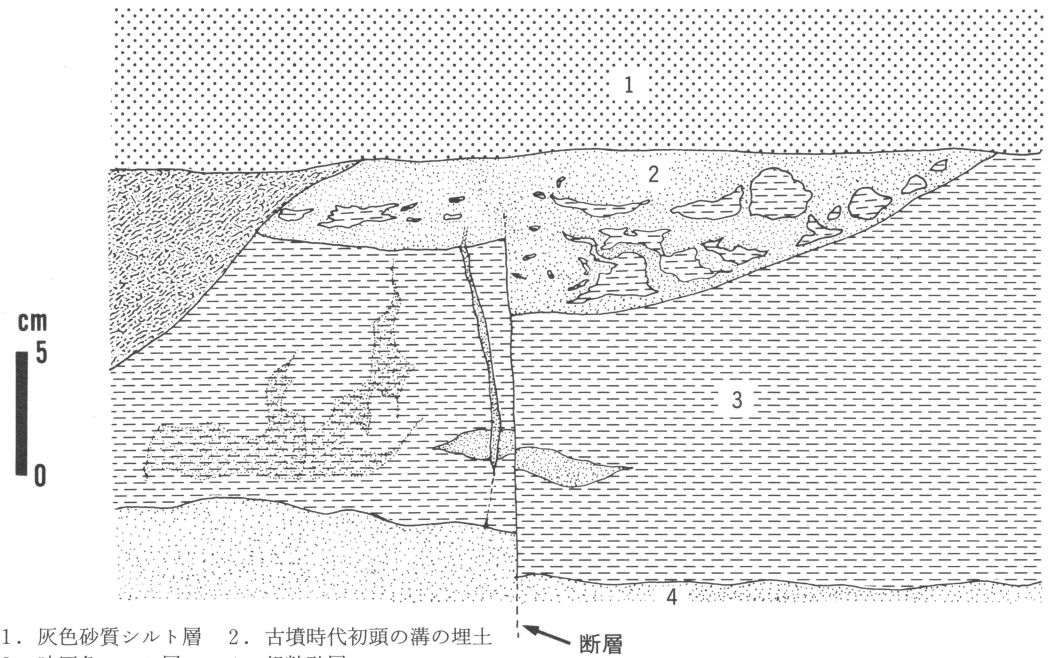
３．未知の歴史地震痕の記載

歴史時代に発生した地震が引き起こした地震痕のうち、史料に記録されていない地震の痕跡を本稿では『未知の歴史地震痕』と呼び、その記載を行う。

現在までに濃尾平野で地震痕の発見されている遺跡を第２図・第１表に示す。このうち未知の歴史地震痕が発見されているのは、田所・大毛池田・大毛沖・一色青海の４遺跡である。

⑴田所遺跡（第２図、１）

一宮市と葉栗郡木曽川町にまたがる田所遺跡は、北部に古墳時代前期を中心とした、南部に中世の墳墓堂を中心にした遺構が展開する。本遺跡における地震痕として、92年度発掘調査における92Ａ区で発見された前述の７世紀後半の白鳳南海地震に対応する東海地震と推定される巨大地震の地震



1．灰色砂質シルト層　2．古墳時代初頭の溝の埋土
3．暗灰色シルト層　4．粗粒砂層

第３図　田所遺跡93Ｄ区南壁スケッチ

痕がすでに報告されている（服部、1993)。そして、平成５年度の発掘調査によりさらに数ヵ所で他の地震による未知の歴史地震痕が確認された。

①93Ｄ区南壁断面（第３図）

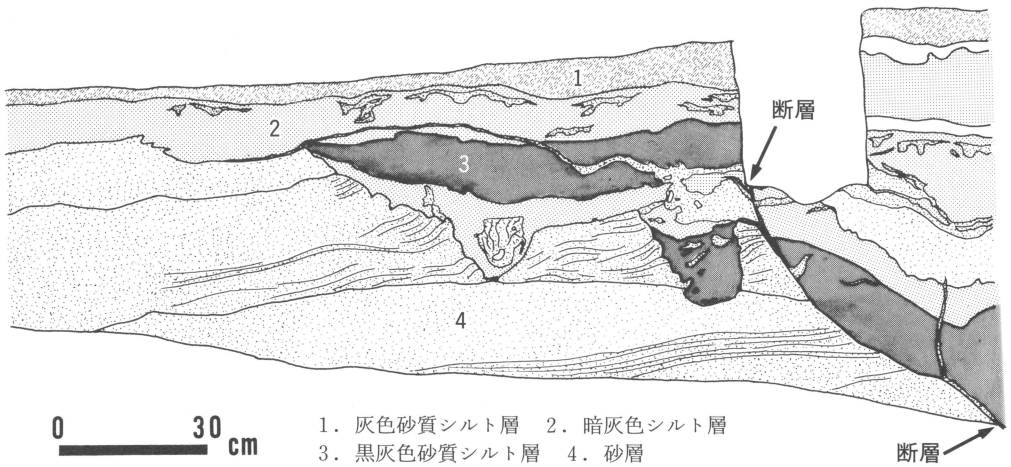
本調査区の基本層序としては、遺跡基盤層として粗～中粒砂層からなる河床堆積物が２ｍ以上堆積しており、その上位に古墳時代初頭の遺物（廻間Ⅱ、Ｓ字甕Ｂ類）を含む黒色～黒灰色のシルト層が、さらに上位に中世（13世紀前半頃）の遺物を含む灰色～暗灰色砂質シルト層が堆積している。ここで認められた未知の地震痕の垂直断面スケッチを第３図に示した。地震痕の形態は、断層および砂脈である。断層（正断層）は弥生時代末～古墳時代初頭の遺物を含む溝を見かけ上３㎝垂直変位させている。溝の上面は中世（13世紀前半）の遺物包含層に覆われているが、断層はこれに全く影響を与えていない。同時に幅３～４㎜程度の砂脈も観察される。この砂脈は溝の埋土を引き裂いて上昇しているが、上位の中世の遺物包含層には影響を与えていない。断層の影響を受けている溝の埋土は、中粒～粗粒砂を基質としたシルトのブロックからなり、人為的に急速に埋め立てられた堆積物である。そして、この埋土を構成する堆積物についても次の理由から地震の影響による液状化が起こっていると考えられる。

断層の影響を受けていない遺構（溝）の埋土と比較すると、地震の影響を受ける前の溝の埋土には、シルトブロックおよび基質の砂が均一に含まれていたと思われる（前述のように人為的な埋土であるがために分級化していない)。しかし、断層の上盤側にあるシルトブロックおよび基質の砂は、下盤側のそれに比べ細粒化しており、下盤側でもより粒子の大きな堆積物が下方に移動している。さらにシルトブロックには、マトリックスである砂層に引き伸ばされたような構造が認められる。これらは、地震によって形成された可能性が強い。

以上の観察事項から考えて、この地震痕を形成した地震の発生時期は古墳時代初頭以降で中世以前と考えられる。

②93Ｂ区トレンチ（第４図）

本調査区の基本層序は93Ｄ区と同様に、河床の堆積物である砂層を覆って古墳時代初頭の黒色砂



第４図　田所遺跡93区断層スケッチ

質シルト層と中世の灰色砂質シルト層が堆積している。ここでの地震痕は、断層および砂脈の２つの形態を示していた(第４図：垂直断面スケッチ)。

断層は、黒色砂質シルト層が、見かけ上西側に30cm程度沈降した正断層の形態を示している。さらに、この断層面とその周囲には砂脈が発達している。断層によって、沈降した西側の黒色砂質シルト層の上位には、東側には認められない厚さ20cm程度の砂層が堆積しており、断層によって沈降した部分を埋積している。その上位には断層を覆って中世の灰色砂質シルト層が堆積しているが、全く変位を受けていない。

砂脈は、断層面に沿って発生しているものと、断層とは直接関係なく発生しているものとが観察された。断層面に沿う砂脈は、上部で枝分れし、断層を横切るような水平方向で上下２本の砂脈となっていた。この２本の砂脈は断層の変位を受けている。下方の砂脈は、断層の東側で幅1.6cmであるが、西側では次第に幅を減じ消失してゆく。両者の間には2.4cmの落差があり、西側が落ちるという全体のみかけの変位とは逆に、西側が上昇している。さらに上方の幅３mm程度の砂脈も西側が上昇しているが、その変位量は７mm程度しかない。これは断層の活動中にまず下方の砂脈が発生し、継続中の断層活動によって変位を受け、続いて上方の砂脈が断層活動の終了間際に発生したものと考えられる。断層は見かけ上、正断層の形態をとってはいるが、砂脈の変位から考えるとその活動は逆断層であるとも考えられる。このことから、本来の断層活動は正断層的であるが、断層活動の終末に逆方向の変位が生じた可能性が指摘できる。

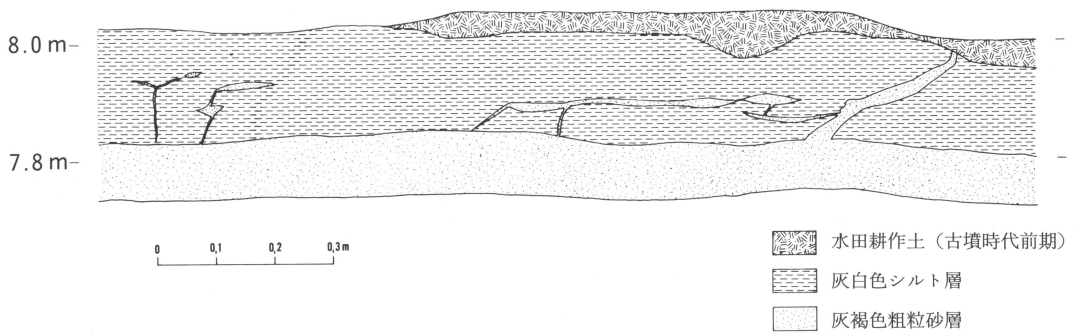
この断層の活動時期（つまり地震の発生時期）は、前述したように古墳時代前期以降、中世以前と考えられる。加えて砂脈のなかには中世の灰色砂質シルト層中に達するものもあり、中世以降にも地層に痕跡を留める地震活動があったことを示唆している。

⑵大毛池田遺跡―93Ａ区（第２図、２）

一宮市北西部と葉栗郡木曽川町にまたがる大毛池田遺跡は、古墳時代前期、古代、中世、戦国時代および近世の遺構が展開する。

本調査区の基本層序は、遺跡基盤層としての粗粒砂層の上位に15～20cmの厚さの灰白色シルト層が堆積し、この上面に古墳時代前期に利用された水田耕作土が認められる。

観察された地震痕は、水田耕作により上端を削られた砂脈である。垂直断面では遺跡基盤層の粗



第5図　大毛沖田遺跡の砂脈

粒砂層から幅2～3cmの砂脈が斜め方向に上昇しながら、上位の灰白色シルト層を引き裂いている様子が観察された。砂脈の上端は古墳時代前期の水田耕作時に削剝されており、水田耕作土中には及んでいない。

本調査区内ではこのほかに濃尾地震によって形成された砂脈群が観察される。この砂脈は、平面（遺構検出面）で幅5～10cmを有し、長さ1～3mのものが雁行状に配列している。垂直断面では、幅10～15cmの粗粒砂～細礫で満たされた砂脈がほぼ垂直に発達していた。この砂脈の上端は現代の耕作土により削剝されていた。

古期の砂脈と濃尾地震による新期の砂脈の形態は次の点で異なる。

濃尾地震の砂脈は規模も大きく、上位の地層を引き裂きながらほぼ垂直に噴出しているのに対して、古期の砂脈は上位層である灰白色シルト層の途中で水平方向に分散しつつ斜め上方に噴き上がる形態をとっていることである。震度の差、地震発生時の地下水圧の差・地震時の地層の固結度などが影響しているものと考えられよう。

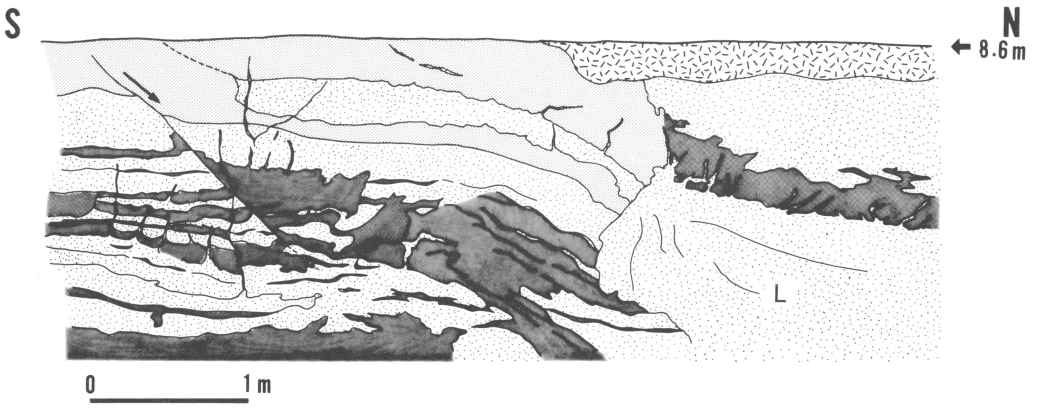
いずれにしても古墳時代前期からさほど古くない時期に比較的規模の大きな地震があったと考えられる。

(3)大毛沖遺跡―93C区（第2図、3）

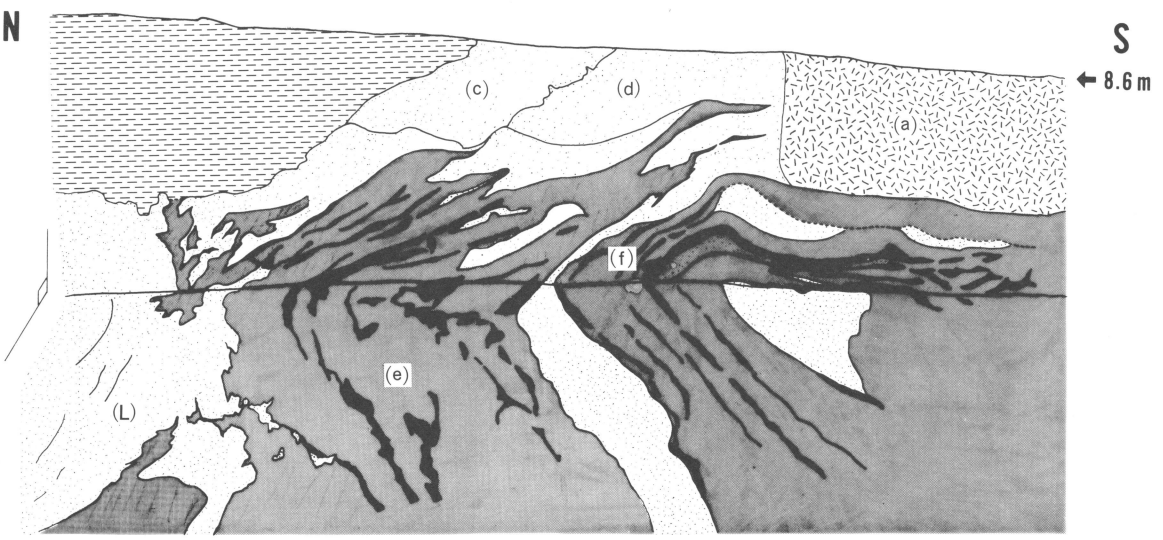
一宮市大毛沖遺跡は奈良時代から鎌倉時代にかけての遺跡である。本調査区では歴史時代以前の河床の堆積物と思われる粗粒～中粒砂層の上位に暗灰色シルト層が堆積しているが、地震の影響を受け著しく変形しており正確な基本層序を述べることは困難である。

第6図は、調査区内に設定した2つのトレンチの断面図である。いずれのトレンチからも断層活動の影響を受けたという曲構造が観察された。この構造から推定される断層の走向はN58°E、傾斜は上部で45°Nであるが、下部では傾斜が増し65°N以上になる。さらに第6図（A）に示したトレンチ断面では、とう曲による変形に伴って、シルト層中に正断層が発生している。また、断層面に沿うって垂直N斜め方向に噴砂が噴き上がっている。第6図（B）に示したトレンチ断面では、とう曲崖の形成にともなう小規模な地滑りと考えられるシルト（ないしは極細粒砂）のブロックが観察される。同時に、やはり断層面に沿って噴砂が噴き上がっている。

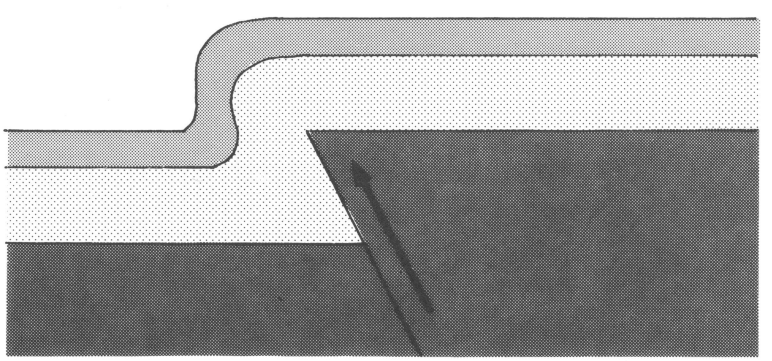
とう曲構造の上位にはシルト質砂層が水平に堆積しており、その中に12世紀代と推定される方形区画が掘り込まれている。また、とう曲により変形した地層の中から木片が採取された。この木片については^{14}C年代測定を行う予定である。現段階



(A) ←の部分で正断層が発生している。L の部分は噴砂による砂層。

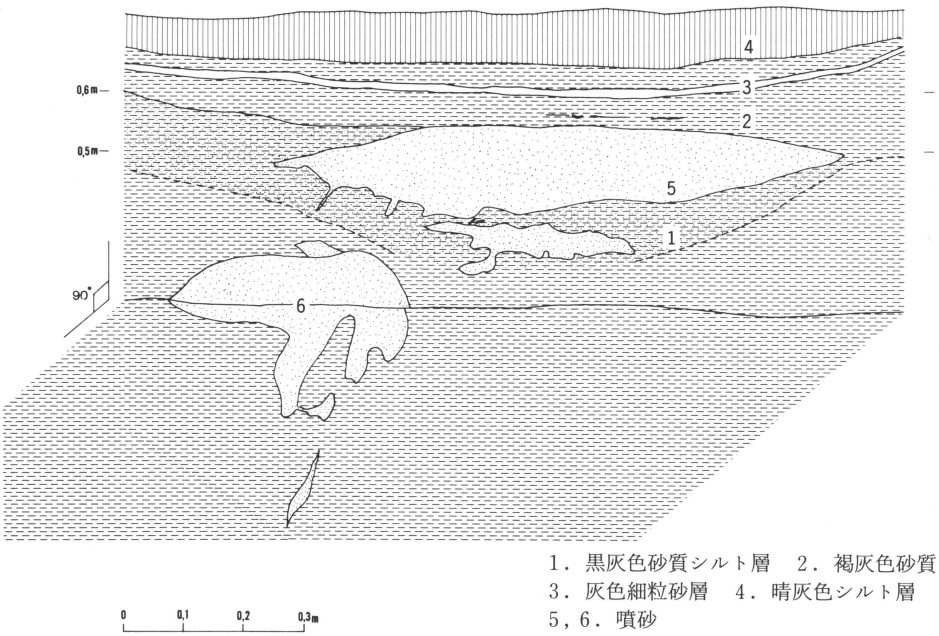


(B) (a)は 12 世紀代の遺構の埋土，(b)～(d)は河川の堆積物。(e)は地すべり堆積物である。(f)のとう曲は、N 58°E、45°N を示す。



(C) とう曲構造の模式図　断層活動により、上位の地層が変形する。

第 6 図　大毛沖遺跡のとう曲



1．黒灰色砂質シルト層　2．褐灰色砂質シルト層
3．灰色細粒砂層　4．晴灰色シルト層
5，6．噴砂

第７図　一色青海遺跡93Ａ区周溝埋土の地震源

階では詳細な断層の活動時期は不明であるが、少くとも12世紀以前のものであろう。

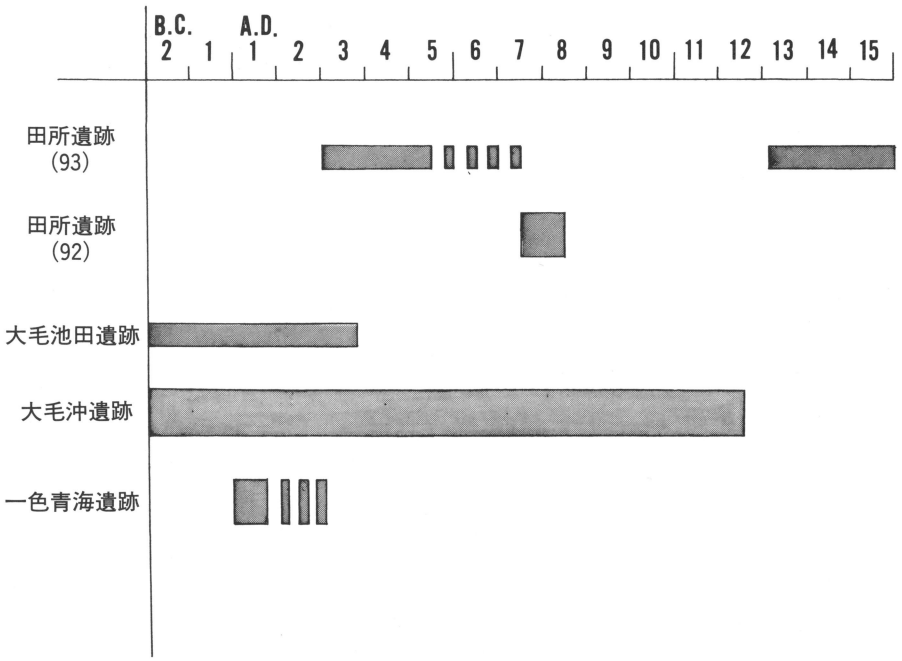
⑷一色青海遺跡―93Ａ区（第２図、９）

稲沢市と中島郡平和町にまたがる一色青海遺跡は、弥生時代中期と中世の遺構が展開する遺跡である。本調査区の基本層序は、下位から厚さ１ｍ以上の灰色中粒～粗粒砂層、60～80cmの褐灰色砂質シルト層、さらに上位に弥生時代中期末の遺物を含む黒灰色砂質シルト層、遺物を含まない褐灰色砂質シルト層、中世の遺物を含む暗灰色シルト層、灰色シルト層である。

地震痕には少なくとも２時期のものが存在しており、最新の地震痕は現代の耕作土直下まで達している。これは、砂脈の方向性が他の遺跡で確認される濃尾地震の方向性と調和的であることなどから濃尾地震の地震痕と考えられる。

これとは別に、高蔵式土器が検出された方形周溝墓の埋土中にも噴砂丘と考えられる地震痕が確認された（第７図）。周溝埋土の基本層序は、下位より高蔵式土器を含む暗灰色シルト層、灰色砂質シルト層、中世（13世紀）の遺物を含む黄灰色砂質シルト層となっている。噴砂は、高蔵式土器を含む暗灰色シルト層上に堆積した砂層として周溝内の数ヵ所で認められた。この砂層は、立体的に観察すると周溝の基盤層である褐灰色砂質シルト層を突き破り弥生時代中期末の堆積物を覆って噴砂丘状に堆積している。周溝外ではこの堆積が認められないことから地震発生時に薄くて、物理的に弱かった溝部分を引き裂いて噴砂が発生したものと考えられる。こうした痕跡が本調査区において少なくとも５ヶ所で観察された。

地震の発生時期については、溝内の地層は全体として中世の黄灰色砂質シルト層に至るまで連続的に、下位層を削剝することなく堆積していることから、弥生時代中期末から間もない時期と考えるのが妥当であろう。



第８図　地震発生時期の推定

４．地震発生年代に関する検討

各遺跡における考古遺物から考えられる地層の年代と地震痕の関係から推定した地震発生年代を第８図に示す。この図が示すように、濃尾平野では10世紀以前に、少なくとも３回の地震痕を残した大きな地震に襲われたことが分かる。特に、今回は1891年に発生した濃尾地震の古い周期的活動（仮称「古濃尾地震」）を知るうえで貴重な資料が発掘されたことに重要な意義がある。

濃尾地震については、1891年に、岐阜県本巣郡根尾村を中心とした根尾谷断層の活動が世界的にも有名であるが、その延長部の「岐阜--一宮線」の活動も見逃せない事実である。すでに服部（1993）などで報告したように、付近の遺跡に断層の左横ずれ運動を反映した地震痕を残していることを特徴としている。この「岐阜--一宮線」は、重力探査でも明瞭な痕跡を示す構造線であり、歴史時代にも繰り返し活動したものと推定される。今回の大毛沖遺跡の発掘調査で発見されたとう曲構造は、「岐阜--一宮線」の走向（ほぼN20°W）とは斜交するが、この構造線の活動を伴う「古濃尾地震」により発生した可能性が強い。一般に、内陸の大きな断層系の活動周期は数100年～数1000年といわれているが、今回の発掘調査の成果をもとにして正確な活動年代を求めることが可能である。これは、遺跡における地震災害史を考えるだけでなく、中部地方を襲いすさまじい被害を巻き起こした濃尾地震の周期についての検討を行うに十分な地震学的資料となり得る。この件については、年代測定の結果を待って別の機会に議論を行いたい。

謝辞

本論をまとめるにあたり通商産業省工業技術院地質調査所の寒川　旭主任研究官には、遺跡における調査および原稿執筆の指導をしていただいた。さらに愛知県立明和高等学校森　勇一教諭、㈶愛知県埋蔵文化財センターの方々には多大なる協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

文献

服部俊之（1993）濃尾平野における歴史時代の地震痕．㈶愛知県埋蔵文化財センター年報平成4年度，126－136.

服部俊之（1994）清洲城下町遺跡の地震痕．『清洲城下町遺跡（Ⅳ）』，㈶愛知県埋蔵文化財センター，18－28

伊藤隆彦（1991）愛知県山中遺跡から発見された地震痕．名古屋地学，**53**，31－35.

森　勇一・鈴木正貴（1989）愛知県清洲城下町遺跡における地震痕の発見とその意義．活断層研究，**7**，63－69.

森　勇一・鈴木正貴（1990）愛知県清洲城下町遺跡及びその周辺から発見された歴史地震の記録．歴史地震，**5**，33－41.

寒川　旭（1988）考古学の研究対象に認められる地震の痕跡．古代学研究，**116**，1－26.

寒川　旭（1992）地震考古学．中公新書，251p.

航空写真を利用した自然地形分類と遺跡の立地

鬼頭　剛・服部信博

Ⅰ．まえがき

航空写真は地質学・土木工学分野などの表層地質、土壌などを調査する初期的な段階で広く利用されており、論文も多い（例えば、門村，1965.，黒田，1965）。考古学分野においても航空写真は利用されている。遺跡の発見に航空写真を利用しているのはイギリスが先駆的であり、Ordnance SurveyのO. Crawford (1923) は遺跡の写真判読に関する数々の研究論文を発表している。近年、遺跡の発見に関する航空写真判読の教科書的な本も出版されており、例えばAir Photo Interpretation for Archaeologists (D. R. Wilson, 1982) ではイギリス国内におけるソイルマーク (soil mark)、クロップマーク (crop mark) より得られる遺跡の例を数多く挙げている。なお、クロップマークとは地下に遺構が埋まっていると、その地表の作物や雑草などの植物は周囲に比べて生育状態に差がでる。その差が写真の色調の差となって現れる模様をいう。また、ソイルマークとは自然の土壌と比べ、堀や周溝などの遺構部分が埋土の色調や土壌の湿度の差となって地表面に現れた模様のことをいう。

ところで、愛知県北西部地域ひいては濃尾平野は、典型的な沖積平野の例として地理学や地質学分野でも研究対象とされてきた（例えば、海津，1979，1981）。この地域で航空写真判読を行ったものとして松田（1968）の土壌判読の論文がある。しかし、遺跡を対象とした航空写真判読を行ったものは少ない。航空写真に示される沖積地形の形態的特徴および微地形と密接な関連を持ちつつ変化する写真の色調・濃度を系統的に分析し、微地形単位を設定することは、過去における人々がいかに自然を利用し、自然と付き合ってきたかという生活面復元のための鍵となろう。

本論では、予察的ではあるが濃尾平野北西部、一宮市から木曽川町にまたがる地域（図１）を対象に、主に土壌の乾湿の差を現すソイルマークの設定を基に航空写真判読を行い、写真上で確認される特徴および設定された微地形および地層単位と、現地試掘調査ならびに既存資料から得られる情報との相関関係をもとにして、自然地形と遺跡の立地について述べる。

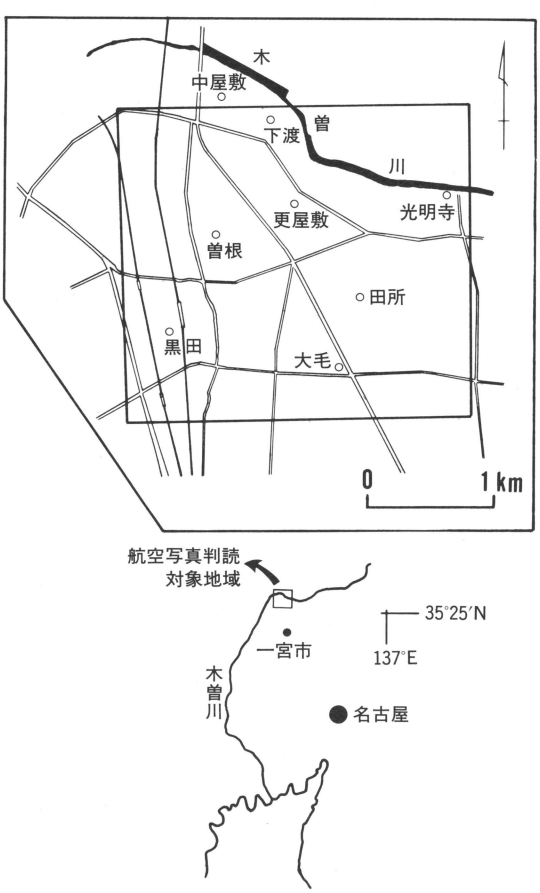


図１　航空写真判読対象地域

II．微地形分類による表層地質と土壌の判別

沖積平野の航空写真を扱うのであれば、地形とそれをつくる堆積物について熟知していなければならない。そこで門村（1965）に従ってそれらを整理しておく。

A．沖積平野の地形・地質

沖積平野地域の地表は、山地や扇状地、丘陵地と比較して起伏がは小さい。しかし、微視的スケールでみれば、自然堤防(natural levee)、突州(point bar)、放棄河道(ancient river)、三日月湖(oxbow lake)、および自然堤防や突州などの間の後背湿地（backswamp）が存在する（図２）。

これら微地形とそれをつくる堆積物との間には以下のような一般的関係がある。

１）低地域の微高地は、一般にこれと隣合う微凹地や平坦地（後背湿地）よりも粗粒な堆積物からなる。細粒堆積物は、周辺よりも相対的に低いところに位置する。

２）自然堤防は、後背湿地よりも粗粒な堆積物からなる。河道内の旧中州は、掃流によって運ばれた砂礫質の堆積物でできている。洪水時に粗粒な堆積物が河道の周辺に堆積して形成された自然堤防は、砂質ないしシルト質堆積物からなっている。これに対して、後背湿地では氾濫水が自然堤防の発達によって自然のダム的役目をし、河道への逃げ道を妨げられるため滞水する。そのため運んできた泥質堆積物が比較的長期間をかけて堆積する。自然堤防が安定している場所は、後背湿地の泥質堆積物の厚さが厚い。

３）河川の中・下流域では、放棄河道が認められる。その沿岸に自然堤防やポイント・バーがよく発達すると、ポイント・バーには厚い泥質堆積物が堆積する。

B．沖積平野の微地形の形態と写真判読法

土木工学の分野では、沖積平野の地形形態・堆積物と航空写真の色調との間に、次のような関係があることがわかっている（表１）。

１）周辺よりも低い微凹地や後背湿地に認められる暗い色調は、細粒で含水比の高い堆積物の存在を示す。また、有機物の含有量も大きい。明るい

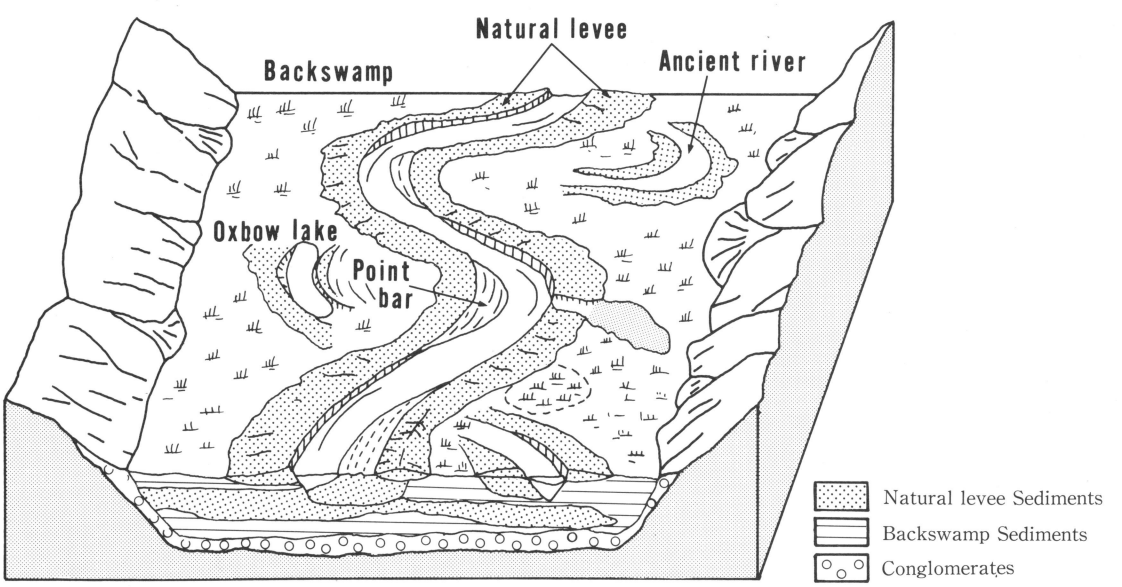


図２　沖積盆地の地形と地質
（貝塚その他編(1985)より）

色調を示す微高地（自然堤防）は、粗粒で含水比の低い堆積物からなる。

2）旧河道を判読するには地形的な特徴より、色調の差に着目する。微小な地形の高低の差が堆積物の含水比の差を左右する。それは写真の色調の差として現れる。また、堆積物の違いも色調の差となって現れ、写真では暗い色調を示す。

3）写真の色調は、堆積物の本来の色が反映されている場合がある。裸地ないしはこれに近い状態の土地、あるいは風成砂のような均質で乾いた砂は明るい一様な色調を呈する。砂粒子そのものの色が暗いほど、黒っぽい色調を呈する傾向がある。また、有機物の含有量の多い腐植質な堆積物は、一般に強い暗色を示す。

4）写真で認められる色調や濃度は、地表面から深さ２ｍくらいまでの堆積物の粒度組成と含水量を反映している（黒田，1963）。

5）沖積平野は人の生活の場でもあるので、写真の濃度や色調を利用をもとにして表層堆積物の判読を行う場合、人為的活動による改変に注意しなければならない。また、地下水は季節によって変化する。利用する写真の撮影時期に注意する必要がある。

Ⅲ．航空写真判読と対象地域の調査の実際

Ａ．航空写真判読

写真判読に使用した航空写真は、一宮市役所保有の1990年10月９日、高度1932ｍより（使用カメラ：ＲＣ10）で撮影した縮尺１／12500（3340番）のパンクロマティック写真を利用しておこなった。撮影範囲は、北は愛知県一宮市下渡から南は一宮市大毛に、西は木曽川町黒田から東は一宮市光明寺におよぶ東西、南北とも約2.8kmの範囲である（図１）。航空写真上に現れる濃淡を区分の手がかりにすると、北から一宮市中屋敷から下渡、更屋敷を通り白山神社、木曽川東小学校に至る境界線の東西で色調に差がみられる。線の西側では、北は一宮市北方から南は木曽川町のＪＲ新木曽川駅に至る東西約1.3km、南北約2.8kmの範囲には暗色部が確認される。境界線の東では、一宮市光明寺緑地南方から一宮市大毛に至る東西約1.5km、南北約1.4kmの範囲で明るい色調を示している。また、一宮市

微地形単位	形　　態	主な土地利用	色調	排水条件
扇状地	扇状	畑または森林	1–2	良
旧中州	網状流路に挟まれた微高地	畑、集落	1–2	良
自然堤防	現・旧河道に沿う微高地列	畑、集落	2	良～やや良
ポイントバー	蛇行帯内の微高地	畑、集落	2–3	やや良
後背湿地	平坦ないし皿状の微凹地	水田、沼沢地	3–5	極不良～不良
旧低水路	溝状凹地	水田、沼沢地	4–5	極不良
泥炭地		水田、沼沢地	5	もっとも不良
湿地		水田、沼沢地	4–5	もっとも不良

色調　１：もっとも明るい、２：非常に明るい、３：明るい、４：暗い、５：非常に暗い

表１　沖積平野の微地形とその特徴（門村（1965）より一部抜粋）

光明寺の集落を囲む東西約1.0km、南北約0.3kmの範囲と、一宮市田所の集落を囲んだ東西・南北とも約0.3kmの範囲の２カ所にも暗色を示す部分が確認される（写真１）。

愛知県一宮市と富山県小矢部市を結ぶ東海北陸自動車道の建設に伴い、愛知県埋蔵文化財センターでは、平成元年度より、路線予定地内に位置する遺跡の試掘調査及び本調査を実施してきた。それらを航空写真上にプロットすると、そのほとんどが明るい色調を示す領域に落ちる。ただ唯一、大毛池田遺跡の一部の南北に境界線が通り、暗色部と明色部の両方がみられる。

1974年国土地理院発行の２万５千分の１土地条件図（図３）によると、本研究対象の航空写真の範囲では、一宮市下渡から南へ木曽川東小学校に至る範囲は後背湿地帯になっている。その西側の一宮市狐塚・更屋敷・木曽川町黒田に至る範囲は自然堤防帯に区分されている。また、一宮市光明寺一帯および一宮市田所地域も自然堤防帯である。

写真判読で得られた結果と、土地条件図から得られる自然地形とを照らし合わせると、大まかな対応関係が読みとれる。一宮市光明寺緑地南方から一宮市大毛に至る範囲でみられる航空写真の明色部は後背湿地帯にあたる。一宮市北方から木曽川町黒田で確認された暗色部は自然堤防帯に対応しているようである。また、一宮市光明寺および田所の集落を取り囲んでみられる暗色部は自然堤防帯に対応している。

以上のように航空写真判読で得られる明暗部と自然地形とは、その分布形態においておおよその対応関係がみられた。

Ｂ．遺跡の現地調査との比較

現在発掘調査が進められている東海北陸道関連の遺跡は、航空写真上では明色部にプロットされ、自然地形では後背湿地との対応関係がみられた。ここでは今回の分析対象地とした遺跡をとり上げ、その概略を説明する。

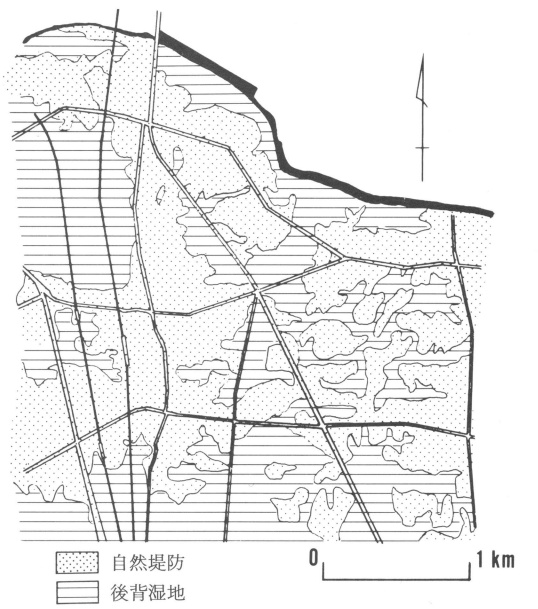


図３　一宮市北西地域の土地条件図

（仮称）光明寺Ｂ遺跡…一宮市光明寺地内　標高10m　現状：水田

平成４年に遺跡の南北方向に４ヶ所のテストトレンチ（ＴＴ１～ＴＴ４）を設定し、遺跡の所在を確認した。しかし、ＴＴ１では耕作土直下に中粒砂層が、ＴＴ２～ＴＴ４では、耕作土下にシルト層と粘質土層の自然堆積層が交互に現れ、明瞭な遺構・遺物は確認できなかった。

田所遺跡…一宮市光明寺～田所地内　標高９m　現状：水田・畑地

田所遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡であり、平成４年度より継続して発掘調査を実施している。遺跡は、その出土遺物・遺構などよりＡ～Ｃの３つのブロックにわけて考えることができる。

Ａブロックの中心的な遺構・遺物は古墳時代初



写真1

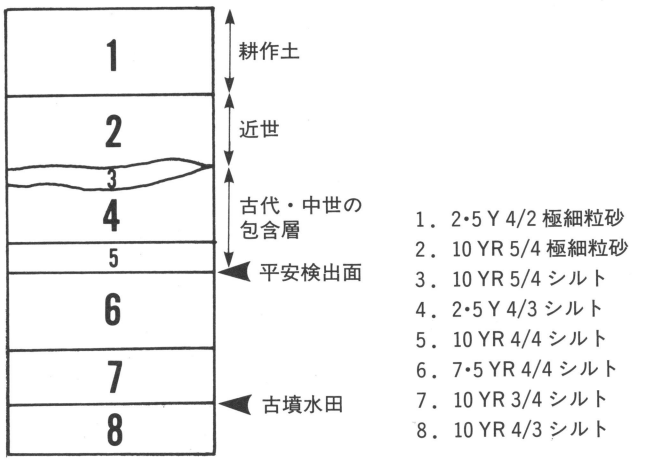


図4　田所遺跡の基本層序

頭に求めることができ、これらの遺構では、おおむね、耕作土下に該期の遺物を含む黒褐色砂質シルト層が堆積し、この層の下位で溝・土坑などの遺構が検出されている。

B・Cブロックからは、中世を中心とした遺構・遺物が検出され、地点によっては古代の居住域および古墳時代の水田遺構が確認されている。Bブロックは、中世期の墓域および中・近世の水田域に相当する。墓域を構成する遺構は、耕作土下位の黒褐色砂質シルト層上位から掘削されている。また、墓域の南部はレベル的にやや落ち込み、中世および近世期の水田が展開していた。Cブロックは、Bブロックで確認された墓域に対応する幅8m程度の大溝で囲まれた居住域に相当する。また、地点によっては、堆積状況が後世の削平を受けることなく、良好な状態で残存しており、図4に示したように古墳時代から現代に至る変遷過程を層位を追って把握することができる。

大毛遺跡…一宮市大毛池田・沖地内　標高8.5m
現状：水田・畑地・宅地

大毛遺跡は、試掘調査によって中央部に谷状の地形が広がっていることが確認され、東部の大毛沖遺跡と西部に展開する大毛池田遺跡とにわけて考えることができる。

大毛沖遺跡…大毛沖遺跡では古代・中世期の集落跡と考えられる遺構が確認されている。基本層序は、おおむね上位より現耕作土、淡灰褐色シルト層（中世）、灰色砂質シルト（古代）、灰色シルト層の順に堆積し、基盤面と考えられる灰褐色砂層に至る。

遺構の詳細は報告編に詳しいので、そちらに譲るが、遺跡の南から北に緩やかに傾斜しており、遺跡の南部に展開する微高地上に居住域、北部の低湿地部に墓域を形成した集落構成を窺うことができた。

大毛池田遺跡…大毛池田遺跡は古墳時代初頭から戦国時代にいたる複合遺跡である。遺跡の基本層序は、現耕作土、暗灰黄色シルト層（古代～戦国）、暗灰黄色シルト、灰褐色粘土層、暗紫褐色粘土層（古墳時代初頭）、灰オリーブ粘土、灰褐色砂層の順である。調査区の大半の部分が、後世の水田および中世初頭に存在した旧河川によって削平されており、遺構の残存状況は全体的に不良である。展開する遺構のあり方よりみれば、古墳時代初頭段階の水田遺構が確認され、低湿な環境であったと推定されるが、古代には、竪穴住居跡などが検出されており、微高地化していたと推定され

る。

Ⅳ．考　察

今回対象とした地域は、1974年国土地理院発行の２万５千分の１土地条件図によると自然堤防と後背湿地の土地要素からなる（図３）。これを航空写真より得られた結果と比較してみると、暗色部は自然堤防、明色部は後背湿地におおよそ該当する。しかし、Ⅱ－Ｂで述べたように、比高の高い自然堤防よりも低い後背湿地の方が地下水面が浅く、実際には写真上で暗色を示すことが予想される。ところが、今回得られた結果は期待されたものとは逆になっている。木曽川からの距離も隔たっておらず地下水面は一宮市内陸部よりも高いことが予想されるのである。ではこのような逆の結果はなぜ生じたのだろうか。これには三通りの考え方ができる。

一つは田所・大毛地域では層厚1.0～1.5ｍの厚いシルト層が堆積している。これが透水層である砂層をパックしているため、滞水層（下位層）の水の存在が地表面には現れてこないのかもしれない。

もう一つは堆積物本来の色に起因しているのかもしれない。Ⅱ－Ｂの２）で述べたように、物質本来の色が黒いものほど黒っぽい色調を呈する傾向がある。本調査地域であれば、遺跡の埋土はシルトや砂質シルト、極細粒～中粒砂が占めており色調は明るい色を呈することが期待される。また、田所遺跡93Ａａ区では遺物包含層は細粒砂を含んだ黒色から黒褐色を呈する腐植質土からなる。この層は調査区東方に向かい浅くなると予想される。例えば、図３で光明寺付近で見られる暗色帯は腐植質土が地表に露出している結果かもしれない。

３番目として、撮影された季節を反映している可能性がある。今回使用した写真は秋季に撮影されたものであり、地下水面は冬季に比べ高いことが予想される。また、植物（この場合は特にイネ）の繁茂状態も無視できない。これらのことが写真の色調を不明瞭にし、地下水面の差が明瞭に現れていないのかも知れない。撮影時期の違う写真があれば比較が必要であろう。

本論で扱った地域は蛇行河川(meandering river)帯にあたる。蛇行河川系では、時間の経過とともに蛇行ループがその外側（攻撃斜面側）へ向かって徐々に拡大・移動していく。そしてその背後(滑走斜面側）に、上方細粒化ユニットが残される。このユニットは、侵食面とその直上のチャネル・ラッグ（channel lag）で始まり、細粒の氾濫原堆積物で終わるのが一般的である。この場合、ユニットの厚さは蛇行河川の深さをほぼ反映していると考えてよい。蛇行ループがある限界を越えて成長すると、やがてネック・カットオフ(neck cutoff)またはチュート・カットオフ（chute cutoff）を経験するところとなり、その蛇行ループは放棄される。放棄されると同時に、カットオフ・チャネル（cutoff channel）が新生ループを造り始める。

以上のようなシステムで形成されるユニットは、地質学的に最も少なく見積もっても数百年オーダーあるいはそれ以上の時間を考えるのが妥当なところである（例えば、武藤，1991)。このことから考えれば、本論で扱った地域における遺跡の堆積物は１つのユニット中の一側面を見ているに過ぎないことは容易に想像できる。つまり、各遺跡を埋積するシルトおよびシルト質堆積物の卓越は、蛇行河川系堆積物の上方細粒化ユニットの末期の堆積物である。また、それは各遺跡の基盤が全て極細粒～中粒砂からなることからも支持される。

このことに関し、筆者らが現在担当している田所遺跡を例にする。本遺跡93Ｊ区では平安時代の遺物包含層である細粒砂混じりのシルト層の基盤は中粒砂または細レキ混じりの中粒砂である。この基盤砂層は調査区内の北から南へ徐々に地形高

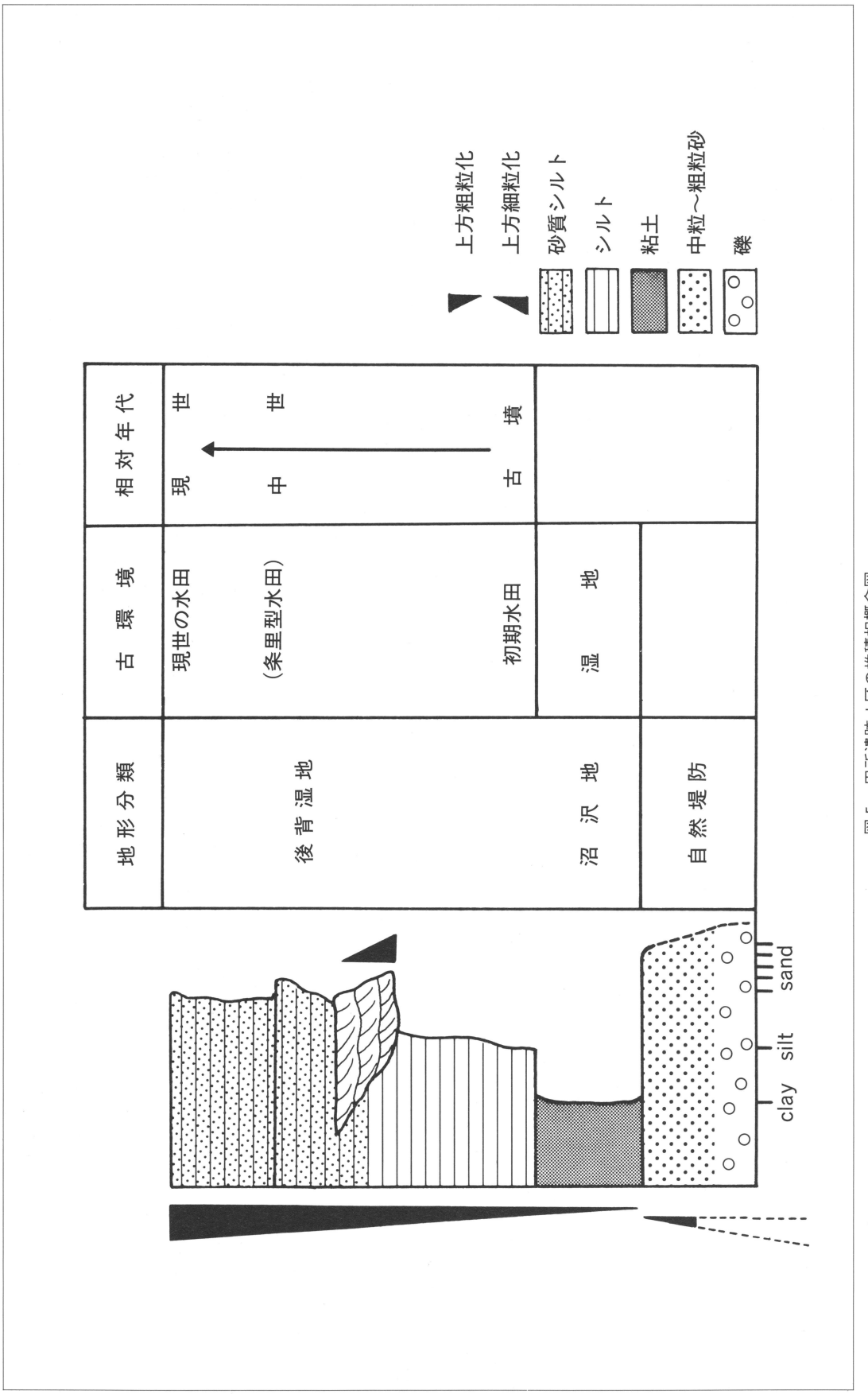


図5　田所遺跡Ｊ区の堆積相概念図

度を上げているのが確認され、堆積物の粒度と地形的な特徴から考えて当時の自然堤防帯であったと予想される。つまり、自然堤防を形成していた河川が流路を放棄してから以降の堆積物中に遺構・遺物はパックされている。Ｊ区で見られる堆積物の層相の概念図を示す（図５）。基盤である中粒砂～細レキ混じりの中粒砂よりも下位の層相は今のところわからない。しかし、おそらく、基盤砂層から上方細粒化（fining-upward）していると思われる。その上位には、実際の遺跡の埋土でみられる腐植質の黒色を呈する粘土が堆積し、シルトそして極細粒砂から細粒砂混じりのシルトが堆積してきている。ここで注目すべき点として、黒色粘土が堆積して現世の水田面に至るまでの堆積物は上方粗粒化（coarsening-upward）してきていることである。この様な砂層を基盤にして腐植質粘土→シルト→極細粒砂～細粒砂混じりシルトという重なり方は、層厚の差こそあれ、大毛遺跡でも認めることができる。

以上のような規則性が、後背湿地という環境に共通のものであるならば、本研究地域の遺跡は流路を放棄した後の後背湿地内に展開しており、湿潤な環境が、大毛遺跡や田所遺跡で見られるような水田跡が多いという性格となっていると思われる。

ところで、河川流路の堆積物に関する論文は数多くある（例えば、伊勢屋，1982；Iseya，1989；Iseya and Ikeda，1989；Miall，1989）。しかし後背湿地のみで起きる堆積作用や地形変遷、環境変遷について述べたものは少ない。今後このような後背湿地に関するデータを蓄積させていくことは、地質学的にも考古学的にも重要であろう。

Ⅴ．まとめ

本研究の内容は以下の事項に要約することができる。

１．一宮市北西部地域の航空写真からは、一宮市中屋敷から木曽川東小学校に至る南北に延びる線を境に西側に暗色部、東側に明色部が確認される。また、一宮市光明寺および田所地域にも暗色部が確認される。

２．写真上で確認される明暗部は土地条件図の自然地形とほぼ対応している。暗色部は自然堤防に、明色部は後背湿地に対応しており、自然地形から推定される写真の明暗が、本研究地域の写真上では逆になっている。

３．東海北陸道建設路線予定地内の遺跡は、そのほとんどが航空写真上の明色部にプロットされる。

４．写真の明暗が逆転している原因として、透水層である砂層を覆う厚いシルト層の存在、堆積物本来の色の違い、撮影時期の地下水面の状況の三通りが考えられた。以上については今後の検討が必要である。

５．一宮市大字田所および大毛地域では、細レキ混じりの中粒～粗粒砂の上位に、腐植質黒色粘土→シルト→極細粒～細粒砂質シルトが堆積する。また、それは全体に上方粗粒化の傾向を示す。

謝辞：本論を作成するにあたって以下の諸氏・諸機関に御助言・御協力いただいた。末筆ながら記して感謝いたします。（以下敬称略・順不同）森勇一、武藤鉄司、大照明徳、一宮市役所

文献

Crawford, O.G.S., 1923, Air survey and archaeology, Geographical Journal, May 1923, 324-366

伊勢屋ふじこ，1982，茨城県、桜川における逆グレーディングをした洪水堆積物の成因，地理評，55，**9**，597–613.

Iseya F., 1989, Mechanism of inverse grading of suspended load deposits, Sedimentary Faces in

the Active Plate Margin, A. Taira and F. Masuda, Eds., 113-129.

Iseya F., and Ikeda H., 1989, Sedimentation in coarse-grained sand bedded Meanders : Distinctive deposition of suspended sediment, Sedimentary Faces in the Active Plate Margin, A. Taira and F. Masuda, Eds., TERRAPUB, 81-112.

門村　浩，1965，航空写真による軟弱地盤の判読〈第１報〉－微地形の系統的および計測的分析による判読法の適用について－(1)，写真測量，4，4，24–33

貝塚爽平・太田陽子・小疇　尚・小池一之・野上道男・町田　洋・米倉伸之編，1985，写真と図でみる地形学，東京大学出版会，241ｐ．

黒田和夫，1965，新潟市周辺の表層地質（その１）空中写真による地表区分，写真測量，**4**，3，2－7

黒田和夫，1965，新潟市周辺の表層地質（その２）旧河道の写真地質学的考察，写真測量，**4**，3，40–44

松田磐余，1968，濃尾平野における空中写真による土壌判読，地理評，**41**，4，285–290

Miall, A.D., 1989, Architectural elements and Bounding surfaces in channelized clastic deposits : Notes on comparisons between fluvial and turbidite systems, Sedimentary Faces in the Active Plate Margin, A. Taira and F. Masuda, Eds., TERRAPUB, 3-15.

清水芳裕，1985，自然地形の変化と遺跡の形成過程，第四紀研究，**24**，(3)，183–188

武藤鉄司，1991，第13回ISC 巡検で観察したハットンの不整合，堆積学研究会報，**34**，105–111

海津正倫，1979，更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程，地理評，**52**，199–208

海津正倫，1981，日本における沖積低地の発達過程，地理評，**54**，3，142–160

Wilson, D. R. ed., 1982, Air photo interpretation for archaeologists, B T Batsford Ltd, London, 209p.

愛知県西尾市清水遺跡から出土したカメの遺体について
――なぜニホンイシガメのメスが多く出土するのか？――

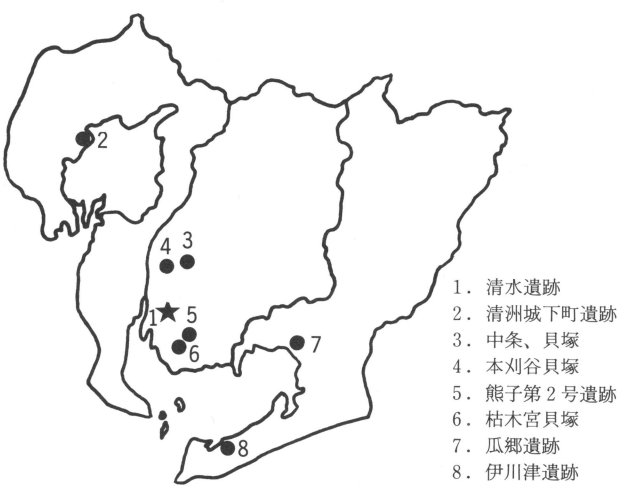
矢部　隆*
堀木真美子

1．はじめに

金子・丹羽（1985）は、人間生活の歴史を考察するためには、動物遺体の内容、あり方、意味づけを、その地域の動物相、採集・狩猟の技術、伝統などから探ってゆくことが必要条件であると述べ、「動物考古学」を提唱して動物遺体の考古学における重要性を強調している。また遺体の骨格からは、動物相、年齢構成、成長速度、あるいは栄養状態などを調べることができるし、遺体となった動物の生息条件から当時の地勢・植生などの古環境を推測することもできるので、遺跡から出土する動物の遺体は生物学的にも重要な資料と言えよう。

淡水棲のカメの遺体は、福島県の薄磯貝塚（山崎、1988）、東京都の青戸・葛西城址（金子、1975）や東京大学医学部附属病院地点（新見、1990）や中里遺跡（宮崎ほか、1987）、滋賀県の粟津湖底遺跡（松井、1992）など、日本各地の遺跡から出土している。愛知県内でも、豊橋市の瓜郷遺跡（直良、1963）、渥美町の伊川津遺跡（西本、1988）、西尾市の枯木宮貝塚（直良、1981）や熊子第２号遺跡（住吉、1977）、刈谷市の中条貝塚（直良、1968）や本刈谷貝塚（直良、1972）、清洲町の清洲城下町遺跡（矢部、1992）などから出土している（第１図）。カメは甲羅を持つため、脊椎動物の中では大型あるいは中型の哺乳類に次いで遺跡の中で保存され易い。カメの遺体の分析からは多くのデータが得られるにもかかわらず、日本各地の様々な遺跡から出土したカメの遺体はあまり重要視されず、十分な分析は行なわれてこなかった。そのような背景の中で、直良信夫が、1968年の報告で刈谷市の中条貝塚から出土したニホンイシガメを取り上げて、ニホンイシガメの採捕が特に愛知県三河湾周辺の古代人のみに限られていたかのような事実が存することに注意を促したり、刈谷市の本刈谷貝塚からのカメ類にニホンイシガメだけが数多く出土していることを1972年の報告で、強調したりしているのは注目に値する。また、矢部（1992）は清洲城下町遺跡の井戸から出土したカメの遺体を分析し、すべてがニホンイシガメのメスであること、およびカメの死に方が非常に不自然であることを指摘し、カメが祭事に使われた可能性を考察している。

本論文では、西尾市の清水遺跡の廃棄土坑ＳＫ113から出土したカメの遺体を分析し、記載する。そしてそれらのカメが食用にされていたか否かということを中心に、カメと人間生活との関わりについて考古学的考察を行なう。さらに淡水棲のヌマガメの分布様式が過去と現在で異なっている可能性についても生物学的考察を行なう。



第１図　カメ出土遺跡位置図

＊名古屋大学人間情報学研究科

2．愛知県に分布するカメ

縄文時代以降の愛知県の遺跡から出土する可能性のあるカメは、ウミガメを除くと、ニホンイシガメ *Mauremys japonica*、クサガメ *Chinemys reevesii* およびスッポン *Pelodiscus sinensis* の3種である。このうちスッポンは前2者とは科が異なり、骨格も前2者とは容易に区別できる。ニホンイシガメとクサガメは、

1）ニホンイシガメでは背甲後縁が鋸歯状であるが、クサガメではほぼ滑らかである
2）ニホンイシガメでは背甲の中央に鈍い隆条が1本だけあるが、クサガメでは背甲に3本のはっきりした隆条がある
3）年輪が磨耗しているような老齢な個体においては、イシガメのメスでは腹甲が膨らむが、クサガメのメスでは平面である

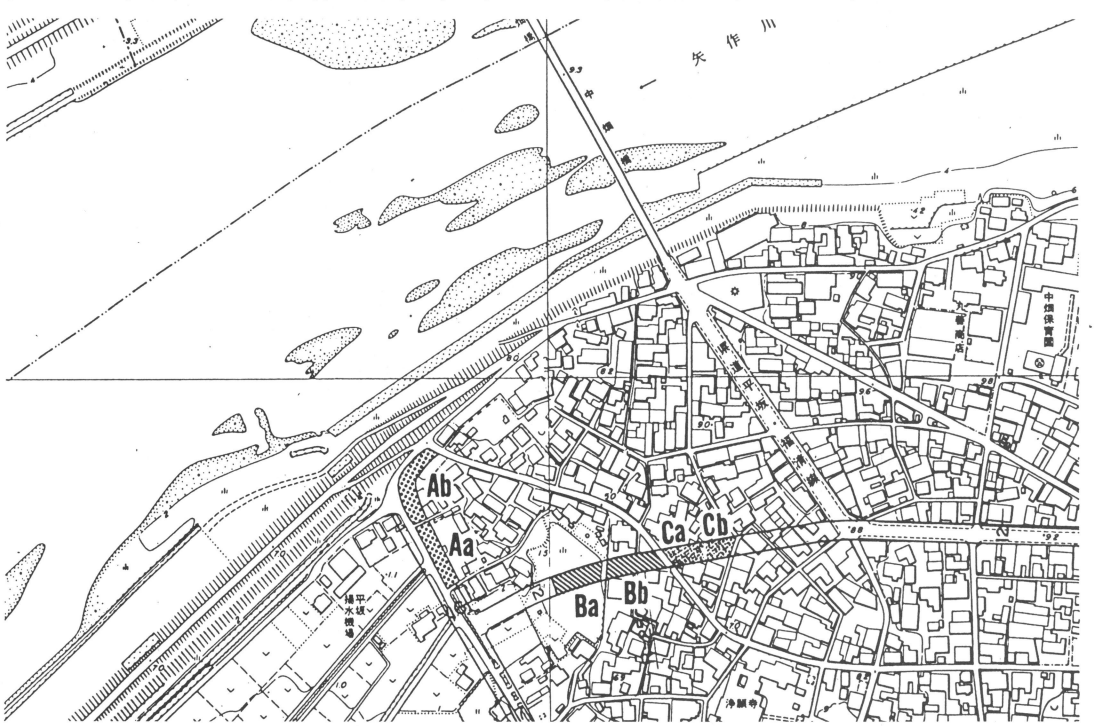
といった特徴で同定できる。

ニホンイシガメとクサガメの生息場所の違いについては定量的な研究はないが、前者は山麓部に、後者は平地に生息するのが一般的である（Yabe, 1989）。愛知県下では、ニホンイシガメは平地から山間地まで広く分布しており、特に谷川や水田、山間地の池などに多く見られるのに対して、クサガメは平野部にのみ生息しており山地では見られず、平野部ではニホンイシガメよりもクサガメの方が個体数が多い（原田、1984）、とされている。

3．出土状況

カメの遺体は愛知県西尾市の清水遺跡から出土した。本遺跡は縄文時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。カメの出土地点は89Ｃｂ区の廃棄土坑（ＳＫ113）であり、出土遺物から16世紀に形成されたと考えられている（第2図、写真1）。この土坑は直径約4ｍ、深さ約3.2ｍの大型の廃棄土坑で、壁はほぼ垂直に近い状態で掘り込まれていた。土坑の埋土は大きく3層に分かれ、下層の純貝層と上層の混土破砕貝層との間に薄い土層が間層として入っていた。その結果、2回の貝採取時期の間に埋土が形成されたものと考えられている。

カメの遺体は、他の遺物と共にブロックサンプルとして採取されたものである。発掘時に1個体だけは、甲羅があまりばらばらにならず、横に倒れた状態で確認された（写真2）。しかし他の遺体の出土状況は不明である。



第2図　清水遺跡発掘区（1：5000）「清水遺跡」（1992）より転写



写真Ⅰ　清水遺跡　89Ｃｂ区ＳＫ113

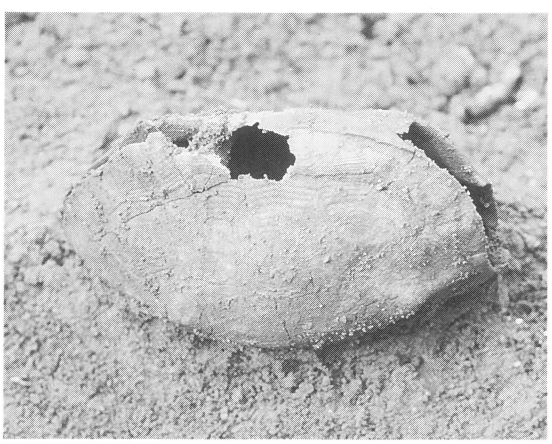


写真２　カメ出土状態

各部位の骨格には、骨板の縫合線を合わせることができるほど保存の良いものから、風化が進んでもろくなっているものまで様々な段階があった。縫合線の整合、風化の程度、大きさなどを元にして甲羅の骨格を個体ごとにまとめたところ、43個体が認められた。風化が著しくまとめられなかった甲羅の骨格もあるので、遺跡に存在していたカメは43個体よりも多い。カメの遺骨がさほど重要視されていなかったこともあって、骨格の収集は十分に行なわれたとはいえず、収集され損なった骨格の部位も多いと思われる。

４．骨格の分析

ａ．種の同定

個体ごとにまとめられた骨格を観察したところ、すべての個体において、１）背甲後縁が鋸歯状である、２）背甲の中央に鈍い隆条が１本だけある、３）年輪が磨耗しているほど老齢で大型の個体においては、腹甲が膨らんでいる、といった形態をしていた（図版Ⅰ・Ⅱ）。したがって、骨格をまとめることができた個体はすべてニホンイシガメと判定することができた。クサガメあるいはスッポンと判定できる骨片は全くなかった。また、風化が著しい骨片では種の同定が不可能であった。クサガメやスッポンの骨格の風化速度はニホンイシガメのその速度とそれほど差があるとは考えられないので、ニホンイシガメが多数確認されているにもかかわらず、クサガメやスッポンの骨片が土坑内に確認されなかったということは、それら２種のカメがその地域に全くもしくは極々少数しか生息していなかったことを示唆している。

ｂ．甲長の推定および性・年令の判定

遺体の甲長は、大きく保存の良い骨格の特定部分を測定し

出土個体の甲長／標本の甲長

＝出土個体の骨格の特定部分の長さ／標本の骨格の特定部分の長さ

という比例式を用いて推定した（第１表）。

Yabe（1989）によれば、ニホンイシガメの体の大きさの性的な差は非常に大きく、三重県多度町のある野生個体群においてはメスの甲長の最頻値は165㎜、オスのそれは95㎜であり、最も大きなメスの甲長は199.1㎜であるのに対し、最も大きなオスは甲長が127.5㎜であった。また、著者の一人がこれまでに測定したニホンイシガメのオスで、最も大きな個体は甲長145.4㎜であった（矢部、未発表）。したがって、甲長が150㎜を超えている個体はメスであると考えてよいであろう。

各遺体の骨板に残った年輪を数えることによっ

ておよその年齢を推定した。この場合、年輪の痕が残っているが齢査定が不可能なものは「高齢」、年輪が完全に擦り減っているものは「老齢」とした。

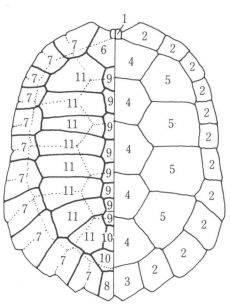
出土した各個体の推定甲長は、２個体を除いてすべて150㎜を超えており、メスと推定できた（表１）。番号42の個体は推定甲長が141㎜であり、約４歳という推定年齢に対して甲羅が大きいので、メスである可能性が高い。また、番号43の個体は約９歳という推定年齢に対して推定甲長が127㎜であり、個体番号42の性別の推定ほどはっきりとは言えないが、おそらくオスであろう。そうしてみると43個体中42個体、すなわち98％の個体がメスであると判定された。

遺体の平均推定甲長は178㎜（ｎ＝43、ＳＤ＝15.2、range＝127－211㎜）であったので、出土した遺体には大きめの個体が多いと言える。もしも廃棄土坑に落ちて自然死するのであれば、甲長150㎜以下の未成熟メスやオスも多数出土するのが自然であろう。未成熟メスやオスがほとんど出土していないということは、大きな個体が選択的に捕獲され、この土坑に投棄された可能性が高い。

また、老齢な個体や高齢な個体が多かったのは、体の大きな個体が多かったこと、すなわち十分に成長した個体が多かったことを反映していると思われる。なお、出土した甲羅以外の骨格の分析結果については今回は割愛する。

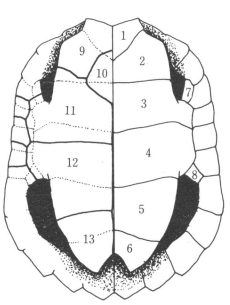
ｃ．骨格の損傷

今回の分析では、出土したカメが食用にされたか否かの確認が重要な目的の一つである。スッポン科のカメは背甲と腹甲が橋によって接続しておらず、解体の時には最初に背甲骨板の肋骨状になっている部分の先端に切れ目を入れ、背甲をくり抜いて解体することが多い（川崎、1982）。したがって骨格は破損していなくても解体されている可能性はある。しかしヌマガメ科やリクガメ科のカメの解体においては、甲羅の橋を切断（あるいは破壊）して腹甲を外し、内蔵その他を取りはずすのが一般的である。そこで橋を形成している左右の第３～７縁骨板、中腹骨板および下腹骨板を観察した。橋の状況は43個体中14個体で観察できたが、それら14個体の橋においては、人為的な切断あるいは破壊の痕跡は一例も見られなかった（第１表）。



イシガメの背甲の骨板と甲板の構成
左の太い線が骨板の縫合線、
右の実線と左の波線が甲板の境界線。

1）項甲板 nuchal scute
2）縁甲板 marginal sc.
3）臀甲板 supracaudal sc.
4）椎甲板 central sc.
5）肋甲板 costal sc.
6）項骨板 nuchal plate
7）縁骨板 peripheral pl.
8）臀骨板 pygal pl.
9）椎骨板 neural pl.
10）上臀骨板 suprapygal pl.
11）肋骨板 costal pl.



イシガメの腹甲の骨板と甲板の構成
左の太い線が骨板の縫合線、
右の実線と左の波線が甲板の境界線。

1）咽甲板 gular scute
2）肩甲板 humeral sc.
3）胸甲板 pectoral sc.
4）腹甲板 abdominal sc.
5）股甲板 femoral sc.
6）肛甲板 anal sc.
7）腋下甲板 axillary sc.
8）鼠蹊甲板 inguinal sc.
9）上腹骨板 epiplastron
10）内腹骨板 entoplastron
11）中腹骨板 hyoplastron
12）下腹骨板 hypoplastron
13）剣腹骨板 xiphiplastron

第３図　カメの骨格の各部位の名称

第1表．ニホンイシガメの出土骨の状況

個体番号	甲長(mm)	年齢	確認された部位	橋の破損	備考
1	211	高齢	neu4, R.cos2-5, L.cos2-6	?	
2	202	老齢	R.cos3-5, R.per7-8, R.epi, R.hyo, L.epi, L.hyo	?	
3	197	老齢	ent, R.epi, R.hyo, L.epi, L.hyo	?	
4	196	老齢	nuc, neu2-4, R.cos1-8, R.per5/8, L.cos1-6, L.per1-3	?	右第1～4肋骨板に破損が治癒した痕あり
5	195	高齢	nuc, neu1-5/7-8, sup1, R.cos1-8, R.per1-4, L.cos1-4, L.per1-2, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
6	192	約12歳	nuc, neu1/3-5/8, sup1-2, pig, R.cos1-8, R.per1-9, L.cos1-8, L.per1-4/6/8-11, ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
7	190	老齢	R.hyo, L.hyo, L.hyp	?	
8	189	老齢	R.hyo, R.hyp	?	
9	188	老齢	ent, R.epi, L.epi, L.hyo	?	
10	188	老齢	L.cos1, L.per1-3	?	
11	188	約12歳	nuc, neu1-6, sup1-2, R.cos1-8, R.per1-9/11, L.cos1-6/8, L.per1-3/11, ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
12	188	高齢	nuc, neu3, L.cos1-4, L.per1	?	
13	185	約11歳	nuc, R.cos1-5, R.per6-7, L.cos2-3, L.per5, ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
14	184	老齢	nuc, R.per1-3, L.cos1-3, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo	−	
15	184	老齢	nuc, neu1-8, sup2, pyg, R.cos1-9, R.per10/12, L.cos1-9, L.per1-3/6/9-12, ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	左右肋骨板および左右縁骨板がそれぞれ1枚ずつ多い
16	184	高齢	nuc, R.cos1, L.cos1-2, L.per1	?	
17	182	老齢	ent, R.epi, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	
18	182	高齢	ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo	?	
19	181	老齢	ent, R.epi, L.epi, L.hyo	?	
20	181	老齢	R.epi, R.hyo, L.epi, L.hyp	?	
21	180	老齢	ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	
22	180	高齢	L.cos4-6, L.per6-8	?	
23	179	老齢	R.hyp, R.xip, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	
24	179	約10歳	nuc, neu2/4-5, sup2, R.cos1-3/5-8, R.per1/7-11, L.cos1-7, L.per3/5-7/11, ent, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
25	177	老齢	ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	左中腹骨板～左下腹骨板に破損が治癒した痕あり
26	177	老齢	R.hyo, R.hyp	?	
27	176	老齢	ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	
28	176	老齢	R.epi, R.hyo, L.epi, L.hyo	?	
29	175	老齢	R.hyp, R.xip, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
30	175	老齢	R.hyo, L.hyo	?	
31	171	老齢	nuc, neu1-6, sup1-2, pyg, R.cos1-8, R.per1-9, L.cos2-8, L.per9-11, ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
32	170	約9歳	nuc, neu4-5, R.cos1-5, L.cos1-5, L.per1	?	
33	170	高齢	neu2-8, sup1-2, pyg, R.cos2-8, R.per5-10, L.cos2-8, L.per6-11, R.hyp, R.xip, L.hyo, L.hyp, L.xip	−	
34	168	老齢	nuc, neu1-3, R.cos1, R.per1-2, L.cos1, L.per2	?	
35	167	老齢	R.hyo, R.hyp, R.xip, L.hyo, L.hyp	−	
36	167	高齢	neu1-2, R.cos1-4, L.cos1, L.per3-4, ent, R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.epi, L.hyo, L.hyp	−	
37	165	老齢	R.epi, R.hyo, L.epi	?	
38	162	老齢	R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.hyo, L.xip	?	
39	159	約7歳	R.epi, R.hyo, R.hip, R.sip, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	
40	158	高齢	R.epi, R.hyo, R.hyp, R.xip, L.hyo, L.hyp, L.xip	?	
41	153	約6歳	neu3-5, R.cos1-5, L.cos2-6	?	肋骨板の先端に肋骨が見える程度に若齢
42	141	約4歳	nuc, R.cos1, R.per1-2, L.cos1-2, L.per4-5	−	
43	127	約9歳	R.cos5-6, R.per7, R.epi, R.hyo, R.hyp, L.epi, L.hyo, L.hyp	−	

注1．年齢は、年輪が完全に擦り減っているものを「老齢」、年輪が残っているが齢査定が不可能なものを「高齢」とした。
注2．部位の略号、R：右、L：左、nuc：頂骨板、neu：椎骨板、sup：上臀骨板、pyg：臀骨板、cos：肋骨板、per：縁骨板、ent：内腹骨板、epi：上腹骨板、hyo：中腹骨板、hyp：下腹骨板、xip：剣腹骨板
注3．同一名の骨板は、体の前方から順番に1、2、……と番号を振った。
注4．確認された部位の欄において、例えばL.per1-3/6/8-9/11は左第1、2、3、6、8、9、11縁骨板が確認されたことを示す。
注5．橋の破損は、「＋」が破損あり、「－」が破損なし、「？」が不明。

5．まとめ

西尾市の清水遺跡から出土したカメは43個体以上であり、ほとんどすべての個体がニホンイシガメのメスであった。大型の個体が多く出土し、小型の個体が非常に少ないことから自然死とは考えがたく、大きな個体が選択されて投棄されたものと考えられる。ニホンイシガメが人間によってどのように利用されたのかはまだよく解からない。しかし、甲羅の橋を破壊された様子がないことから、食用にされた可能性は低いと思われる。

人々がニホンイシガメを何に使ったのか、食用にしたのかという疑問は、中条貝塚（刈谷市）・本刈谷貝塚（刈谷市）・清洲城下町遺跡（清洲町）の井戸など他の遺跡から出土した遺体を含めて、未だに解決できていない。この疑問を解決するためには、遺跡から出土したカメの遺体に関するより一層の考古学的研究に加え、カメそのものに関する民俗学的研究が不可欠である。カメに関しては、甲羅がひっくり返っていたか否かとか、骨格がばらばらになっていたかまとまっていたかといった出土状態によって自然死か否かが推定できることもあり、骨格を残さず収集する努力と同時に出土状況をできるだけ正確に記録する努力が必要である。

清水遺跡のある岡崎平野南部は、地勢的にはクサガメが分布していてもおかしくない地域である。クサガメのメスはニホンイシガメのメスに比べてひとまわり（甲長にして数cm、体重にすれば約1.5倍）大きくなるので、単に大きなカメを選ぶのであればクサガメの方が適している。にもかかわらずニホンイシガメのメスばかりが大量に出土したのには次の２つの可能性が考えられる。一つは、当時この地域ではクサガメが低密度だったか、あるいは分布していなかったかという可能性である。二つめは、当時の人がニホンイシガメを選択的に利用した可能性である。いずれの場合にせよ、ニホンイシガメは、大型の個体を集めるのに十分なほど生息密度が高かったのであろう。同じ西尾市の熊子２号遺跡（住吉、1977）や枯木宮貝塚（直良、1981）、豊橋市の瓜郷遺跡（直良、1963）、刈谷市の中条貝塚（直良、1968）、や本刈谷貝塚（直良、1972）、あるいは清洲町の清洲城下町（矢部、1992）からも、清水貝塚と同様にニホンイシガメだけが出土していることを考え合わせると、数百～数千年前の尾張から三河にかけての平野部にはニホンイシガメが比較的高い密度で分布していたのであろう。このことは、ニホンイシガメが非常に少なくむしろクサガメが多い現在のカメの分布とは非常に異なっていたことを示しており、このような変化が起こった原因を今後解明してゆく必要がある。このように愛知県下では今のところニホンイシガメの出土例が多いが、唯一渥美町の伊川津遺跡からクサガメの遺体が出土している（西本、1988）。今後愛知県内での現在のカメの分布様式を詳細に調査するのと並行して、尾張や三河、および東海地方各地の遺跡から出土するカメによって過去の分布様式も推測していきたい。

【謝辞】

この論文に目を通され、貴重なご意見をくださった愛知県立明和高等学校の森勇一氏に深く感謝いたします。また、カメの骨格の復元を担当された愛知教育大学の箕浦由香氏と愛知県埋蔵文化財センターの中村明実・服部恵子氏に深く感謝いたします。

引用文献

金子浩昌（1975）青戸・葛西城址Ⅳ・Ⅴ区濠出土の動物遺体．青戸・葛西城址調査報告書Ⅲ．東京都教育委員会，197－260．

金子浩昌・丹羽百合子（1985）動物遺存体と考古学．季刊考古学，11．雄山閣出版．14－16．

川崎義一（1982）スッポン――習性と新しい養殖法――．農山漁村文化協会，101p．

住吉政浩（1977）自然遺物．熊子第２号遺跡，西尾市教育委員会．39．

直良信夫（1963）動物性出土品．瓜郷，豊橋市教育委員会．95－104．

直良信夫（1968）中条貝塚発掘の脊椎動物遺体．中条貝塚，刈谷市教育委員会．37－40．

直良信夫（1972）本刈谷貝塚発掘の脊椎動物遺体．本刈谷貝塚，刈谷市教育委員会．88－94．

直良信夫（1981）獣骨．枯木宮貝塚Ⅰ，西尾市教育委員会．５－35．

新見倫子（1990）医学部附属病院地点出土の動物依存体．東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３医学部附属病院地点，東京大学遺跡調査室．912－922．

原田猪津夫（1984）爬虫類．愛知の動物，愛知県郷土資料刊行会．242－257．

西本豊弘（1988）動物遺体の記載：爬虫類．渥美町埋蔵文化財調査報告書４　伊川津遺跡（本文編），渥美町教育委員会．267．

松井　章（1992）粟津湖底遺跡第３貝塚のブロックサンプルの動物依存体．粟津湖底遺跡，滋賀県教育委員会．67－94．

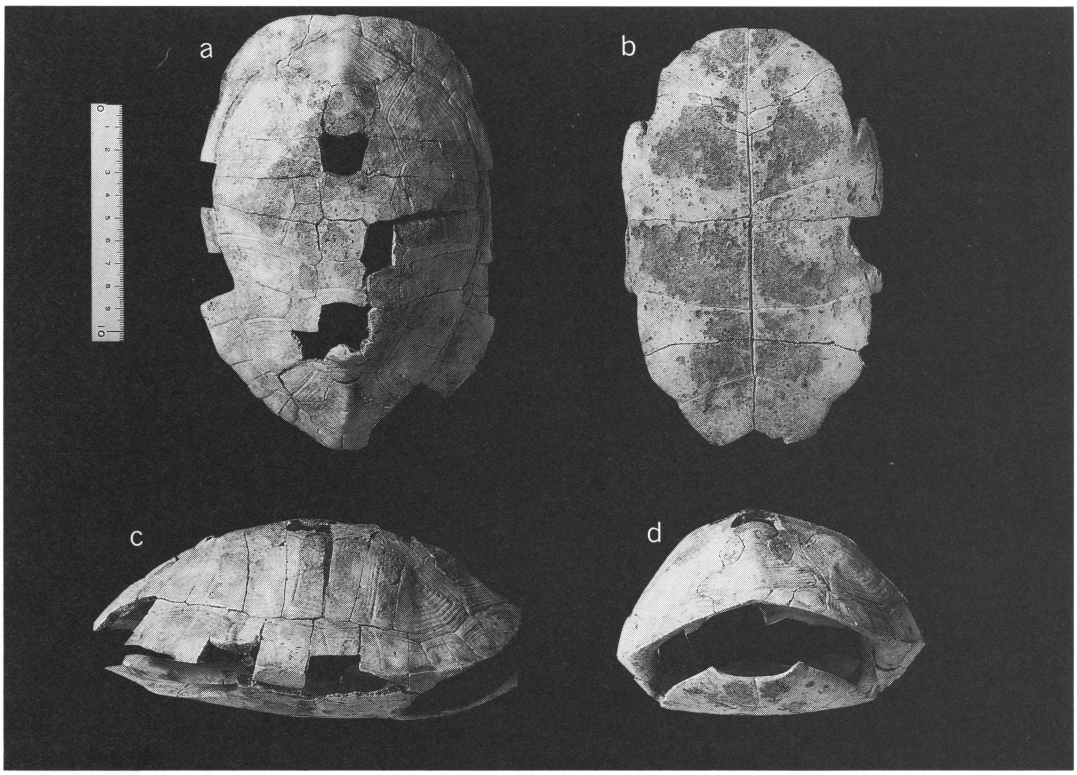
宮崎重雄・三島弘幸・吉田健一（1987）中里遺跡の動物遺体．中里遺跡２，東北新幹線中里遺跡調査会．３－62．

Yabe,T.(1989)Population structure and growth of the Japanese pond turtle, *Mauremys japonica*. Japanese Journal of Herpetology 13(1)：7-9.

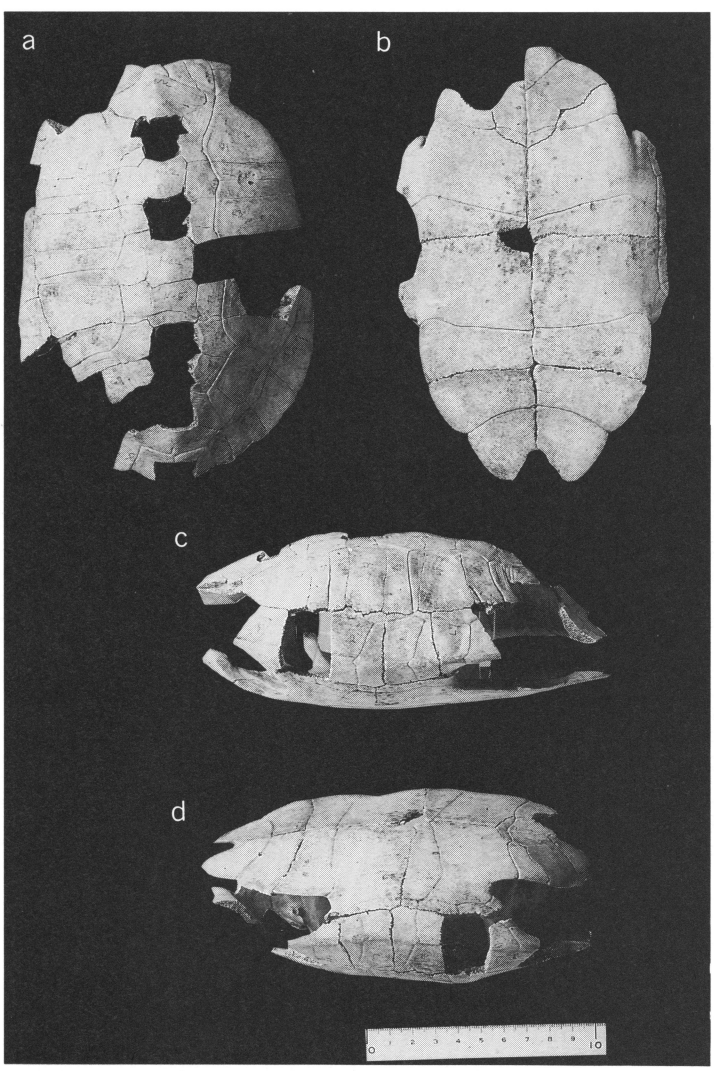
矢部　隆（1992）井戸出土のカメの遺体．愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第27集清洲城下町遺跡（II），愛知県埋蔵文化財センター．173－187．

山崎京美（1988）動物依存体．いわき市埋蔵文化財調査報告書第19冊　薄磯貝塚，いわき市教育委員会．383－519．

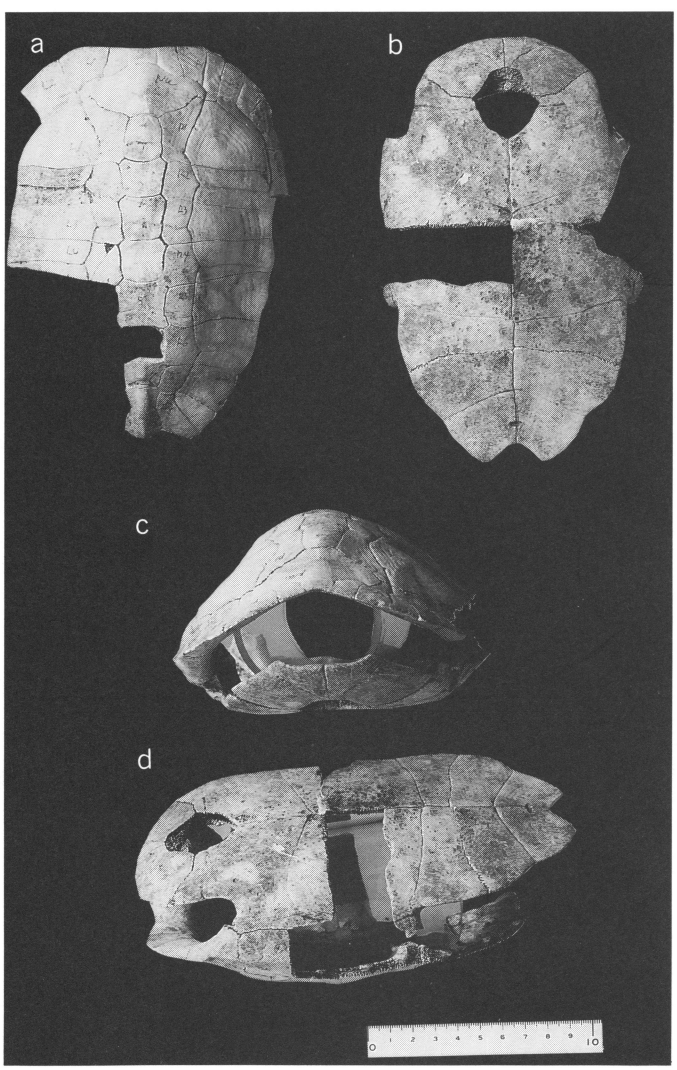
図版Ⅰ



No. 1
a．背甲
b．腹甲
c．右側面
d．正面

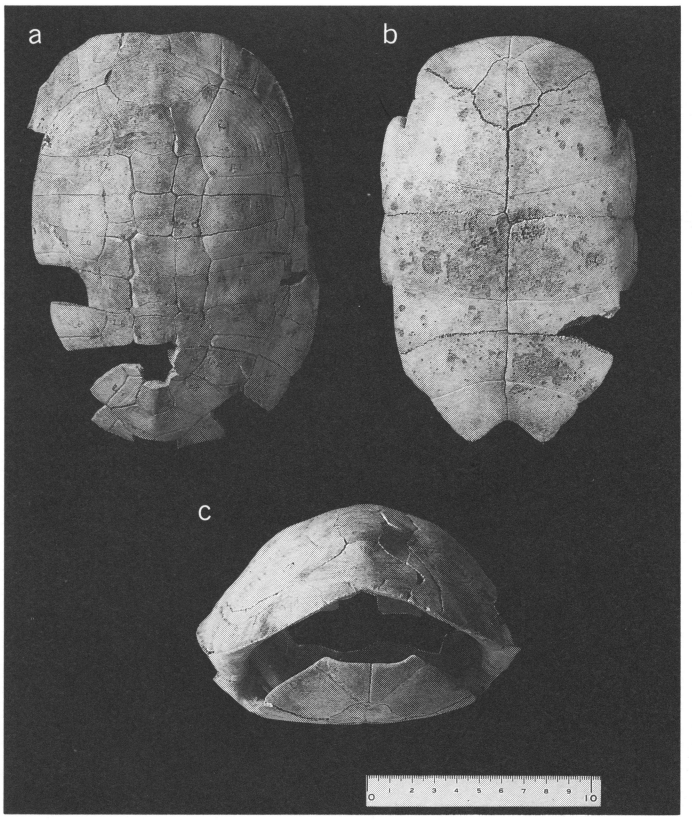


No. 2　a．背甲　b．腹甲
c．右側面　d．腹甲左側面

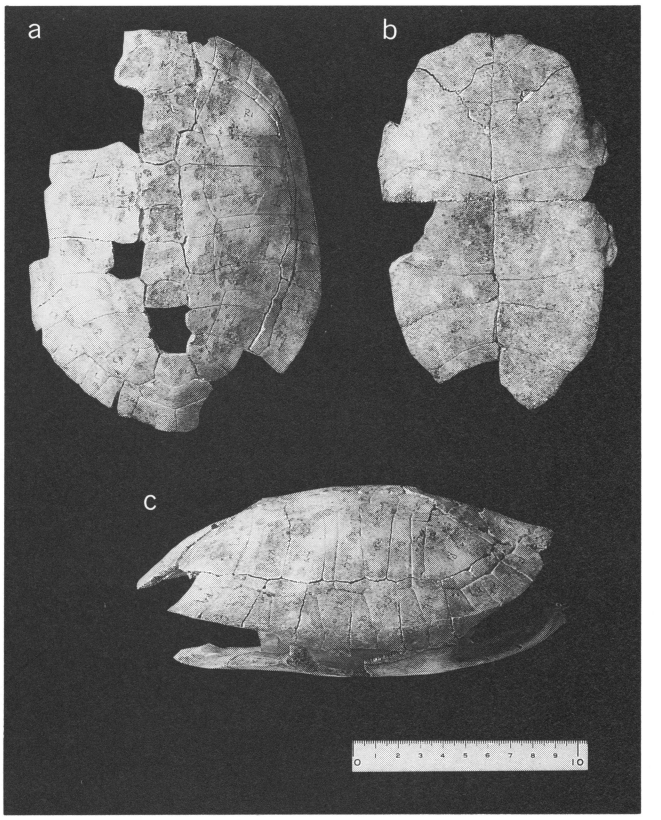


No. 3　a．背甲　b．腹甲
c．正面　d．腹甲右側

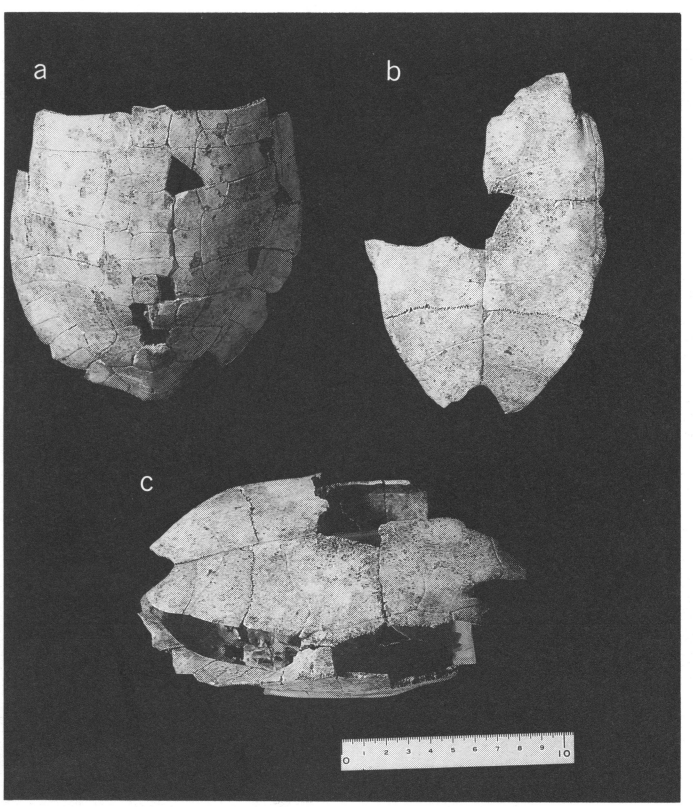
図版II



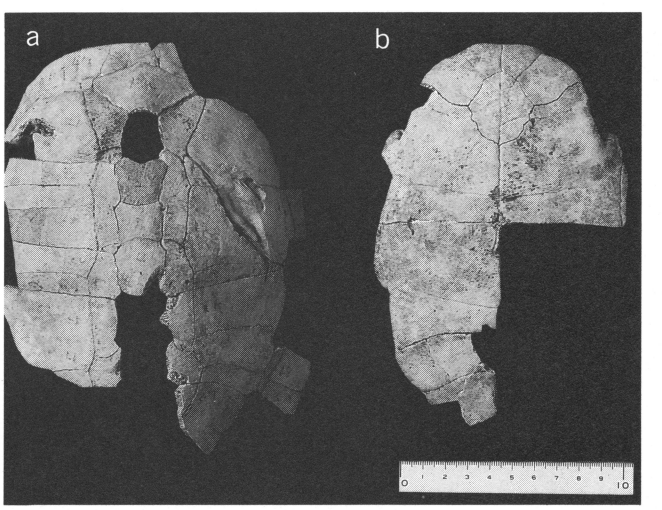
No. 4　a．背甲　b．腹甲　c．正面



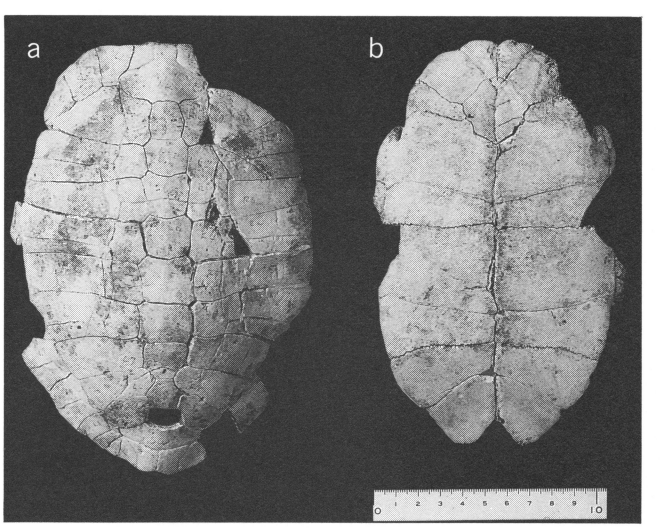
No. 5　a．背甲　b．腹甲　c．左側面



No. 6　a．背甲　b．腹甲　c．腹甲左側面



No. 7　a．背腹　b．腹甲



No. 8　a．背甲　b．腹甲

考古学的報・論文における引用文献、参考文献、註（注）

加藤安信

Ⅰ．はじめに

毎年度、遺跡調査報告書や考古学的論文が様々な機関や雑誌類などを通じて大量に発表される。遺跡調査件数が増加し、また市民社会の中で考古学的成果が一般的に受け入れられて普及化してきている現在においては、その記述に及んだ情報たるや膨大な量になりつつある。報文作成においても、論文作成においても、ひとつの事象や〈モノ〉を説明していくのに、多くの参考資料や他者の考え方に依拠したり、その一部を引用していかなければ、記述は十分に展開してはいかない状況にある。とりわけ、あることがらや用語を新たに定義しようとする場合にあっては、関連資料や関連情報の把握は入念になされていなければならない。いかに簡便なものであっても、遺跡調査報告書がリサーチ・ペーパーの一種であることはまちがいないわけだから、作成においては同様の手順が求められており、とくに事実記載に加えて分析・考察を行なおうとする場合には、他資料参照は必須条件となってくる。

ところで、報・論文作成を行うに際して他資料を参照する場合には、通常、註（注）、引用文献、参考文献といった方法が採られる。その引き方も様々で、文中で参照を行った箇所にパーレンでくくって番号を付け、章または全体の末尾に番号順に文献を列記していく方法や、本文行内にパーレンを付けそこに参照した報・論文の執筆者名と発行年とを記入し、同じく章または全体の末尾に五十音順に列記していく方法などがある。だがそのスタイルは様々であり、膨大な報・論文が作成され続けていながら、統一されるには至っていない。むしろ子細に点検してみると、同一の発行機関でありながらスタイルの不統一がみられる場合があるし、さらに註（注）、引用文献、参考文献の引き方については混乱が認められることさえままみられる。愛知県埋蔵文化財センター刊行の調査報告書でも残念ながら混乱と不統一が諸処にあり、極端な例においては章毎に異なるといった恥ずべき不統一すら見受けられる。

そこで、この小論においては、註（注）、引用文献、参考文献に関する考え方を再検討し、少なくとも愛知県埋蔵文化財センターにおいては統一を図ることができるようにすべく、若干の私見を述べる。

Ⅱ．実態分析

まず始めに、身近な報告書・論文の内から近年に発行されたものを幾つか取り上げて実態を解剖してみる。

⑴愛知県埋蔵文化財センター報告書

Ａ．『阿弥陀寺遺跡』(1990)

「註」と「文献」は区別されており、すべて巻末に集められて、章単位でその内容が「註」番号順に列記されている。「註」の殆どは本文の補足説明またはコメントといったもので、本文中の引き方は本文行内上端にパーレンでくくり註番号を付ける形態。一部に文献を指している「註」もある。「文献」の多くは本文中には指示されておらず、章単位の「註」の後に執筆者、発行年、「論文名」、『所収書名』、発行機関、ページ数の順に並べられている。参考文献といった意味であろう。だが、編集者による統一的な編集方針は窺われる。

B．『廻間遺跡』(1990)

註と文献とは区別されず、全てが「注」として扱われ、各章末におかれている。ただし殆どが引用または参考文献である。本文中の引き方は本文行内上端に右片パーレンでくくって註番号をつける形態。文献名の表記は基本的には前記Aと同じであるが、発行機関とページ数は省略されている。編集者の編集方針は概ね保持されているといえる。

C．『名古屋城三の丸遺跡（Ⅰ)』(1990)

「註」が各章末に、そして「参考文献」が巻末に示されている。「註」は註と文献とからなっており、両者の区別はない。その引き方は文中行内上端にパーレンでくくって註番号を付すスタイルで、「註」の中の文献名の表記の仕方は、基本的には執筆者名、「論文名」、(『所収書名』、発行年）であるが、発行機関、『書名』、発行年のみの記載になっている例も幾つか見られる。不統一で、区別の基準は分からない。この区別は巻末の参考文献でも同じようにみられる。

D．『小田妻古窯跡群』(1992)

各節末に「註」として記されている部分が多いが、節によっては「文献」あるいは「引用文献」となっている場合も見られる。後者は自然科学的分析の節に限られている。「註」はいわゆる註と文献とが区分されておらず、全て一括して「註」とされている形態。引き方は、前者では文中行内上端に右片パーレンでくくって註番号をつけ、文献名も執筆者名、発行年、「論文名」、『所収書名』を原則としているようであるが、中には発行機関、発行年、『書名』のみとなっている例も含まれていて不統一である。いっぽう後者では、当該部分に（執筆者姓、発行年）を記し、一覧では執筆者名、(発行年)、「論文名」、『所収書名』、発行機関、ページ数の表示となっている。

E．『山中遺跡』(1992)

「註」としている部分と「文献」「引用文献」としている部分とがみられ不統一。各節末にまとめられている。ひとつの節を除き殆どの「註」では、いわゆる註と文献とが区別されておらずに一括されている。「註」は本文行内上端にパーレンあるいは右片パーレンでくくって註番号を付ける形態で、執筆者名、発行年、「論文名」、『所収書名』、発行機関の順に記されるが、中には発行機関が省略されている例も見られる。ある節では「註」と「参考文献」とが明瞭に区別され、「註」は本来のように本文の意味の解釈や説明となってはいるが、「参考文献」では報告書の引き方に発行機関、発行年、『書名』というスタイルも見られて、統一されてはいない面もある。また、「引用文献」では本文中に出てくる執筆者の次に（発行年）が記される形態をとりながら、引用文献と参考文献とが混在しているようでもある。

F．『朝日遺跡Ⅱ（自然科学編)』(1992)

章、節という区分がなく、全て節あるいは単独論文の集合といった構成をとっている。したがって、参照された「文献」は全て各論文の末尾に列記される形態で、本文中の引き方は、文中行内にパーレンを付けその中に執筆者姓、発行年を明示する自然科学の論文通有のスタイルをとっている。「文献」名の表記の仕方は、ひとつの節を除いて基本的には、執筆者名、(発行年)、論文名、所収書名、発行機関、ページ数の順序で統一されている。雑誌類のように分かりきっている場合や書名の中に発行機関が明示されているような文献については、発行機関が省略されている。唯一の例外は考古学的記載の部分で、ここでは執筆者名が明らかにされず、それに代わって発行機関が記されているのみとなっている。

このように、愛知県埋蔵文化財センター発行の報告書ひとつを取り上げてみてもわかるように、報告書における註、引用文献、参考文献の引き方は様々で統一がとれてはいない。これは設定され

た記載要項が遵守されてはいないことを表すと同時に発行機関としての不徹底さをも示していることになる。そして、さらにこれに加えて執筆・編集者自身の註、引用文献、参考文献の概念についての理解不足も少なからず作用しているものとみられる。

⑵『朝日遺跡Ⅰ～Ⅳ』(1982) の引用のされ方に関する二、三の事例

上記は自己批判的な分析であるが、さて、身近な資料がどのようにして他者に利用されているか、という点についても若干の言及を加え参考資料としてみたい。取り上げる素材は、『朝日遺跡Ⅰ～Ⅳ』(1982) である。

A．愛知県教育委員会　1982　『朝日遺跡』

これは最も多く認められる利用のされ方で、上記の⑴―CからFに混在して用いられている形態と同類である。遺跡調査報告書の中で汎日本的に使用されている形態のひとつといってもよい。われわれもこれまでによく用いてきたし、またこれからも使用してしまいがちな形態である。だが、よく考えてみると、冒頭に発行機関が記される形になっていて執筆者名はどこにも表れてはいない。もちろんこの場合は発行機関というよりも組織名の意味の方が強いものとみられる。引用文献ではなく参考文献として列記するのであればこの表記法でもよいのかも知れないが、その場合でもやはり『書名』、発行年、発行機関の順にしたほうが適切であると思われる。

B．石黒立人他『朝日遺跡Ⅳ（土器図版編）』　愛知県教育委員会　1982

これは『大阪府立弥生文化博物館研究紀要第2集』に所収された「弥生土器地域色顕在化の構図―中期前葉の近畿とその周辺の甕形土器の製作技法と系譜を中心に―」という論文末尾の「註」の中に見える。図版編の執筆、編集者が明示されている例であるが、しかしここには明らかな誤謬がある。石黒立人は『朝日遺跡Ⅳ（土器図版編）』に編集者としても執筆分担者としても加わってはいないし、またそうであるような誤解を与える記述もなされてはいない。

C．高橋信明編　『朝日遺跡』　愛知県教育委員会・第一法規社、1982

これは『古代学研究』121号に所収された「青銅器の埋葬と王墓の形成」という論文末尾の「註」の中に見えるものであり、編集者名を明らかにした形態がある。だが、高橋信明が編集者であるとは報告書には記されてはいないから、ここにも同じような単純な誤りがみられる。

D．高橋信明・加藤安信　『朝日遺跡』(愛知県教育委員会　1982)

これは『服部遺跡発掘調査報告書Ⅱ〈本文編〉』(1985) に見えるものである。かなり的確さを増してきたようにみえるが、しかしここでも引用あるいは参照した部分についての記載が欠けている。これは弥生土器についての記述部分を指していると理解されるが、この表記では2者によって全てが作成されたように受けとめられてしまうことになる。

このように、註、引用文献、参考文献の表示の仕方の中には、時として誤りが認められることすらある。報・論文の価値を減少させるような印象を与えないためにも、正確な記述が求められる。

Ⅲ．註、引用法の明解な報・論文

そこで次に、参考にすべき他機関発行書物の註の引き方と引用例を幾つか示してみる。

A．『平城宮発掘調査報告書』

註、引用文献ともに区別なく脚註の形態で同一ページ下段に表記される。本文中では本文行内上端に右片パーレンでくくって註番号がつけられ、文献の列記の仕方は、執筆者名、「論文名」、『所収書名』、発行機関、発行年、ページ数の順となって

いる。ただし、報告書の多くは発行機関、『書名』、発行年、ページ数のみの表記となっている。註も通番で同一ページ内に書き込まれている。

B．『古代文化』

引用文献は「註」として扱われる。その引き方は、本文行内上端に右片パーレンでくくって註番号をつけ、引用順に執筆者名、「論文名」(『所収書名』、発行地名、発行年)、ページを表記する形態である。これは、遺跡調査報告書を引用する場合でも基本的に同じであって、変わるところがない。

C．『国立歴史民俗博物館研究報告』

「註」と「参考文献」は明快に区分されている。註は本文を補足する説明に限られ、尾註の形式をとる。本文中の引き方は、本文行内上端にパーレンで囲って番号をつけるスタイル。文献はすべて参考文献として扱い、本文行内の指示の仕方は[執筆者姓、発行年]、また参考文献一覧は、執筆者名、発行年：「論文名」(『所収書名』号数、ページ数、発行機関)、または執筆者名、発行年：『書名』、発行機関の順となっている。

D．通商産業省工業技術院地質調査所発行『地域地質研究報告』

註と「文献」とは明確に区分されている。註は脚註の形式で、本文行内上端に右片パーレンを用いて註番号を付し、当該ページ下段に列記される。「文献」については、引用例として執筆者名、(発行年)、「論文名」、『所収書名』、ページの順が明示されており、本文行内には（執筆者姓、発行年）と表記される。II—(1)—Fの『朝日遺跡II（自然科学編)』とほぼ同一であり、後述する欧文註、引用文献の場合と共通している。

それでは、欧米の場合はどうであるのか。管見に及んだ範囲内で1、2例を紹介してみると、引用の仕方としては、note（footnote)、reference（literature) cited、referenceの3種が認められ、第3者の場合が最も多い。これらはそれぞれ註(脚註)、引用文献、参考文献に相当するのであろうが、註、(脚註）を除く後2者の間の区別はあまり厳格ではないようである。

E．『Man』

noteとreferenceとは明瞭に区別されている。noteの引き方は本文行内上端に註番号をつけ、文末に一括して記載する方法をとっている。これはendnote、つまり尾註に当たる。referenceは本文中の執筆者名の後に（発行年）を記入し、文末には執筆者名、発行年、「論文名」、『所収書名』、発行機関を列記する方法である。所収書が雑誌である場合には引用ページ数が入る。

F．『Current Anthropology』

註とreferences citedとは明瞭に区分されている。註はfootnoteすなわち脚註のスタイルで、本文行内上端に註番号を打って、同一ページ下段に記入する形式をとる。references citedの配列法は『Man』と全く同一。

Ⅳ．語句の定義と一般的な用いられ方

さらに引続き、やや堅苦しくなるが、国語辞典や漢和辞典に示された語句の定義の面からも検討してみる。

(1)引用文献

「引用文献」自体の説明はないが、引用とは、「他の文章や事例または古人の語を引いて、自分の説のよりどころとすること」(岩波書店、広辞苑)、「自分の論の根拠などを説明、証明するために、他人の文章や事例、または古人の言などを引くこと」(小学館『国語大辞典』)、「証拠・資料として、他人の文章や事例を自分の文章や話の中に使うこと」(学習研究社『漢和大辞典』）などとある。

考古学的報・論文の場合にあっては、他の文章をそのまま引用するような例は余りなく、その殆どが他の文献に示された事例を引くことに相当している。したがって、こうした事例の引用までを

も強いて一般にいう註に加えるとするならば、それは出典註に該当するといえよう。

⑵参考文献

同じように「参考文献」自体の説明はない。参考とは、「いろいろ他のものと引き比べて自分の考えを決める手がかりにすること。また、その手がかり。」（小学館『国語大辞典』）とか、「他の物事を引き合わせて自分の考えを決める際の足しにすること。また、その材料。」（学研『国語大辞典』）、「自分の考えをまとめるため、種々の資料などを利用し、考えること。またその資料。」（三省堂『大辞林』）などと説明されている。

したがって、報・論文作成に当たって、特にその文献に書かれた考え方を引くのではなく、遺構図面類や出土遺物など、出土の事実を確認的に述べていくような場合には、参考文献としてあげておくことが可能であると考えられる。

⑶註（注）

註とは、「本文の意味を補足したり詳しく説明するために書き入れること。また、その文句。注解。」（小学館『国語大辞典』）、「本文中の語句や事項などについて、補足したり詳しく説明したりすること。またその説明。」（三省堂『大辞林』）などと説明されている。

このため字句どおりに解釈するならば、註は文献とは明確に区分される内容を持っているといえるわけで、文献の引用を註として扱うことはふさわしくないと考えられる。

⑷一般的な用いられ方

一般に用いられている技法はどのようであるのか。ここでは中村健一（1988）の考え方を紹介してみよう。

中村によれば、「引用」とはあくまでも原文そのままの引用を指していて、考え方や事例を引く引用はむしろ出典註あるいは文献対照註として扱われている。このため、Ⅳ—⑶で示した註は全て補足註として分類されることになる。註における配列順の統一は必要であり、執筆者名、『書名』［巻数］発行所名、刊行年、ページ数の順を標準としている。また、雑誌の場合の配列は、執筆者名、「論文名」『雑誌・論文集』巻号数、［出版社名］、刊行年［月］、ページ数を基準としている。文中での引き方は、パーレンでくくった本文行内での行間方式や行内方式、あるいは欧文註のような方法を紹介している。

Ⅴ．まとめ

以上、表現上におけるスタイル、形式的なことに拘って述べてきた。はじめに示したように大量に生産される調査報告書の類は確実に研究図書に含まれるリサーチ・ペーパーであり、また、引用の問題は著作権に関連する内容を持つものでもあるわけだから、註、引用文献、参考文献の記述の仕方に対しては一定の配慮が与えられなくてはならない。これまでに述べてきたことがらに基づいて、私見を次のようにまとめておきたい。

⑴　註と引用文献・参考文献は区別して使われるべきである。註は字句本来の定義にあるように、本文の意味を補足したり、詳しく説明したりする場合に限って用いられるべきであり、その意味では『国立歴史民俗博物館研究報告』と『阿弥陀寺遺跡』（1990）の使用法が最も適切である。註の形式は脚注でも尾註でもよく、この方法をとるならば、欧米のnoteやfootnoteの使用法と共通することになる。

⑵　引用文献については、原文をそのまま引用する場合のみに限定する必要はなく、執筆者の考え方や事例報告を引く場合に対しても用いることが可能である。参考文献については、論述を進めるに当たって参考にしたり何等かの手がかりを得ることができた文献に限って使用するとよい。

⑶　その引き方については、本文行内にパーレン

を用いて番号をつける形態でもよいし、本文行内にパーレンをつけその内に執筆者姓と発行年とを記入する形態のどちらでもよい。だがしかし、前者の方法をとると註番号と紛らわしくなる。いっぽう後者の方法は自然科学分野や欧米の報・論文において使用されている形式と共通しているため、ここでは後者を推奨したい形式として挙げる。

⑷　文献の配列順については、上記⑶のうちの後者を推奨している立場からすれば、執筆者名、発行年、「報・論文名」『所収書名』、発行機関の順が望ましいことになる。雑誌の場合には、発行機関を省略し、これに代わって巻号数とページ数とを書き入れる。これによって、引用の対象となった部分の文責がいっそう明確になっていくだろう。参考文献の場合は、その利用の形態からして、編集者、発行年、『書名』、発行機関の順または『書名』、発行年、発行機関の順でもかまわない。また、それらの配列位置については、章末であっても巻末であっても可である。

以上は主として愛知県埋蔵文化財センターの報告書を例にとって見解を提示したものであるが、概ね全国的にも受け入れられている方法でもある。このため、不統一は一見して例外的事項のように見えるかも知れない。しかし現実には不統一な使われ方がいたるところで散見されており、今後は国際的使用法をもふまえた共通認識に立って使用されていくことが強く望まれるといえよう。

引用文献

中村健一　1988　『論文執筆ルールブック』　日本エデタースクール出版部

（なお、本文中において書名等を示した辞典類や事例として提示した報告書については、引用文献の項では省略した。）